

2022(令和4)年度

# 障害者スポーツを取巻く 社会的環境に関する調査研究

— 選手のキャリア、TV放送、選手認知度、テレビCF放送、ユニ★スポ体験の効果に着目して —

## 第1章

障害者スポーツ選手の  
キャリア

## 第2章

テレビメディアによる  
障害者スポーツ情報発信環境調査

## 第3章

パラリンピアンに対する  
社会的認知度調査

## 第4章

テレビコマーシャルにおける  
障害者スポーツ調査

## 第5章

ユニ★スポ体験での児童の意識変容調査、  
ボッチャ教材活用事例

## はじめに

YMFS 調査研究  
障害者スポーツ・プロジェクト・リーダー  
藤田紀昭

ロシアがウクライナに軍事侵攻する中で、冬季パラリンピック北京大会が開催された。日本は金メダル 4 個を含む 7 個のメダルを獲得した。メダルランキングは 9 位。2006 年の冬季パラリンピック以降、日本の金メダル数は 3~4 個である。軍事侵攻を受けているウクライナは人口約 4 千万人、北京大会では金メダル 11 個を含む 29 個のメダルを獲得し、メダルランキングは開催国、中国に続く 2 位であった。人口だけでなく、国土の広さや気候、政治体制、GDP 様々なものがオリンピック、パラリンピックのメダル数に影響していると言われている。

日本における障害のある成人の週 1 回以上スポーツをしている人の割合は約 3 割、ここ数年で徐々にではあるが実施率が上昇してきている。一方でスポーツを過去一年全く実施していないという障害者が約 4 割いる。この割合を下げ、スポーツする人を増やすことが、遠回りではあるが、パラリンピックにおけるメダル獲得を増やす道であるように思われる。

本研究プロジェクトは障害者スポーツの社会的実態を明らかにし、障害者のスポーツ環境を改善していくための基礎資料を提供すべく、2012 年から研究を開始し、11 年目を迎えた。この間実施した調査研究は表に示した通りである。今年度は、障害者スポーツ選手のキャリア調査、テレビメディアによる障害者スポーツの情報発信環境調査、パラリンピアンに対する社会的認知度調査、テレビコマーシャルにおける障害者スポーツ調査、ユニスポ体験での児童の意識変容調査、ボッチャ教材活用事例について報告を行う。

	2012(H24)	2013(H25)	2014(H26)	2015(H27)	2016(H28)	2017(H29)	2018(H30)	2019(R1)	2020(R2)	2021(R3)	2022(R4)
大学における障害者SPの現状	○		○		○	○	○	○			
パラリンピアン のスポーツキャリア		○									
障害者スポーツ選手 のスポーツキャリア								○	○	○	○
コロナ禍における アスリート活動状況									○		
パラリンピック 指導者の現状		○									
障害者スポーツ 競技団体活動		○					○				
障害者SP選手 発掘育成システム			○								
パラリンピアン の社会的認知度			○		○		○			○	○
ジャバラ選手の スポーツキャリア				○							
パラリンピックTV放送					○					○	○
地域現場の実態						○	○	○			
障害者SP関連CF状況						○					○
チャレンジ！ユニ★スポ ケーススタディ								○	○	○	○

第1章 障害者スポーツ選手のキャリア調査では新たに実施したインタビュー11人分の報告と、今年の11人を含む2019年から実施した50人分の調査の中間報告を行っている。第2章 テレビメディアによる障害者スポーツの情報発信環境調査では、北京冬季パラリンピック大会のテレビ報道量について報告している。第3章 パラリンピアンに対する社会的認知度調査では冬季パラリンピック選手の社会的認知度について報告した。第4章 テレビコマーシャルにおける障害者スポーツ調査では障害者スポーツ選手を起用したテレビコマーシャル本数について報告している。第5章 ユニスポ体験での児童の意識変容調査では障害者スポーツを体験した児童の意識変容についての報告に加え、(公財)ヤマハ発動機スポーツ振興財団が全国60校に提供したボッチャボールセットの利用状況についての事例報告も行っている。

調査にご協力いただいた多くの皆様に心より感謝いたします。次年度以降も引き続き、諸調査を実施する予定です。今後も本調査プロジェクトの活動に対してご支援ご協力を賜りますようお願いいたします。



# ■目次

はじめに	1
第1章	
障害者スポーツ選手のキャリア調査	
概要	8
キャリア調査インタビュー一覧	10
選手別インタビュー	14
50人のパラアスリートのインタビュー調査から	54
2019～2022年のキャリア調査インタビュー一覧	60
第2章	
テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査	
調査概要	64
要約	66
調査報告	67
1 メディア放送時間(単純集計)	68
2 メディア放送時間(クロス集計)	78
3 北京大会日本代表選手別の放送時間	87
4 まとめと考察	89
コラム ロシア・ウクライナ問題について考える	92
第3章	
パラリンピアンに対する社会的認知度調査	
調査概要	96
要約	98
調査報告	99
1 パラリンピアンの認知度	100
2 パラリンピックの観戦	101
3 障害者スポーツとの接点	106
4 クロス集計	109

5	まとめと考察	113
第4章		
	テレビコマーシャルによる障害者スポーツ情報発信環境調査	
①	障害者スポーツ関連のテレビコマーシャル実態調査	116
②	パラアスリート起用のテレビコマーシャル実態調査	121
	コラム プロアスリート・国枝慎吾選手が残した功績について考える	126
第5章		
	ユニ★スポ体験での児童の意識変容調査	
1	チャレンジ！ユニ★スポについて	132
2	プログラムの特徴	132
3	調査目的	132
4	調査方法	133
5	今後の課題	143
6	まとめ	144
	ボッチャの展開事例紹介	145
附録1	パラリンピアンに対する社会的認知度調査 調査票	159
附録2	パラリンピアンに対する社会的認知度調査 集計表	165
附録3	ユニ★スポ調査票	171

## ■障害者スポーツ・プロジェクト

リーダー	藤田紀昭	日本福祉大学スポーツ科学部	教授
メンバー	小淵和也	(公財)笹川スポーツ財団スポーツ政策研究所	政策ディレクター
	河西正博	同志社大学スポーツ健康科学部	助教
	齊藤まゆみ	筑波大学体育系	教授
	河合純一	(公財)日本パラスポーツ協会 日本パラリンピック委員会	委員長
事務局	大庭義隆	(公財)ヤマハ発動機スポーツ振興財団	

## 第1章

# 障害者スポーツ選手のキャリア調査



本調査は2019年度から開始しており、選手一人ひとりの個人史ならびにスポーツキャリアに関わるインタビューを実施し、どのような環境、支援、他者との関わりの中でスポーツを始め、継続しているのかについて検討している。今年度は11名の選手に協力をいただき、オンラインもしくは対面で、それぞれ1時間から1時間半程度のインタビューを実施した。なお、事前に調査目的、個人情報の管理、調査の任意参加、調査協力を中止しても不利益が生じないこと等を説明し、同意を得た上で調査を実施した。協力者は、男性5名、女性6名で、先天性障害5名、中途障害6名、年齢は23歳～60歳(平均37.9歳)であった。主な質問項目は、個人的属性、競技歴、障害発生からスポーツ開始までの経緯、障害受傷前のスポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響、障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境、障害者スポーツ継続に関する状況、スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境、今後のスポーツ実施意向等である。

なお、本調査は日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認(申請番号18-11および22-001-01)を受けて実施した。また、調査にあたっては、本プロジェクトメンバーのほか、日本福祉大学スポーツ科学部の兒玉友准教授の協力を得た。

まず、調査対象者それぞれのスポーツ開始の局面に着目すると、これまでの調査報告と同様に普通学校における体育や運動部活動参加の困難性が垣間見られた。「本心ではスポーツに対して憧れをもっており、取り組みたいと思っていたが、『自分には無理』と思っていた。」「障害者がスポーツをするという概念がなかった」という語りが象徴的であるが、本来、運動・スポーツ経験の端緒となるはずの学校での取り組みが、期せずしてその後のスポーツ活動の「障壁」となってしまう事例が散見された。特に普通学校に通学していた重度障害のある人々においては、特別支援学校に進学、もしくは転校後にスポーツと出会ったというケースが見られ、普通学校と「障害者スポーツ」に関わる諸活動をいかに連携していくことができるかが重要であると言えよう。このような状況は、先天性障害のある選手のみならず、中途障害のある選手においても同様の傾向が見られた。普通学校在学中に「(病気が進行したため)車いすになってからは見学が多かった。」「(足を)切断してから学校の体育は～(中略)見学がほとんどだった。」という言葉にみられるように、障害の受傷によって、学齢期の継続的な運動・スポーツ実施が困難になる可能性も示唆された。

また、これまでと同様に、病院やリハビリテーションセンター等の医療職や、同様の障害のある「ロールモデル」の存在が、スポーツ開始・継続それぞれの局面で重要な役割を果たしているが、これらは「学校外」の機関、個人の働きかけによるものであり、前述のように幼少期から障害のある人々にとっては、「学校」での体育・スポーツとの出会い、支援者・指導者との出会

いも非常に重要であると言えるのではないだろうか。

さらに、今年度調査において特徴的なのは、競技継続の局面において、多くの調査対象者が都道府県や都道府県協会からの助成を受けている点である。これまでも、東京パラリンピック開催決定後、アスリート雇用制度の拡大や競技団体のパラリンピアンに対する支援が拡充されてきた旨の報告をしてきたが、全国障害者スポーツ大会や国内大会への出場を目標とする、もしくはこれから国際大会を目指していく選手に対しても助成金が支給されているなど、都道府県ごとの支援体制が拡充されている状況が示唆された。また、アスリート雇用ではなく、一般雇用でこれらの助成を受けて競技を継続している選手が複数名いることから、このような自治体の支援は単なる競技力向上のみならず、スポーツ参加の裾野を広げていくための重要な制度と言えるのではないだろうか。また、複数の調査対象者が、自治体の助成に関して「東京パラリンピック開催」の影響が大きかったと語っており、これらの地域レベルの支援がこれからも継続、拡大していくのか、あくまでも東京パラリンピック開催に向けた一過性のものとして縮小していくのかについては注目されるところである。本調査のみでは、都道府県ごとの具体的な支援内容や制度の詳細について詳述することはできないが、今後さらなる検討を進めていきたい。

(河西正博)

■図表1-1 キャリア調査インタビュー一覧

※1 一般雇用には障害者雇用を含む  
 ※2 パラスポーツ開始時の競技と現在の競技が違う場合は最初の競技開始時について記載

項目	22-A	22-B	22-C
調査年度	22	22	22
識別記号	40	41	42
生まれた年	1990	1991	1962
性別	女	女	女
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分 ※1	選手雇用	一般雇用	その他
障害発生年齢	0	26	31
障害内容	視覚	肢体	視覚
障害程度	重度	中度	重度
学校種別	特支	普通	普通
現在実施競技	柔道	陸上競技	サウンドテーブルテニス
競技開始年齢 ※2	15	26	30代半ば
レベル	国際入賞	国際入賞	地域
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※2	・高等部体育教師 ・盲学校教師(視覚障害の柔道家、柔道部の指導者)	同じ障害の女性選手二人、義足の陸上競技クラブのメンバー	・隣県のスポーツ指導員
パラスポーツ開始場所 ※2	・視覚特別支援学校(高等部)	・市の総合運動公園の陸上競技場	・地元の視覚障害者用図書館
パラスポーツ情報提供者 ※2	・弟	・リハビリ時の主治医	・視覚障害当事者のサークル活動をしている中で
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※2	・本人	・両親 ・本人	-
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ネガティブ	・ポジティブ	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	・全日本視覚障害者柔道連盟に関わっている先生	・クラブのチームメイト	・特になし
パラスポーツ継続状況	・2013年専攻科卒業後、フリー(あん摩マッサージ指圧師)で柔道を続ける。その後アスリート雇用され、柔道に専念。 ・2大会続けてパラ出場を逃し、環境の変化が必要と思い2016年から4年間をS県の道場にて過ごした。 ・東京2020終了後、地元に戻り、アスリート雇用され現在に至る。	・現在、仕事の後、週に5~6日練習。 ・現在コーチの指導を受けず、自分で練習。 ・試合数は2022年度になって増加。神戸でパラ陸上の世界選手権があること、陸連とパラ陸連の連携が大きな要因。	・当初は、隣県のスポーツ指導員が月に1回指導に来てくれていた。その後、地元の大学卓球部の学生等と活動を継続。 ・2012年の全国障害者スポーツ大会に出場。 ・東海ブロック大会に毎年出場し、それ以外にも他府県で行われる交流大会にも参加。
支援	・勤務先	・公的機関	・なし
将来ビジョン	・競技を継続し、視覚障害者柔道の認知度を高めたい。 ・パラリンピック出場は通過点、生涯現役でいきたい。J1(全盲クラス)の指導者になりたい。	・直近の目標はパリパラリンピックに出ること。 ・競技は年齢が40代になるまで続けたい。 ・競技を通じて若い選手たちには情報提供したりしてサポートもしていきたい。	・可能な限りSTTTに関わっていきたい。 ・指導者が固りにくいので、自分がプレーをするだけでなく、指導もしている。 ・教えることも非常に楽しく、続けていきたい。
その他特記事項	・先天性の視覚障害者にとって、スポーツと出会う機会は限定的。数少ない機会とタイミングが合致した。 ・視覚障害者柔道は、IBSAクラス分けが変更となり、J1(全盲)とJ2(弱視)のクラスとなった。J1とJ2の違いを知った上でコーチングができる指導者、トレーニングパートナー等いければ競技継続にはプラスである。	・就職後は一般雇用のため練習時間が取れにくかった。コロナ禍により在宅勤務となり、時間の調整がしやすくなり練習にもじっくりと取り組めるようになった。 ・県からの助成金を受給しているが、海外遠征や義足ソケット部の改良等の経済的負担が大きい。	・サークルメンバーは高齢化し退会者が増加。一方で、新メンバーを探すことは難しい。弱視の人々の中には「見えていること」をやりたいと考える人もいる。 ・競技を通じていろいろな場所へ行き、いろいろな人と出会うことで世界が広がり、楽しい。

項目	22-D	22-E	22-F
調査年度	22	22	22
識別記号	43	44	45
生まれた年	1972	1977	1979
性別	男	女	男
居住地域	関東	東海	東海
調査時身分 ※1	選手雇用	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	12	5	19
障害内容	肢体	肢体	肢体
障害程度	中度	重度	重度
学校種別	普通	普通	普通
現在実施競技	車いすテニス	水泳	卓球
競技開始年齢 ※2	13	25	32
レベル	国際入賞	全国出場	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※2	・市のテニス協会の人たち	・職場を訪問に来た車いすユーザー(多様な情報を持っていた)	・部活動の生徒
パラスポーツ開始場所 ※2	・居住地近くの勤労福祉体育館	・車いすテニス:Y市の体育館	・勤務校の体育館
パラスポーツ情報提供者 ※2	・両親(車いすバスケ) ・市のテニス協会の人たち	・車いすテニス、セーリング:Nさん ・ダイビング:短大時代の友人 ・水泳:バリアフリーアターセンター、県の障害者スポーツの関係者	
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※2	・親(運転免許取得前) ・本人(運転免許取得後)	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・日本人Mコーチ ・カナダ人Hコーチ ・ドイツ人Hトレーナー ・当時の職場の仲間 ・家族	・ダイビング:伊豆のインストラクター、ダイビング仲間(医療関係者や福祉関係者がいた)、奄美大島のダイビングクラブのスタッフ ・水泳:スイミングスクールのコーチ ・クリニック(アスリート外来)のドクター	・車いす卓球選手の先輩 ・通っている卓球クラブのコーチ
パラスポーツ継続状況	・大学4年時に国内トップになる。就職2年目にアトランタパラリンピックに出場。99年に転職し、選手雇用となり、競技に集中。2004年のパラリンピックを目標とした。 ・現在は午前中テニスのトレーニング、午後はテニスや、講演等をしている。	・パート半日(午後)勤務。午前中は自宅で家事をしたり、ヨガマットを使って筋力トレーニング。 ・水泳は現在、週に1回市のプールで練習。他の日は陸上での筋力トレーニングなどを実施。 ・ダイビングは奄美大島を拠点として継続。一人で移動、ダイビングクラブのスタッフ等に支えられている。	・大会等で、他の車いす選手に練習等の刺激を受ける。自らの行動で環境は変えられると考え、居住地の障害福祉課に連絡し、地域の一般の卓球クラブを紹介してもらった。 ・週1回、マンツーマンレッスンを受けるうちに結果が残せるようになってきた。
支援	・勤務先、スポンサー	・なし	・公的機関
将来ビジョン	・選手としてプレーは続けたい。 ・車いすテニスをやってみたい人へ、入り口の部分を支援したい。 ・パラ出場経験を活かして、パラリンピックを目指している人の支援もしたい。 ・大会運営、大会の立ち上げ。 ・コーチにも関心があり。(一般のテニス指導者の資格も取得。)	・2023年度に実施される鹿児島大会までは泳ごうと決めている。 ・ジャパンパラ水泳大会は自分の今のレベルでは難しいが、生涯スポーツの目標として頑張りたい。 ・ダイビングは旅行の一環で継続して楽しみたい。	・2024年のパリ、2028年のロサンゼルスへの出場を目指す。 ・2028年以降も家族や職場の理解が得られれば、可能な範囲で出場し、生涯スポーツとして続けたい。
その他特記事項	・中学入学前に脚を切断、その後、親からの紹介もあり、中学に入って車いすバスケに取り組み。その仲間たちと車いすテニスの講習を受けたことから、車いすテニスを始めた。 ・国際的にトップクラスになれたのは、地道なトレーニングや人々のサポート、自分自身の成長等によりステップアップしてきた結果と思う。	・水中は車いすに拘束されることもなく、自由に動けることに魅力を感じた。 ・体調や肩の調子が悪くなったこともあり、仕事を一旦やめ、腱板を手術。地元開催の全国障害者スポーツ大会に備えたが、コロナ禍により中止。気持ちの区切りをつけるために鹿児島大会までは頑張る。	・受傷後、勤務先の部活動指導をきっかけに受傷前に行っていた卓球を再開した。 ・障害を理解して受け入れてくれた地域の卓球クラブ、自ら車いすに乗り、パラ卓球の特性を理解して指導に当たった卓球クラブのコーチの存在が、大きな支えになった。

項目	22-G	22-H	22-I
調査年度	22	22	22
識別記号	46	47	48
生まれた年	1997	1990	1999
性別	女	男	男
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分 ※1	その他	一般雇用	選手雇用
障害発生年齢	0	14	4
障害内容	肢体	視覚	肢体
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通→特支	普通→特支	普通→特支
現在実施競技	ボッチャ	ゴールボール	ボッチャ
競技開始年齢 ※2	18	18	7
レベル	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※2	・練習見学をした際に輝いて見えたE選手など練習参観していた人、およびE選手の父、異動サポート等支援してくれる母親および情報提供してくれるPT	・学校の先輩と友人 ・盲学校ゴールボール部顧問教諭	・当事者団体の年上のお兄さんたち
パラスポーツ開始場所 ※2	・隣県の障害者スポーツセンター	・盲学校	・市の障害者スポーツセンター
パラスポーツ情報提供者 ※2	・PT	・盲学校の先輩	・県内のボッチャ協会
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※2	・母		・両親
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	・複数のボッチャの県内選手 ・コーチ(上記選手の父) ・母親	・学生時代は部活動の顧問教諭 ・就職後は県の教育委員会のスポーツ課の方、特別支援学校の先生、元同じ職場の男性看護師、職場の方々	・家族 ・会社 ・コーチ
パラスポーツ継続状況	・入院中、県ボッチャ協会の練習会に参加したことがきっかけで退院後、県協会の練習会や選手の主催する練習会に参加。 ・翌年、県協会の合宿に参加。一人の女性選手と出会い代表の話や海外の話聞き、刺激され、ボッチャにはまった。 2016年にE選手が所属しているチームに入り、練習している。 ・今はボッチャが自分のすべて。	・2013年まではグランドソフトボールもプレー、その後ゴールボール1本に。 ・週3~4日練習、それ以外にウエイトトレーニング。職場近くの体育館、障害者専用体育館、盲学校等で練習。週末は代表合宿等に参加。 ・2019年まで日本代表候補、その後代表落ちし、東京パラには出場できなかった。	・県内にボッチャ協会があり、定期的に練習。 ・経済的に厳しいところがあるが、家族や日本協会からのお金、県からの強化選手補助金、「応援する会」からの援助、勤務先の援助などがあり、賄うことができています。
支援	・公的機関	・公的機関	・勤務先、公的機関
将来ビジョン	・現在、ボッチャのプレークラスが変わるかもしれないという状況なのでまず気持ちを整理して、自分に厳しくして日本選手権に出て代表選手になりたいと思っている。	・当面の目標は、パリパラリンピックに出場すること。 ・パリの先はあまり考えていないができれば長くプレーを続けたいと考えている。	・パリパラリンピックを目指す。そこで「金」をとりたい。個人戦でも頑張りたい。 ・パリの後のことまでは今は考えられない。
その他特記事項	・ボッチャ継続の内的動機づけとしては、自分自身で考え自分の体を使って主体的に参加できることのうれしさを試合で勝てないことの悔しさと、勝てるかもしれないという可能性を認識→自分の身体状況を自己研究・自己分析することによる可能性の見出しとパフォーマンスに対する向上心と支援者への恩返しと変化している。	・障害発生前のスポーツ経験(小学校で野球、中学校でバレーボール)が、同じボール球技であるグランドソフトボールやゴールボールにプラスに働いている。 ・2012年に地元開催の大会があり、就職の時はこの大会出場に配慮してくれるところを探し、現在の職場に就職した。	・小学2年時にボッチャ体験機会があり、面白いかもと興味を持つ。障害状況より、家族のサポートがなければ続けることはできなかった。 ・障害の進行から途中でクラスを変わらざるを得なかったが、ロールモデルとなる選手がいたことや、周りの支援のおかげでボッチャを継続するようになった。

項目	22-J	22-K
調査年度	22	22
識別記号	49	50
生まれた年	1982	1986
性別	男	女
居住地域	東海	関東
調査時身分 ※1	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	0
障害内容	肢体	肢体
障害程度	中度	重度
学校種別	普通	普通
現在実施競技	パラテコンドー	バドミントン
競技開始年齢 ※2	36	23
レベル	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※2	・道場の先生	・兄、医師、車いすバドミントンK氏
パラスポーツ開始場所 ※2	・地元のテコンドー道場	・都の障害者スポーツセンター
パラスポーツ情報提供者 ※2		・医師 ・障害者スポーツ指導員
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※2	・本人	—
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ネガティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・道場の先生、理学療法士	・バドミントン仲間、地域のバドミントンコーチ、家族
パラスポーツ継続状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道場の先生の指導で、少しずつ上達。強化指定選手を目指す。全日本選手権で成績を残したい。</li> <li>・現在は、週に2回、2～3時間程度練習</li> <li>・今年度から強化指定選手。強化合宿が2・3か月に1度ある。国内大会は年に2回、国際大会は今年度3大会ほど出場予定。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バドミントンが東京2020パラリンピックで正式競技に決定し、パラリンピック出場を目標に練習した。</li> <li>・2018年に転職し、アスリート雇用となる。午前中は勤務、午後はコーチ付きで練習を行う。</li> </ul>
支援	・公的機関	・勤務先
将来ビジョン	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国内大会優勝、国際大会では入賞を目指していきたい。</li> <li>・パラテコンドーを普及させたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・企業や市民を対象としたパラスポーツ等に関する講演会を行っていく予定。</li> <li>・バドミントンは今後も継続。</li> </ul>
その他特記事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・妻が家事すべてを引き受けてくれており、競技継続上でとても大きな支えとなっている。</li> <li>・国際大会に出場した際に、他国の選手を見ていると、競技以外の場面でもとても楽しそうに過ごしていて、「本当に好きなことをやっているんだな」と感じさせられ、自分が競技を続ける上で刺激をもたらしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの頃からスポーツを含め何にでも挑戦できる環境があったことが、その後のスポーツ継続に影響した。</li> <li>・障害者スポーツセンターの存在と職員との活動がパラスポーツをするきっかけと継続につながっている。</li> <li>・東京パラ開催決定後、アスリート助成/雇用などの制度ができ、経済的な支援、練習環境などが整った。</li> </ul>

仮名 22-A さん

インタビュー実施日時 2022年5月17日 13:15-14:45 場所 M市商工会議所会議室

個人基本情報	<p>居住:東海地区 生年月日:1990年 性別:女性</p> <p>障害発生年齢:先天性 障害状況:視覚障害、1種1級</p>
略歴	<p>小学部より視覚特別支援学校で学び、高等部在学中の2008年18歳で北京2008パラリンピックに出場、21歳で県立視覚特別支援学校の高等部専攻科保健医療科卒業、あん摩マッサージ指圧師の国家資格を取得。2年間のフリー期間を経てG社に所属、31歳で東京2020パラリンピックに出場した。現在はS社に所属し現役選手として活動している。</p>
競技基本情報	<p>競技:柔道 クラス分け:女子70kg 超級(東京2020大会)</p> <p>主な戦績:2008年北京パラリンピック大会入賞、2009年IBSA柔道ジュニア世界大会メダリスト、2021年東京2020パラリンピック大会入賞</p> <p>競技開始年齢:15歳</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯:</p> <p>・未熟児網膜症のため視覚障害となる。柔道との出会いは視覚特別支援学校小学部の頃、弟(弱視)が柔道をしていた。当時は柔道で人を投げるイコールやり投げのイメージだったので、ずっと誘われていたが絶対やらないと思っていた。中学部3年の時にバンド活動のポイトレで腹筋強化が必要と知り、高等部の体育授業で経験した柔道が役立ちそうだと感じて柔道を始めることにした。体育の授業で実際に経験し、柔道に対するイメージが変わった。新年度早々に体育の先生から11月の試合に出てくれと言われて、試合に出るなら練習が必要だと思い、即柔道部に入部した。</p> <p>始めた場所:視覚特別支援学校(高等部)</p> <p>重要な他者:普通科の体育の先生(柔道経験なし)、W先生(盲学校教諭、視覚障害の柔道家、柔道部の指導者)</p>

<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<p>・普通科がある視覚特別支援学校への進学に伴い体育で柔道を経験したこと、当時井上康生(選手)や野村忠宏(選手)など有名な柔道家がいて、CM やメディアの露出度も高かったことから、柔道の「投げる」はやり投げのイメージではなく、「背負い投」や「大内刈」「外刈」などの技に伴うものと理解できたこと、そして東海地区盲学校柔道大会があり、体育の先生から選手として強く誘われたことである。試合に出るなら、体育だけではダメだと思い柔道部に入部した。</p> <p>・高等部進学に伴い、寄宿舎生活となったが、そこに全日本視覚障害者柔道連盟に関わっているO先生が勧誘に来た。2004 年のアテネパラリンピックから女子の柔道が種目となったことから、女子選手を集めていた。その先生との出会いで、いろいろな技を 1 個ずつ、手取り足取りという形で、自分の中でレパートリーが具体的に増えていった。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>・中学部までは運動とは無縁で音楽部、和太鼓をずっとやっていた。中学部の部活ではバンドのボーカル担当、声の出し方に悩んでいた時に、ボイトレで腹筋強化が必要だということを知り、柔道も役立つそうだと感じたこと。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況:</p> <p>・2008 年北京パラリンピック開催前に、憧れの存在である古賀さんに地元N市での講演会で出会い、2009 年のジュニア大会では古賀さんの対戦相手だった外国選手からメッセージをもらうなど柔道のイメージがスマートでかっこいいものになった。</p> <p>・2013 年専攻科卒業後に柔道と仕事の両立に悩み2年間はフリー(あん摩マッサージ指圧師)で柔道を続け、その後障害者雇用の会社を立ち上げたHさんの紹介でアスリート雇用として就職、柔道に専念できる環境ができた。しかし、2大会続けてパラリンピック出場を逃したことから、柔道の競技環境を変える必要があると思い、2016 年から4年間をS県のU道場にて過ごした。</p> <p>・U道場には、視覚障害者柔道の加藤裕司選手をはじめ日本代表レベルの複数の選手も稽古に通っており、多くの刺激を受けた。特にU先生からは柔道に向かう姿勢、指導法、全盲の柔道を理解した上での理論的</p>



	<p>な指導・助言があり「良き理解者」であった。</p> <p>主な実施場所:U道場</p> <p>重要な他者:Uさん、Hさん</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>・柔道に専念できる競技環境との出会いがあった。それは、障害者雇用の会社を立ち上げたHさんの紹介でアスリート雇用として就職できたことである。しかし、2大会連続でパラリンピック出場権を逃したことから新しい競技環境に挑む決意ができたことでU道場と出会った。</p>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<p>・東京 2020 パラリンピックが終わり、地元に戻って新しい競技環境を得た。アスリート雇用として、柔道に専念できることから、引き続き第1線で競技を継続し、視覚障害者柔道の認知度を高めたいが、東京パラ開催後もまだ種々のバリアが解消していないことから、今後もパラ選手や障害について知ってもらうことが大切。また、今トレーニングパートナーを探しているが、探し方がわからないので、トレーニングパートナーのマッチング制度があればいいと思う。目指しているレベルに合わせたトレーニングパートナーと指導者は不可欠である。当面引退は考えていないが、J1 の指導者にはなりたいと思っている。見えない人がもっとたくさん柔道に親しんでくれる、そんな環境ができるといい。</p>
<p>まとめ</p>	<p>・特別支援学校の体育授業で経験した柔道がスポーツへの誘いであった。先天性の視覚障害者にとって、スポーツと出会う機会は限定的であり、数少ない機会とタイミングが合致した。パラリンピック出場は通過点でしかなく、生涯現役で進んでいきたい。視覚障害柔道は、IBSA クラス分けが変更となり、J1 である全盲と J2 である弱視のクラスとなった。J1 と J2 では、柔道そのものが違うことから、それらの違いを知った上でコーチングができる指導者、トレーニングパートナーを含む、良き理解者がそろった競技環境があれば競技継続にはプラスである。</p>

(齊藤まゆみ)

仮名 22-B さん

インタビュー実施日時 2022年5月23日 14:00-15:00 場所 オンライン

個人基本情報	<p>居住:東海地区 生年月日:1991年 性別:女性</p> <p>障害発生年齢:26歳 障害状況:右大腿切断、2種3級</p> <p>リハビリ期間:5か月</p>
略歴	<p>大学在学中に体調を崩し(摂食障害)、8年間かけて卒業し、2019年に大学を卒業し就職(障害者雇用)。インタビュー時は在宅勤務により、現在実家で勤務し、トレーニングに通っている。</p>
競技基本情報	<p>競技:陸上競技、短距離、走り幅跳び クラス分け:T63</p> <p>主な戦績:400m(1分21秒50、世界記録)、100m(17秒32)、走り幅跳び(3m60)。100m、走り幅跳びは国内で3~4番手くらい。</p> <p>競技開始年齢:26歳</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・体調が悪い中、就職活動中に事故に遭い、右脚を切断。障害を持ってどん底という人が多いが、私の場合、その前からどん底で障害を負ってかえってふっ切れた感じがする。</li> <li>・急性期の病院ではMさん(同様の障害の女子陸上選手)の記事を読んでいた。</li> <li>・障害を負ってからは体力をつけなくてはいけない、生きていくためには歩かなくてはならないということで一所懸命リハビリに取り組んだ。</li> <li>・リハビリで入院時の主治医のK先生が義足の陸上競技クラブの関係者だった。この先生を通じて、スポーツのことや陸上クラブに関する情報を得ていた。</li> <li>・はじめの何回かのクラブ参加は両親に車で連れて行ってもらった。免許は受傷前に取っていたが、受傷後左脚アクセル限定に書き換えた。その後は自分で運転して行くようになった。</li> <li>・初めてK市にあるこの陸上クラブに参加したのは入院中の8月くらいだった。12月に退院しその後、定期的に参加するようになった。</li> <li>・切断後すぐに走り始めたので断端部の痛みやケア、ソケットの調整が大変だった。</li> <li>・同じ障害の女性選手二人(Mさん、Oさん)の影響を受けた。自分もあの二人のように走れたり、活動できたりしたらいいなと思った。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 始めた頃は週に 3 回程度、夜に練習していた。</li> <li>・ 最初に大会に出たのは 2018 年の愛知パラ陸上競技大会だった。</li> <li>・ 陸上のほかにも車いすバスケや水泳、アンプティサッカー、トライアスロンなどをやったことがある。</li> <li>・ 陸上競技は仲間もいたし、一人でも続けられるし、板バネ(陸上用義足)のレンタルなどもあり、入りやすかった。</li> </ul> <p>始めた場所: K市の総合運動公園の陸上競技場。ここは一般開放されていて誰でも使ってよい競技場だった。</p> <p>重要な他者:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①リハビリ期: リハビリで入院時の主治医の K 先生</li> <li>②開始期: 同じ障害の女性選手二人(Mさん、Oさん)。義足の陸上競技クラブのメンバー(様々な情報をもらえた)</li> </ul>
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 障害者スポーツの情報を持っているリハビリテーション病院の存在</li> <li>・ 東京 2020 パラリンピック開催による情報量の増加</li> </ul>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中高とバスケットボールをやっていた。大学入学後、スポーツはほとんどやっていなかった。</li> <li>・ しかし、一度部活動を経験していたということは、障害を持ってからスポーツを始めたり、継続したりすることに非常にプラスに働いている。特に今は一人で練習することも多く、部活動で練習のルーティーンを経験していたことが役立っている。</li> <li>・ ただバスケットの経験があったが、車いすバスケを初めてやったときは立ってやるバスケットとはちょっと違うぞって感じてそちらには入り込めなかった。</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現在、練習は仕事が定時(17:30)に終わってからやっている。トレーニング内容によって終わる時間は異なるが大体 20:30~22:00 くらいまでやっている。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在は週に 5～6 日練習。クラブの練習はK市の競技場で週に 1～2 日。個人でやるときはY市やS市の競技場や近くのジムに行って練習している。</li> <li>・現在コーチなどについてはおらず、練習計画をたてるのも練習も自分でやっている。土日は走る練習と、ウエイトの二部練をする日もある。</li> <li>・職場とはいろいろと相談して、合宿や遠征の時には配慮してもらっているが、遠征費が出たり、出張扱いになったりということはない。</li> <li>・遠征や義足のソケットの改良などにお金がかかるため、資金面は大変である。ソケットを直すのに 40 万～50 万円かかることもある。</li> <li>・資金面のほかには体のケアやトレーニングのことなどのサポートがあればありがたいと思う。今はほとんど一人でやっている。</li> <li>・試合数は今年に入ってから多い。神戸でパラ陸上の世界選手権があることと、陸連とパラ陸連の連携ができてきて、陸連の大会にも参加可能なものができたためだと思う。スポンサー等がついていない私のような選手にとっては国内で公認大会が増えることはありがたい。</li> <li>・就職してすぐの頃は仕事を覚えるのが精いっぱいだったが、コロナ禍になりリモートで自分の時間もとりやすくなったことから、練習もじっくり取り組めるようになった。それによって会社の上司ともいろいろと相談できるようになった。</li> <li>・アスリート雇用が可能ということになればそちらを選ぶと思う、パリに備えての準備の条件も全く違ってくるので。</li> <li>・現在、県からは強化指定選手として助成金をもらっているが、他にはスポンサーなどはついていない。競技協会の強化指定選手については現在ボーダーラインといったところである。</li> </ul> <p>主な実施場所:K市、Y市、S市などの陸上競技場と近隣のジム</p> <p>重要な他者:クラブのチームメイト(基本一人練習が多いが、週に 1 回でも 2 回でも同じ障害の人と練習できるのは精神的にも大きい)</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍による在宅勤務により時間が取りやすくなった。</li> <li>・パラリンピック陸連と日本陸連の連携による試合数の増加。</li> <li>・東京 2020 パラリンピックを契機とした自治体における助成金制度の</li> </ul>

況・環境・条件	確立。
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 直近の目標はパリパラリンピックに出ること。</li> <li>・ 競技は年齢が 40 代になるまで続けていきたい。競技をしつつ若い選手たちには情報提供したりしてサポートもしていきたい。(自分もそういう人に救われたので)</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大学在学中に体調を崩しそれが原因で事故に遭い右脚大腿を切断した。</li> <li>・ 急性期の病院に入院中に同様の障害の選手の記事を読んだこと、リハビリで入院した先の主治医が障害者スポーツに関する情報を持っていたことや義足の陸上競技クラブの関係者であったことから陸上競技のクラブに通うようになった。</li> <li>・ 競技を始めるにあたっては同様の障害の同性の選手 2 人がロールモデルになったと推測される。またクラブに入り、様々な情報が得られるようになったこともよかった。</li> <li>・ 就職後は一般雇用と同じ仕事をこなし時間が取れにくい状況だったが、コロナ禍により在宅勤務となり、時間の調整がしやすくなり練習にもじっくりと取り組めるようになった。</li> <li>・ 現在、県からの助成金を受給しているが、海外遠征や義足ソケット部の改良などにお金がかかっている。</li> <li>・ 神戸でパラ陸上の世界選手権が行われることが決まったことや、パラ陸上競技連盟と日本陸上競技連盟の連携により記録が公認される試合数が増加したことはスポンサーなどがついていない自分にとってはありがたい。</li> <li>・ 目下の目標はパリパラリンピックに出ることだが、その後も 40 代までは競技を続けたいと考えている。自分が救われたように同じような障害のある若い選手をサポートしたいと考えている。</li> </ul>

(藤田紀昭)

仮名 22-Cさん

インタビュー実施日時 2022年6月6日 13:30-15:30 場所 G 県アリーナ会議室

個人基本情報	<p>居住:東海地区 生年月日:1962年 性別:女性</p> <p>障害発生年齢:31歳 障害状況:視覚障害、1種1級</p>
略歴	<p>31歳の時に進行性の眼病が発覚し、30代半ば頃から地元の視覚障害者用図書館でサウンドテーブルテニス(以下、STT)を始めた。2012年の全国障害者スポーツ大会県大会のSTTに初出場し2位となり、その後、同大会に4度出場している。現在も競技を続けながら、STTのサークルを主宰している。</p>
競技基本情報	<p>競技:STT</p> <p>主な戦績:2012年全国障害者スポーツ大会県大会 STT2位</p> <p>競技開始年齢:30代半ば</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯:</p> <p>・31歳の時に網膜色素変性症を発症していることが明らかになり、徐々に視力が低下し50歳頃に失明した。30代半ば頃に、視覚障害当事者のサークル活動で、地元の図書館でSTTをやるという情報を知り参加した。指導してくれたのはA県のスポーツ指導員であり、(STTの正式ルールではないが)障害のない大学生とダブルスを組んでA県の交流大会に出場し、好成績を残せたことが嬉しく、その後継続的にSTTに取り組むようになった。始めた当初はまだ視力が残っており、晴眼者とペアの時にはアイマスクをしてプレーし、視覚障害者とペアの時にはアイマスクを外して「晴眼者」として参加していた。(当時はSTTのルールが緩やかで)ラリーが「むちゃくちゃ速いし、むちゃくちゃ面白」く、ストレス解消になりどんどん面白くなっていった。</p> <p>始めた場所:G県の視覚障害者用図書館</p> <p>重要な他者:A県のスポーツ指導員</p>
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・	<p>・ボランティアの存在が大きかった。STTのサークルのボランティア募集を始めた当時は、「ボランティアブーム」とも言える状況で、G大学や他大学の学生たちが参加してくれており、彼らとダブルスを組んでA県の交流大会に出場し、好成績を残したことがその後継続していくきっかけとな</p>

条件	った。
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・障害受傷前は、スポーツが嫌いではなかったが、全くやっていなかった。</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・サークル内でSTTを始めた当初は、A 県のスポーツ指導員が月に 1 回指導に来てくれていたが、2 年ほど経ち、活動基盤ができてきたから地元のメンバーを募りましょうということで、図書館でボランティア募集をしたところ、G 大学卓球部の学生が参加してくれることになり、その友人たちとともに活動を継続していった。</li> <li>・2012 年開催の地元での全国障害者スポーツ大会県大会に向けて、若手選手の指導をしていたところ、自分自身が県代表として選出され、強化指定選手として活動することになった。その当時、STTの台はサークル活動の拠点であった図書館にしかなく、会議室兼用の部屋となっており、定期的に使用できなかったことから、強化費を活用し M 県や A 県、S 県等の近県で練習に取り組むようになった。</li> <li>・2012 年の全国障害者スポーツ大会の県開催に向けて、STT の台が 3 台購入され、そのうち 1 台が自宅近くの G 市民総合体育館に設置され、現在は週末を中心にボランティアの大学生たちと活動している。</li> <li>・N 市障害者スポーツセンターで開催される東海ブロック大会に毎年出場し、それ以外にも大阪府や秋田県、埼玉県等で行われる交流大会に都合がつけば参加している。</li> <li>・サークルメンバーは高齢化し退会が増えてきている一方で、新たなメンバーを探すことは非常に難しい。盲学校は重複障害の子どもたちが増えており、地域では中高齢期に眼病や視覚障害を発症した方々が多く、体力的な問題があり、勧誘が難しくなっている。</li> <li>・STT の仲間を増やすために活動しているが、少しでも見えている人(弱視の人々)は、「見えていること」をやりたいと考える人もいる。スルーネットピンポン(報告者注:アイマスクを着用せずにプレーし、ルールは</li> </ul>

	<p>STT よりも緩やかであり障害の有無にかかわらず参加できる)に転向する人が増えてきており悩ましい状況である。</p> <p>主な実施場所：G 市民総合体育館</p> <p>重要な他者：特になし</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>・競技を続ける中で、いろいろな場所へ行き、いろいろな人と出会うことに楽しさを感じている。そこで人と会話することで、自分の知らない世界を知ることができる。自分自身が周りに印象付けようとしているわけではないが、全国障害者スポーツ大会に数回出場していると、他県の監督たちから「あなた～大会にいたよね」と声をかけてもらい、このような出会いが、また来年も頑張りたいと思わせてくれるものとなっている。</p>
今後のスポーツ実施	<p>・目が見えなくても、手と足は動ける状態でいたいので続けているというのが正直なところである。</p> <p>・「何歳まで現役を続ける」ということではなく、可能な限り STT に関わっていきたい。</p> <p>・青森県に行ったことがないので、2026 年に青森県で開催予定の全国障害者スポーツ大会に出場したい。</p> <p>・指導者が周りにいないので、自分がプレーをするだけでなく、指導もしているが、教えることも非常に楽しく感じているので、指導もしていきたい。</p>
まとめ	<p>・視覚障害当事者のサークル活動の一環として STT を始めた。</p> <p>・2012 年の全国障害者スポーツ大会県大会に向けて強化指定選手となったが、当時、県内に定期的に使用できる練習施設がなく、近県に遠征し練習に取り組んでいた。</p> <p>・全国各地の大会で出会った仲間たちとの再会が楽しみになっており、競技を継続するモチベーションになっている。</p> <p>・2026 年の全国障害者スポーツ大会青森大会に出場し、選手としてだけでなく指導者としても引き続きSTTに関わっていきたいと考えている。</p>

(河西正博)



氏名 22-Dさん

インタビュー実施日時 2022年7月15日 13:30-15:10 場所 オンライン実施

個人基本情報	<p>居住：関東地区 生年月日：1972年 性別：男性</p> <p>障害発生年齢：12歳 骨肉腫により切断（小学校卒業後から中学校入学までの期間） 障害状況：片大腿離断 2種3級</p> <p>リハビリ期間：治療とリハビリで1年余り入院。1年遅れで中学1年を始める。</p>
略歴	<p>中学入学前に切断、中学は地元の普通中学、高校は市外の普通高校、そして市内の大学を卒業。その後市役所に就職、1999年に退職し、関東の企業で選手雇用に（～2008年）。2000年に結婚。2008年からは企業にスポンサーになってもらって競技を続けた。</p>
競技基本情報	<p>競技：車いすテニス</p> <p>主な戦績：国際大会優勝</p> <p>競技開始年齢：13歳</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1年遅れで中学校に復学したため、一つ年齢の下の人たちと同級生となった。そのため、友達となかなかなじめなかった。中学2年生の時、そんな自分を心配した両親がスポーツをやった方がよいと考え、市役所などで尋ねて、居住地近くで車いすバスケットボールをやっているところを見つけてきてくれた。初めて行ったとき、見学のみだったが、実際にプレーさせてもらえた。</li> <li>・車いすバスケットを練習し始めた頃、車いすテニスもだんだん普及し始めてきており、車いすバスケットの練習場所に車いすテニスの人に来てもらい、みんなでテニスの講習会を受けた。やってみると、車いすテニスも面白く、しばらく車いすバスケットと車いすテニスの両方をやっていた。テニスを始めたのも中学2年生の頃。テニスを週1回、バスケットを週1回という感じだった。</li> <li>・車いすテニスの指導をしてくれたのは（車いすテニスの指導者ではなく）市のテニス協会の人たちだった。車いすテニスはこうだというよりはテニスってこういうものだというような指導だった。</li> <li>・車いすバスケットは人数が集まらないとできなかったことから中学3年頃か</li> </ul>

らはテニス一本となった。本当はバスケを続けたかったが当時は自分の障害では、試合に出られないということもあった。結局、バスケのメンバーもテニスの方が面白いということで皆、車いすバスケをやめて車いすテニスをするように。中学では部活には入らず車いすテニスをやっていた。

・高校受験では公立高校は体育の単位が取れない可能性もあり、単位を出してもらえる、少し離れたところに新しくできた私立の高校に行った。高校の間は親に送り迎えしてもらっていたこともあり、テニスはほとんどやっていない。

・高校を卒業して車の免許が取れて、自分で移動ができるようになってからテニスを再開した。大学時代は市内の体育館で、年を追うごとに県外のいろいろなところでやるようになった。

・切断してから学校の体育は中学も高校も見学がほとんどだった。

・大学3年の時初めて海外の試合に出場した。国内の飯塚国際を含め国際大会ではなかなか勝てなかった。

・車いすバスケや車いすテニスをやっていた人たちがしっかりと仕事を持っていたりして、自分にもそのような道が開けるような見通しが持てた。

始めた場所:

(車いすバスケ)居住地近くの勤労福祉体育館で始めた。車で親が連れて行ってくれた。

(車いすテニス)居住地近くの勤労福祉体育館。

重要な他者:

① リハビリ期:家族(両親、姉)、同じ境遇で入院している他の子どもたちに支えられた。

② 開始期:

(車いすバスケ)両親、車いすバスケチームのメンバー(最初からやらせてもらえた)

(車いすテニス)市のテニス協会の人たち

障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・車いすテニスが少しずつ普及し始めていた。</li> <li>・市のテニス協会の人から車いすの人も教えてくれた。</li> </ul>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校を卒業するまでは野球をしていた。</li> <li>・野球をしていたことは車いすスポーツを始めるにあたってはプラスしかなかった。</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学卒業後就職したが、テニスをする時間はあまり取れなかった。</li> <li>・大学 4 年の時国内トップになり、就職 2 年目にアトランタパラリンピックに出場。技術面、精神面において海外トップ選手との差を見せつけられた。</li> <li>・1999 年、5 年間務めた市役所を 27 歳で退職して、企業に選手雇用の形で就職。テニス中心の生活になった。2004 年のアテネまでに結果を出そうと決めていた。</li> <li>・継続にあたって影響を受けたのは、教えてもらっていた 2 人のコーチ、トレーナー、職場(選手雇用)の人たちの応援、そして海外の M 選手のサポート。</li> <li>・国際的にトップクラスになれたのは何か一つのきっかけというよりは地道なトレーニングや人々のサポート、自分自身の成長そういうものが積み重なってステップアップしてきたと思う。</li> <li>・2004 年国際大会ダブルスで優勝したがシングルスでは優勝できなかった。その後はシングルスでも優勝したいという思いでプレーを続けた。</li> <li>・2008 年国際大会ダブルスで銅メダル、2012 年の大会ではメダルなし、2016 年ダブルスで銅メダル。2021 年は出場できなかった。</li> <li>・現在は午前中テニスのトレーニングをして、午後はテニスをやることもあるし、講演等ほかの仕事をすることもある。</li> </ul>

	<p>主な実施場所:C県のテニスクラブ</p> <p>重要な他者:日本人 M コーチ、カナダ人 H コーチ、ドイツ人 H トレーナー、当時の職場の仲間、家族。</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・車いすテニスの認知度が高くなり、企業からの注目度が高くなった。</li> <li>・国枝選手が先陣を切っていろいろな環境を変えていってくれた。</li> <li>・東京 2020 パラリンピックの開催</li> <li>・選手雇用、スポンサーの存在</li> </ul>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・選手としてプレーは続けたい。</li> <li>・いろいろな意味で車いすテニスには貢献していきたい。</li> <li>・車いすテニスをやってみたいのにどうしていいかわからないような人の助け、入り口の部分を支援したい。</li> <li>・自分はパラリンピック出場経験があるので、パラリンピックを目指している人の支援もしたい。</li> <li>・大会運営、大会の立ち上げのようなこともやってみたい。</li> <li>・コーチにも関心があり、一般のテニス指導者の資格も取得した。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学入学前に脚を切断、その後、親からの紹介もあり、中学に入って車いすバスケをやるようになった。その仲間たちと車いすテニスの講習を受けたことから、車いすテニスを始めるようになった。</li> <li>・スポーツ開始時の重要な他者は、両親、車いすバスケチームのメンバー、市テニス協会の人たち。始めたのは障害者も利用できる勤労福祉体育館だった。障害のある人たちの中にいることで自分の将来も開けてくるような思いを持てた。</li> <li>・中学高校の体育はほとんどが見学だった。</li> <li>・高校を卒業し、車の免許を取り、自分で移動ができるようになってから車いすテニスを再開。各所で練習するようになった。</li> <li>・大学 3 年時に初めて海外の大会に出場した。</li> <li>・大学卒業後公務員として働いていたが、車いすテニスにかかる時間のこともあり、退職し選手雇用となった。</li> <li>・車いすテニス継続に大きな影響を与えたのは、支援してくれる家族、所属クラブのコーチやトレーナー、雇用先の会社などであった。</li> <li>・2004 年の国際大会ダブルスで優勝、シングルスでも成績を残したい</li> </ul>

	思いがモチベーションとなってトップレベルでの活躍が続いた。 ・今後は選手であると同時にコーチや大会のマネジメント、普及活動もしたいと考えている。
--	---

(藤田紀昭)

仮名 22-E さん

インタビュー実施日時 2022 年 7 月 22 日 10:00-12:00 場所 M県福祉センター

個人基本情報	<p>居住:東海地区 生年月日:1977 年 性別:女性 障害発生年齢:5 歳                  障害状況:脳性まひによる四肢体幹機能障害 1 種 2 級                  リハビリ期間:5 歳の頃異変に気づき身体障害者手帳が交付された。幼稚園の頃からリハビリをしていた。</p>
略歴	<p>小学校は特別支援学級、中学校は福祉センターに入所していた。その時のリハビリは大変だった。入所中はいじめもあった。高校は一般高校に進学。短大を卒業し県庁に入職。25, 6 歳の頃から車いすを使用。                  2017 年まで県庁に勤務、体調が悪くなり退職し、その後 2 年間で肩の手術などをした。2019 年 4 月から現職。パート勤務で半日、午後勤務。午前中は自宅で家事をしたり、ヨガマットを使って筋力トレーニングをしたりしている。アスリート雇用ではないが、昨年(2021 年)の半年間くらい練習日(金曜日)の半日を勤務扱いにしてくれた。(昨年は県の全国障害者スポーツ大会が開催予定だったが中止となった。)                  泳ぐ練習は週 1 日、S市まで通って県営プールで練習中。</p>
競技基本情報	<p>競技:水泳 クラス分け:S6 SB6                  主な戦績:全国障害者スポーツ大会(2010 年)初出場、中部障害者水泳大会、日本選手権出場                  競技開始年齢:25 歳(水泳)</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯:                  ・県庁に就職して数年後(23,4歳の頃)に研修で来た車いすの男性 N さんの影響を受け、車いすテニスをやったのが体育以外の初めてのスポーツ体験だった。車いすテニスを Y市でやっているという情報を得て、自分で体育館まで運転をして行った。                  ・車いす自体にあまりいいイメージを持っていなかったことや、車いす操作やラケット操作が難しく車いすテニスは数か月でやめた。                  ・ほぼ同時期(23,4 歳の頃)にセーリングも始めた。こちらも N さんから情報を得て、誘ってもらって始めた。海には最初 N さんも一緒に行った。セーリングチームでは幽霊会員のようなであったが、時々イベントの時などに駆り出されて 10 年ほど続いた。M県での全スボ前に手術をするまで</p>

	<p>続いた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・セーリングに出会った後、職場のストレス解消に水泳を始めようとしたが、プールがバリアフリーでなかったり、断られたりすることが多かった。</li> <li>・短大時代の友人(福祉施設に勤務)に相談したところダイビングを勧められ、体験した。陸上で車いすに拘束されているのとは違い、浮遊感があり、自由に動けるところが非常に魅力的ではまった。</li> <li>・27歳(2004年4月)の時PADIの初級免許を取得した。ダイビングは現在も続けており、200本くらい潜った。</li> <li>・小学校の時、少しだけ水泳の授業に参加したことがあったことや、セーリングで魚を見ることがあり、自分も泳いだらどんな感じだろうと関心を持っていた。</li> <li>・水泳に関しては県内のプールを泳がせてもらうようお願いをしたが20件近く断られた後、ようやく受け入れてくれるところが見つかった。更衣室は階段を上がって2階にあったが、1階の子ども用更衣室を利用させてくれた。ここには障害者の水泳クラスもあった。この水泳クラブが2015年建て替えの時には建物をバリアフリーにしてくれ、多目的更衣室も作ってくれた。</li> </ul> <p>始めた場所：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・車いすテニス：Y市の体育館</li> <li>・セーリング・ダイビング：I市の海</li> <li>・水泳：T市のスイミングスクール</li> </ul> <p>重要な他者：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・車いすテニス：Nさん</li> <li>・セーリング：Nさん夫妻、I市のセーリング組織の代表のGさん。</li> <li>・ダイビング：短大時代の友人、ダイビングを教えてくれたIさん男性</li> <li>・水泳：スイミングスクールのコーチ</li> </ul>
<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・</p>	<p>県内にバリアフリースポーツセンターという組織があり、障害者スポーツに関する情報を持っている関係者と出会えた。</p>

条件	
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校は特別支援学級所属で、体育の時間はリハビリなど他のことをやっていた。水泳だけは少しだけやった。中学も同様に体育らしいものはなかった。その影響で障害者がスポーツをするという概念がなかった。高校では体育でダンスを選択した。</li> <li>・セーリングやダイビング・水泳を好むのは、少しだけではあったが小学校での水泳経験が影響していると思っている。</li> </ul>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現在続けているのは水泳とダイビング。</li> <li>・セーリングは、M県での全国障害者スポーツ大会を目指すために肩の腱板を手術したこともあり、水泳に専念するためにやめた。</li> <li>・水泳は現在、週に1回S市のプールで泳いでいる。そのほかの日は陸上での筋力トレーニングなどを行っている。</li> <li>・ダイビングは奄美大島を拠点として続けている。一人で移動し、ダイビングクラブのスタッフ等に支えてもらいながら継続している。</li> </ul> <p>主な実施場所：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ダイビング：伊豆→名古屋→奄美大島</li> <li>・水泳：T市のスイミングスクール→S市のプール</li> </ul> <p>重要な他者：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ダイビング：伊豆のインストラクター、ダイビング仲間(医療関係者や福祉関係者がいた)、奄美大島のダイビングクラブのスタッフ</li> <li>・水泳：スイミングスクールのコーチ</li> <li>・レディースクリニック(アスリート外来)のドクター</li> </ul>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地元での全国障害者スポーツ大会開催決定</li> </ul>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地元での全国障害者スポーツ大会が中止となり大変ショックを受けた。</li> <li>・水泳をやめようかとも思ったが、それなりにきちんと泳いだという結果を残すべきというコーチの言葉もあり、2023 年度に実施される鹿児島大</li> </ul>



	<p>会までは泳ごうと決めている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ジャパンパラリンピック水泳大会にも出場したいと考えている。自分の今のレベルでは難しいが生涯スポーツの目標として頑張りたい。</li> <li>・ダイビングは旅行の一環(スポーツツーリズム)のような感覚で継続して楽しみたい。ダイビングを継続するのであれば水泳も続ける方がいいと思っている。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・短大を卒業後、就職した職場で車いすの男性(障害者スポーツに関する情報を多く持っていた)と出会ったことがきっかけで、車いすテニスやセーリングを体験した。</li> <li>・短大時代の友人からの勧めもあり、ダイビングをするようになる。水中は車いすに拘束されることもなく、自由に動けることに魅力を感じた。</li> <li>・2004年にはダイビングの免許も取得した。諸般の理由から拠点となる海は変わったが、現在は奄美大島を拠点にダイビングを自律的に楽しんでいる。</li> <li>・職場のストレス解消のために水泳をしたいと思っていたが、なかなか受け入れてもらえるところが見つからなかった。</li> <li>・T市内に障害者の水泳教室を持っているスイミングスクールがあり、そこで受け入れてもらった。バリアフリーではなかったが、1階の子ども用更衣室を使用させてくれるなど配慮してもらえた。</li> <li>・体調や肩の調子が悪くなったこともあり、仕事を一旦やめ、腱板の手術などをし、地元開催の全国障害者スポーツ大会に備えることにした。</li> <li>・大会がコロナ禍により中止となりショックを受けたが、区切りをつけるために鹿児島大会までは頑張ろうと決意している。またダイビングを続けるのであれば水泳も続けた方がいいだろうと考えている。</li> <li>・ダイビングは楽しみとして続けたいと考えている。</li> </ul>

(藤田紀昭)

仮名 22-F さん

インタビュー実施日時 場所 2022年7月25日 18:00-20:00 場所 オンライン

個人基本情報	<p>居住:東海地区 生年月日:1979年 性別:男性</p> <p>障害発生年齢:19歳 障害内容:両下肢機能障害(脊髄損傷)1級</p> <p>リハビリ期間:事故後、7か月入院</p>
略歴	<p>事故前 大学生</p> <p>事故後、通っていた大学は中退。退院後に、別の大学を受験して入学。卒業後は、一般企業に就職し、現在は公務員。</p>
競技基本情報	<p>競技:卓球 クラス分け:クラス4</p> <p>競技成績: ITTF PTT ジャパンオープン 2019 東京大会 団体メダリスト</p> <p>競技開始年齢:13歳 中学、高校で卓球部に所属</p> <p>事故後、32歳で卓球を再開</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中学、高校と卓球部に所属していた。19歳で事故に遭い 7か月ほど入院した。自分は治ると思っていたが、入院中に知り合ったおじさんが「1年後か、10年後かに治るかもしれないけれど、例えば10年後に治るとして、じゃあその間の10年は無駄に過ごしていいのかわ。どうせだったら楽しく過ごした方がいいんじゃないか。」と話され、その通りだと感じた。この入院期間に障害に対する気持ちの切り替えができたように思う。</li> <li>・受傷後、一般企業勤務を経て、教員となる。卓球部の顧問として生徒の練習をみるうちに、自分でもやってみようという気持ちになり、卓球を再開する。</li> </ul> <p>始めた場所:勤務校の部活動</p> <p>重要な他者:部活動の生徒</p>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	特になし
受傷前スポーツ	・小学校は野球部、中学、高校は卓球部。

ツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学進学後も、地元の卓球チームで継続。</li> <li>・受傷後に教員となる。受傷前に行っていた卓球なら指導できると、卓球部の顧問に就任する。生徒を指導しているうちに、自分もやりたくなってきた。</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大会に出場していく中で、東京都在住の車いす選手に出会い、日頃の練習方法や競技への向き合い方などを教わる。自ら行動をして環境整備を進める姿を見て、自分が行動すれば環境は変えられるという考えに至り、居住している行政の障害福祉課に連絡をして、地域の一般の卓球クラブを紹介してもらう。週1回、練習に通う中で、障害者への指導経験がなかった卓球クラブのコーチが、自らも車いすに乗って指導を行ってくれた。マンツーマンレッスンを受けるうちに結果が残せるようになってきた。</li> </ul> <p>主な実施場所：地域の一般の卓球クラブ</p> <p>重要な他者：①車いす卓球選手の先輩 ②通っている卓球クラブのコーチ</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・障害を理解して受け入れてくれた地域の卓球クラブ、自ら車いすに乗り、パラ卓球の特性を理解して指導にあたった卓球クラブのコーチの存在が、居住地域に同じ障害で卓球をしている人が少ない環境においては、大きな支えになった。</li> <li>・県のパラリンピック等選手強化指定や、県の障がい者卓球協会からの活動補助費で活動支援をしてもらっている。</li> </ul>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2024年度のパリ・パラリンピック、2028年のロサンゼルス・パラリンピックの出場を目指して、国際大会への出場を含めて全力で取り組んでいきたい。</li> <li>・2028年以降も家族や職場の理解が得られて、出られる環境にあれば、可能な範囲で大会には出場して生涯スポーツとしての卓球を続けていきたい。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受傷後、勤務先の部活動指導をきっかけに受傷前に行っていた卓球を再開した。</li> <li>・同じ障害の選手に出会い、練習環境を知る中で、自らで行動をして環境</li> </ul>

	<p>を変えていくことの重要性を理解して、行動に移し環境を作っていた。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・身近な地域にパラ卓球のクラブがなくても、障害を理解してくれるチームメイトや指導者がいれば、卓球の練習が継続できることを証明した。</li><li>・うまくなりたい、海外の大会に出場して勝ちたいという思いが自らの行動の原動力になった。</li><li>・障害があるからこそ、日本代表として国際大会に出場できるチャンスがあるということをポジティブに捉えて、目標にして、より上達する環境改善や日々の練習に取り組んでいる。</li></ul>
--	--

(小淵和也)

仮名 22-G さん

インタビュー実施日時 2022年7月28日 13:00-14:40 場所 T市(選手自宅)

個人基本情報	<p>居住:東海地区 生年月日:1997年 性別:女性</p> <p>障害発生年齢:0歳 障害状況:脳性まひ、1種1級</p> <p>食事は体調により介助が必要な時と自分で食べられる時がある。</p>
略歴	<p>小学校は普通学校に通学。中学校(中等部)と高等部の途中までは特別支援学校に通学。特別支援学校高等部の時に治療に専念するため1年休学。その後復学したが、諸般の事情で退学。現在、自宅で書類づくりなどの仕事をしている。</p> <p>これまでに障害に伴う手術を11回(2007, 2011, 2012, 2013, 2015(3回), 2016, 2017, 2020, 2021)受けている。</p> <p>ボッチャを始めるまでは日常生活の中で少しでも歩けるようになるような方向性で、ボッチャを始めてからは長く座れるような(プレーにプラスになる)方向で手術を行ってきた。</p>
競技基本情報	<p>競技:ボッチャ クラス分け:BC1 BC2</p> <p>主な戦績:BC1:日本選手権出場 BC2:アジアユースパラ ベスト8</p> <p>競技開始年齢:18歳</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校の時、部活動はしていない。体育も一部参加する程度だった。</li> <li>・特別支援学校中等部に入ってから中等部2年の途中まで車いすバスケットボール部に入った。車いすを漕ぎながらボールを保持することが難しかった。ツインバスケットボールのゴールにシュートをしていた。それでもスポーツができるということがうれしかった。</li> <li>・中等部1年生の時に体育の授業で初めてボッチャをした。しかし、教員が自分でジャックにランプを合わせるようなやり方で全く面白くなかった。</li> <li>・手術後の体の状況で可能な陸上競技やパターゴルフなども少しだけやった。</li> <li>・2015年手術後に県内リハビリテーション機関に移り、そのPTにボッチャの練習会場などについて情報をもらった。</li> <li>・その後入院中ではあったが、外泊許可をもらい、隣県のボッチャ協会の</li> </ul>

	<p>練習会に行った。中等部の体育でやったボッチャとは全く違い、自分でボールを投げ、面白いと思った。その後、練習を見学に行ったとき、E 選手の練習を見て輝いて見え、このような選手になりたいと思った。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・その後、リハビリ機関の PT がボールを持ってきてくれ、リハビリの一環としてボッチャをするようになった。ボッチャがリハビリの最後にできるといことでリハビリも頑張ろうという気になった。</li> <li>・2 か月後に 2015 年 11 月に県協会の大会があると聞き、出たいと思い、出た結果(始めてから 2 週間)、3 位に入り、大会前に「入賞したらボールを買ってくれる」という約束をしていたので、ボールを購入した。</li> </ul> <p>始めた場所: 隣県内の障害者スポーツセンター</p> <p>重要な他者:</p> <p>開始期: 輝いて見えた E 選手、ルールを教えてくれた E 選手の父、最初の練習で声をかけてくれた K 選手、送り迎えや様々なサポートしてくれる母親、ボッチャに関する情報をくれたリハビリ機関の PT</p>
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・県内にボッチャ協会があり、練習会をしていた。そこで、ロールモデルとなるような選手がすでにいた。</li> <li>・リハビリ機関の PT がボッチャに関する情報を持っていた。</li> </ul>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体育の授業は見学が多かった。自分では運動はできないものと思いこんでいた。</li> <li>・自分の特別ルールで参加することはあったがみんなと同じように参加したことはない。</li> <li>・水泳は母親がいるときには参加できた。運動会でも同様であった。</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・初めての大会に出た後、退院後、隣県の協会の練習会や K 選手の主催する練習会に参加していた。</li> <li>・翌年 3 月に隣県の協会の合宿に参加した。その時に同じ女性選手 M 選手と出会った。代表の話や海外の話聞き、大変面白く、参考になった。女性選手に出会ったことは大きい。これが一つのきっかけとなり、ボッチ</li> </ul>

ヤにはまっていた。

- ・ボッチャ以外のスポーツで自分の判断や自分の体を使って主体的にやれるものはない。その中で、思ったところにボールが行ったり、点数が取れたりするところが面白い。
- ・その後、日本選手権の予選にも出るようになった。なかなか勝てないが、いつか勝てるようになるかもしれないという思いがあり、自分の中のやる気スイッチが入ったような気がした。その後練習頻度も増えた。
- ・2016年にE選手も所属しているチームに入って練習するようになった。これは県協会の総会の時に所属選手から声をかけてもらったのがきっかけである。
- ・2018年に日本選手権本戦に初めて出場した。1勝したが予選リーグ敗退だった。
- ・2019年はコンディショニングがうまくいかず、体に痛みがあり、予選大会で敗戦した。これがきっかけで医学生が使うアプリを入れ、体の機能や構造(解剖学)について勉強するようになった。今はリハビリの先生と身体機能や手術のことなど専門用語で会話するほどである。
- ・現在はほぼ毎日練習をしている。投球を伴う練習ばかりでなく、ポジション(体の姿勢)や、素振り、YouTube を使って戦略の勉強などを毎日している。投球練習は週に2回くらい。
- ・今はボッチャが自分のすべてと言っても過言でないくらいである。
- ・ボッチャで座って、投げやすい姿勢でプレーできるように自力で歩けなくなることを覚悟して腸腰筋を切ってもらった。自分で研究して、股関節、ひざ、足首が直角だと姿勢が保てるとわかり、アキレス腱や股関節の手術も、そうするためのものだった。
- ・支援してくれている母親のためにも結果を出したいと思っている。
- ・現在、県の強化指定選手として助成金を受けている。

主な実施場所：障害者スポーツセンター、近隣の公共の体育館や公民館など

重要な他者：コーチ(E選手の父)、母親、E選手、M選手(女性)などボッチャの県内選手

スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域のボッチャチームの存在</li> <li>・東京 2020 パラリンピック開催決定をうけて、自治体の強化支援制度の確立</li> </ul>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在、ボッチャのプレークラスが変わるかもしれないという状況なのでまず気持ちを整理して、自分に厳しくして日本選手権に出て代表選手になりたいと思っている。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スポーツ(ボッチャ)を始めるにあたっては、ボッチャの先輩選手、選手関係者(選手の父)、母親、リハビリ機関の PT が重要な他者として挙げられた。</li> <li>・PTによる情報提供→母親による練習場所への移動支援→ボッチャの先輩選手による影響といった過程を見ることができる。</li> <li>・隣県にボッチャ協会があり、練習の機会が提供されていたこともボッチャを始め、継続できた条件として挙げられる。</li> <li>・初めてボッチャを体験したのは中等部在学中であったが、その時は教員の知識不足あるいは経験不足の影響から面白いスポーツとは感じる事ができなかった。</li> <li>・継続の要因としては、同性の選手の存在、先輩選手、コーチ、母親らの影響や支援を挙げることができる。</li> <li>・ボッチャにおいてできるだけよいパフォーマンスを期待して何回かの手術をしており、中には体の機能を低下させる(歩けなくなる)可能性のある手術も含まれていた。</li> <li>・ボッチャ継続の内的動機づけとしては、自分自身で考え自分の体を使って主体的に参加できることのうれしさ→試合で勝てないことの悔しさと、勝てるかもしれないという可能性を認識→自分の身体状況を自己研究・自己分析することによる可能性の見出しとパフォーマンスに対する向上心と支援者への恩返し、と変化している。</li> <li>・現在クラス変更の可能性があり、そのことに対する気持ちの整理をしようと努力している段階である。</li> </ul>

(藤田紀昭)



仮名 22-Hさん

インタビュー実施日時 2022年8月2日 13:00-14:30 場所 G市G交流会館

個人基本情報	<p>居住：東海地区 生年月日：1990年 性別：男性</p> <p>障害発生年齢：14歳(中学3年夏頃)</p> <p>障害状況：視覚障害(レーベル病)視力 0.01-0.02 1種1級</p>
略歴	<p>中学までは普通学校、高校から盲学校、その後、専攻科で鍼灸マッサージの資格を取得。ゴールボールなどスポーツをやる中でいろいろな人と会ったり、話したりすることで自然に障害のことを受け入れられるようになった。資格取得後から現在のG病院勤務。障害者雇用、透析患者のマッサージを担当。2022年に結婚。</p>
競技基本情報	<p>競技：グランドソフトボール、ゴールボール</p> <p>主な戦績：日本ゴールボール選手権メダリスト、2009年アジアユースパラ大会メダリスト、2018年アジアパラ競技大会入賞。2015年頃育成選手、2016年に強化指定選手。2019年まで日本代表候補だったが、その後選考に漏れ、2021年に代表候補に復帰。</p> <p>競技開始年齢：高校1年3月 18歳からゴールボールを始め高校2年から本格的に実施。</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高校では陸上、グランドソフトボールを掛け持ちしていた。</li> <li>・高1の3月先輩に誘われてゴールボールを始めた。2年生の時から熱心にするようになった。火、木はゴールボール、他の日はグランドソフトボールをした。</li> <li>・高2の時ゴールボールの大会に初めて出場した。</li> </ul> <p>始めた場所：盲学校</p> <p>重要な他者：</p> <p>開始期(ゴールボール)：誘ってくれた先輩と友人、盲学校ゴールボール部顧問の教諭</p>
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な人の支援が得られたこと</li> <li>・地元開催の全国障害者スポーツ大会があり、県全体が選手に対して支援しやすい環境があった。</li> </ul>

<p>的状況・環境・条件</p>	
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校 3 年から兄の影響で野球を始めた。中学校ではバレーボール部。</li> <li>・高校では陸上、グランドソフトボールをかけ持ちして当初行った。</li> <li>・高校では三線やギターも弾いたりしていた。</li> <li>・グランドソフトボールやゴールボールはボールを取りに行くという点では野球やバレーボールと似ているため、障害発生前のスポーツ経験はプラスに働いている。</li> </ul>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グランドソフトも並行してプレーしていた(週 1 回程度)。大会(2012 年度全国障害者スポーツ大会)に出場。大会終了後の 2013 年までプレーしていた。</li> <li>・その後はゴールボール一本で、現在も週に 3 日から 4 日練習している。合わせて練習のないときにウエイトトレーニングをしている。</li> <li>・練習場所は地区公民館の体育館、市の交流館の体育館、盲学校、G 市にある県の障害者用体育館などで週末は代表合宿などにも参加する。</li> <li>・1 日の生活は 8 時前に出勤して、17:15 まで仕事。そののちに交流館体育館(職場の近く)などで 2 時間程度練習。ほかに時間が空いているときにウエイトトレーニング。ウエイトトレーニングは自宅の一部屋を改装して、そこでやっている。</li> <li>・練習は日常的には 2~3 人ですることが多い。</li> <li>・2019 年までは日本代表候補に入っていたが、2019 年に漏れたため、東京 2020 パラリンピックには出場できなかった。</li> </ul> <p>主な実施場所:地区公民館の体育館、市の交流館の体育館、盲学校、G 市の県の障害者用体育館など</p> <p>重要な他者:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生時代は部活動の顧問教諭</li> <li>・就職後は県の教育委員会の人(スポーツ課、特別支援学校の先生)、元同じ職場の男性看護師(練習をサポート)、職場の理解(海外遠征など</li> </ul>

	有休をとらなくても行かせてもらえる)
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地元で開催された全国大会(2012年10月)があり、就職(同年9月)後、すぐに大会に出るための休みがもらえた。その後も県のスポーツ課の方の理解があり支援してもらっている。</li> </ul>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当面の目標は、パリパラリンピックに出場すること。2021年に代表合宿に再び呼ばれるようになった。</li> <li>・個人としては代表になるために前回うまくいかなかったところをカバーできるよう練習したい。</li> <li>・アジアで2位に入れば世界選手権に出場でき、そこでいい成績を残せばパラリンピックに出場できる。</li> <li>・パリの先はあまり考えていないができるだけ長くプレーを続けたいと考えている。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校までは普通学校に通っていたが視力が落ち始め、高校からは盲学校に通う。</li> <li>・盲学校では部活動で、グランドソフトボール、陸上、ゴールボールなど掛け持ちで参加していた。部活動に入るきっかけは先輩や友人に誘われたこと。</li> <li>・2012年に地元開催の大会があり、就職の時はこの大会出場に配慮してくれるところを探し、現在の職場に就職した。</li> <li>・グランドソフトボールと、ゴールボールを並行してプレーしていたが大会後ゴールボール一本にした。</li> <li>・現在、職場近くの体育館や障害者専用体育館、盲学校などで練習している。また、改装した自宅の部屋でウェイトトレーニングをしている。</li> <li>・就職後は、教育委員会関係者(盲学校の体育の先生)、職場の理解者などの支援を受け練習を続けている。</li> <li>・当面の目標はパリパラリンピックに出場すること。また、プレーはその後もできるだけ長く続けたいと考えている。</li> </ul>

(藤田紀昭)

仮名 22-Iさん

インタビュー実施日時 2022年8月23日 14:00-15:00 場所 オンライン

個人基本情報	<p>居住:東海地区 生年月日:1999年 性別:男性</p> <p>障害発生年齢:4歳くらいの時に筋ジストロフィーの診断が出た</p> <p>障害状況:筋ジストロフィー 1種1級</p>
略歴	<p>小学校4年の途中までは普通学校、その後、特別支援学校に高等部まで通学。卒業後、福祉関連施設に就職。2度の転職を経て現在は選手雇用で就労。ボッチャは小学2年生の時に始め、最初はBC4クラス、現在BC3クラス、母親がランプオペレータ(ROと略。いわゆるアシスタント)。</p>
競技基本情報	<p>競技:ボッチャ クラス分け:BC3</p> <p>主な戦績:国際大会メダリスト</p> <p>競技開始年齢:7歳(小学2年生)</p>
障害発生から 障害者スポーツ開始まで	<p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学2年生の頃、所属している当事者団体主催のサマースクールの企画でボッチャを体験する機会があった。体験してみて面白いかもと興味を持った。</li> <li>・その後、当事者団体の仲間と当初は月に1~2回の県のボッチャ協会の練習に行くくらいだった。</li> <li>・最初の頃はボッチャそのものというより、練習の後みんなで集まってゲームをしたりする方が楽しかった。</li> <li>・翌年、県の大会に初めて出たが初戦敗退。負けず嫌いなのでそこから強くなりたいと本格的に練習を始めた。</li> </ul> <p>始めた場所:N市障害者スポーツセンター</p> <p>重要な他者:</p> <p>開始期:当事者団体の年上のお兄さんたちがいてくれたことで自然に始められた。練習会場までの移動などでは家族の協力がなくては続けられなかったなので、家族。</p>

障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当事者団体に所属していたこと</li> <li>・県内にボッチャ協会があり、ボッチャの体験ができたこと</li> <li>・家族の支援を全面的に受けられたこと</li> <li>・障害者スポーツセンターがあったこと</li> </ul>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普通学校に通っていた最初の頃は自分で歩けたので、体育もやれるところはやった。その後、車いすになってからは見学が多かった。</li> <li>・特別支援学校に転校してからは体育の授業も参加できた。</li> <li>・ボッチャに出会うまでは学校の体育以外でスポーツをやった経験はない。</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・家族のサポートが大きかった。これがなければ当然だが、ボッチャを続けることはできなかった。</li> <li>・県内にボッチャ協会があり、定期的に練習会が開催され、プレーする機会を持てたことも大きい。</li> <li>・県ボッチャ協会の練習の時に日本ボッチャ協会の人に来ていて、日本選手権にも出られることを知った。また、この県からも出ている人がいるということで自分も小学校5年生くらいの中から日本選手権にも出場するようになった。</li> <li>・最初の日本選手権大会は予選リーグで敗退した。</li> <li>・日本選手権に出るようになってからそのために県協会の練習会以外に自宅で基本練習などするようになった。</li> <li>・中学校2年生の頃県の大会で2位(BC4)になったことがある。</li> <li>・日本選手権でよい成績を残すようになったのはBC3になる頃(中学卒業後～高校入学の間)。</li> <li>・BC4からBC3にクラスが変更になるときは病気の進行で投げられなくなるのは嫌だなあと感じた。ボッチャ以外の電動車いすサッカーを見に行ったが、ぶつかり合いが激しかったりスピードが速かったりして怖かった。やはりボッチャがいいということで続けることにした。自分より前に同様にBC4からBC3にクラスを変わったKさんがいてイメージはしやすかった。このときはKさん、県協会、日本協会、そして家族の励ましが</li> </ul>

	<p>あって頑張ろうという気持ちになれた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・この頃東京 2020 パラリンピック開催が決まり、出たい、世界最高の舞台上で活躍したいと思うようになった。</li> <li>・高校時代、練習は授業の関係で週 1 回、卒業後は週に 3~4 回(在宅就労だったので)できるようになった。</li> <li>・ある体育館で練習しているとき、その体育館を管理している会社の方に所属のことを相談したところ応援して下さるということになり、その会社に就職し、練習場所として貸してもらえるようになった。</li> <li>・海外遠征にはROと 2 名分の旅費が必要になり、経済的に厳しいところがあるが、家族や日本協会からの補助、県からの強化選手補助金、「応援する会」からの援助、勤務先の援助などがあり、まかなうことができている。</li> <li>・その後 2018、2019、2020 年に日本選手権優勝。</li> <li>・現在、選手雇用で T 社(中央競技団体のスポンサーでもある)所属。</li> <li>・現在は練習に合わせて起床し準備をする。午後から夕方まで練習することが多い。午前から夕方までやることもある。その後帰宅し、夕食を取り就寝という生活パターンである。</li> <li>・障害のこともあるし、スポーツ選手としては当たり前のことだが、けがや病気といったことには非常に気を付けている。ポッチャをやっているから逆に健康でいられるというところがあるように思う。</li> <li>・母親はうちでは「親」だが、ポッチャをやっているときは「RO かつ、競技パートナー」といった感じ。</li> </ul> <p>主な実施場所:公共の体育館の予約を取って使用。 重要な他者:家族、会社、コーチ</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京 2020 パラリンピックの開催決定</li> <li>・会社の理解</li> <li>・コロナ禍</li> </ul>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パリパラリンピックを目指す。そこで「金」をとりたい。個人戦でも頑張りたい。</li> <li>・パリの後のことまでは今は考えられない。</li> </ul>

まとめ	<ul style="list-style-type: none"><li>・当事者団体の企画で体験したのが初めてのボッチャだった。</li><li>・この当事者団体の仲間何人かがボッチャをすでにやっていたこともあり、すんなりと練習に行けるようになった。小学校段階でのことであり、送り迎えやそのことも含めて家族の支援がなくてはできなかった。</li><li>・県内に競技団体があり定期的に練習会を開催しているなどボッチャをやる環境があったことも大きい。</li><li>・負けず嫌いの性格から、ボッチャにだんだんとのめりこんでいった。</li><li>・障害の進行から途中でクラスを変わらざるを得なかったが、ロールモデルとなる選手がいたことや、周りの支援のおかげでボッチャを継続するようになった。</li><li>・この頃、東京 2020 パラリンピック開催が決まり、大きな目標となった。</li><li>・ボッチャ継続に関しては、家族の支援、会社の理解、コーチの存在が大きいという。</li><li>・現在はパリで、東京以上の成績を残すことを目的に頑張っている。</li></ul>
-----	--

(藤田紀昭)

仮名 22-Jさん

インタビュー実施日時 2022年 8月 28日 10:00-11:30 場所 オンライン

個人基本情報	<p>居住:東海地区 生年月日:1982年 性別:男性</p> <p>障害発生年齢:先天性 障害状況:左上肢機能障害、3級</p>
略歴	<p>4年ほど前に地元の道場でテコンドーを始めた。現在は公務員として働きながら、2022年度から全日本テコンドー協会(パラテコンドー・キョルギ)の強化指定選手として活動している。</p>
競技基本情報	<p>競技:パラテコンドー</p> <p>主な戦績:2022年全日本選手権(パラキョルギ)メダリスト、2022年アジアパラテコンドーオープン選手権メダリスト</p> <p>競技開始年齢:36歳</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学生の頃にソフトボールを少し経験した程度で、学校体育以外のスポーツ経験はほとんどなかった。</li> <li>・本心ではスポーツに対して憧れを持っており、取り組みたいと思っていたが、「自分には無理」と思っていた。また、障害に関して注目されたくないという思いが強く引っ込み思案になっていて、スポーツをやる前からあきらめていた。自分がプレイヤーとしてスポーツに取り組むことは頭になかったが、その時々には流行っているスポーツやいろいろな大会は見ており、高校時代はK-1などの格闘技をよく見ていた。</li> <li>・2017年頃に、テレビでパラテコンドーが東京2020パラリンピックの実施種目に入ることを知った。2000年のシドニーオリンピックで、岡本依子選手が銅メダルを獲ったことは知っており、テコンドーがどのような競技であるのかはなんとなく理解していた。パラリンピック競技でコンタクトスポーツは珍しく、面白そうな感じがしたと同時に、本当は何らかのスポーツをしたいという思いを持ち続けており、インターネットでテコンドー道場を探して、現在所属している道場で活動を始めた。</li> <li>・始めた当初は具体的な目標があったわけではなく、まず取り組んでみて自分に適性があるのかどうかを確かめたいという感覚であった。</li> <li>・東京2020パラリンピック開催でパラテコンドーの認知が少しは広がったと感じているが、自分が若い頃にパラスポーツを知る機会があれば、</li> </ul>



	<p>もう少し早く何らかのスポーツを始められたのかもしれないと感じている。</p> <p>始めた場所: 地元のテコンドー道場</p> <p>重要な他者: 道場の先生</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道場の先生がM県で道場を開く前に指導していた道場で、パラテコンドー選手の指導経験があったとのことであった。</li> <li>・問い合わせの電話をする際に、「パラテコンドー」と言って理解してもらえるのか不安だったが、「指導したことがあるので大丈夫ですよ」とのことですスムーズに参加することができた。</li> </ul>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校体育以外のスポーツ経験はほとんどなく、社会人になってから趣味でランニングをする程度であった。</li> </ul>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・始めた当初は「えらい所に来てしまったな」という感覚で、障害のない選手たちのレベルが桁違いで、衝撃的だったことを覚えている。正直なところきついなと思いながらも、自分でやりたいと決めて始めたので、ある程度のところまでは続けたいと思い、なんとか続けてこられた。</li> <li>・道場の先生が丁寧に指導をしてくれ、励ましてくれる中で、少しずつ上達していき、「強化指定選手を目指したい、全日本選手権で成績を残したい」と思うようになった。</li> <li>・M県身体障害者総合福祉センターのパラスポーツ選手の助成制度に応募をした際に、理学療法士を紹介されて、現在も体の使い方やケアの方法等についてアドバイスを受けており、道場の先生と同様に競技を続ける上で欠かせない存在となっている。</li> <li>・現在は、週に2回、2時間から3時間程度練習をしている。道場の正規の練習は金曜日だけであるが、他の強化指定選手と比べて練習量が不足していることから、木曜日も練習日として指導をしてもらっている。</li> <li>・今年度から強化指定選手となったため、活動予定は流動的であるが、</li> </ul>

	<p>協会の強化合宿が2・3 か月に 1 度開催され、国内大会は年に 2 回、国際大会は今年度 3 大会ほど出場予定である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大会の出場に関しては職場の許可が得られているが、特段の支援はなく、仕事が忙しい中で、どうにか週 2 回の練習時間を確保している状況である。大会や合宿は有給休暇を取得して参加している。</li> <li>・今年度から強化指定選手として、合宿等で初めて実績のある選手たちと練習をともにし、たくさんの刺激を受けながら、「自分もこうなりたい」と感じておりモチベーションの向上につながっている。</li> <li>・アスリート雇用制度を活用して、競技に専念している強化指定選手がおり、自分も興味を持っているが、競技実績や残りの競技年数を考えると難しいのではないかと思う。完全なアスリート雇用ではないとしても、パラスポーツへの理解があり、練習時間の確保や支援をしてもらえるような企業や団体があれば、そういった所にアプローチしていくことも考えている。</li> </ul> <p>主な実施場所: 地元のテコンドー道場 重要な他者: 道場の先生、理学療法士</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仕事に加えて、テコンドーの活動で家を空けることが多い中で、妻が家事を一手に引き受けてくれており、競技を続ける上でとても大きな支えとなっている。</li> <li>・強化合宿で他の強化指定選手と練習をともにし、道場での練習メニューとほぼ同様であるが、一つひとつのスキルが高く、参加するたびに刺激を受けている。</li> <li>・国際大会に出場した際に、他国の選手を見ていると、競技以外の場面でもとても楽しそうに過ごしていて、「本当に好きなことをやっているんだな」と感じさせられ、自分が競技を続ける上で刺激をもらっている。</li> </ul>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国内大会優勝、国際大会では入賞を目指していきたいと考えており、競技環境等の条件が整うようであれば、2024 年のパリパラリンピックを目指していきたい。</li> <li>・パラテコンドーの普及活動をしていきたいと考えている。地元である M 県で、若い選手たちや私と同じような上肢障害でこれからスポーツに取</li> </ul>

	り組みたい方々と一緒に練習や体験をし、少しでも競技人口を増加させていきたい。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"><li>・パラテコンドーが東京 2020 パラリンピックの正式種目に入ったことを知り、自ら問い合わせた。</li><li>・道場の先生にパラテコンドー選手の指導経験があり、スムーズに活動を始めることができた。</li><li>・今年度から強化指定選手となり、練習頻度を増やしていきたいが、職場から十分な理解が得られず、活動時間の確保に苦慮している。</li><li>・どこまで現役を続けられるかわからないが、条件が整うようであればパリパラリンピックを目指して競技を続けると同時に、競技の普及にも携わっていきたいと考えている。</li></ul>

(河西正博)

仮名 22-K さん

インタビュー実施日時 2022年9月10日 13:00-15:00 場所 公共会議室

個人基本情報	<p>居住:関東地区 生年月日:1986年 性別:女性</p> <p>障害発生年齢:先天性 障害状況:先天性多発性関節拘縮症、1種2級</p>
略歴	<p>大学2年生からバドミントンを始め、2012年から2021年まで強化指定選手として国際大会等に出場。2018年に転職し、アスリート従業員枠として午前中は勤務、午後は練習を行っていた。東京2020パラリンピック後は、現役から退き、企業や市民を対象としたパラスポーツ等に関する講演会を行いつつ、バドミントンを継続している。</p>
競技基本情報	<p>競技:バドミントン クラス分け:車いす WH2</p> <p>主な戦績:2019年世界選手権女子シングルス、ダブルスメダリスト、東京2020パラリンピック競技大会シングルス入賞</p> <p>競技開始年齢:23歳</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・兄の影響で幼稚園の頃から体操教室に参加していた。通っていた幼稚園でも園長や先生が障害のない子どもたちと同じようにスポーツを含め何でも挑戦させてくれた。</li> <li>・小学校ではスイミング、ピアノ、そろばん、中学校では数学部、マンドリン部等で活動した。中学3年生で軽音楽部を立ち上げ、高校も継続して行っていた。中学、高校では運動部には所属していなかった。</li> <li>・高校1年生の時に医師から運動を勧められ、近くの障害者スポーツセンターに行き、水泳教室に参加した。それから高校を卒業するまで、バドミントンや卓球など様々な障害者スポーツを体験した。体験の際は、障がい者スポーツ指導員が相手になってくれた。センターには教室の他に様々なクラブがあり、バドミントンクラブにビジターとして参加していた。</li> <li>・大学2年生の時に、N 県で年に1回行われていた障害者バドミントン合宿に参加した。合宿に参加したことをきっかけにバドミントンを継続しようと思ったが、N 県に障害者バドミントンクラブがなかったため、自分で仲間を集めてクラブを創った。</li> </ul>

	<p>始めた場所:地元の障害者総合スポーツセンター</p> <p>重要な他者:</p> <p>① スポーツを始めたきっかけ:兄、医師</p> <p>② バドミントンを始めたきっかけ:車いすバドミントン K 氏</p>
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	<p>・幼稚園から小学校は、兄が行うスポーツは自分もやってみたいと思い、兄と一緒に体操や水泳教室に通っていた。幼稚園長の理解があり、障害がある子どもでも、やりたいと思うことは何でも挑戦させてくれた。</p> <p>・高校に入り、足に痛みが出たことから病院へ行った。医師から運動を勧められ、障害者スポーツセンターへ行くこととなった。障害者スポーツセンターでは、様々な障害者スポーツを体験した。体験の際は、障がい者スポーツ指導員が相手をしてくれたり、サポートをしてくれたおかげで楽しくスポーツを継続することができた。</p> <p>・大学に入り、しばらくスポーツは行っていなかったが、バドミントン仲間から N 県内で障害者バドミントン合宿が行われていることを知り参加した。バドミントンを継続したいと考え、自らクラブを創り、車いすバドミントン仲間を増やすとともに、健常者と一緒にバドミントンを行った。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<p>・先天性障害のため該当なし</p>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況:</p> <p>・健常者も障害者も楽しめるバドミントンクラブを自ら立ち上げ、健常者も参加していた地域のバドミントン大会に参加していた。</p> <p>・目標とする選手が身近にいたことで継続につながった。</p> <p>・2018年からは toto 助成を受け、消耗品やコーチ謝金、その他国際大会等の経費として使用した。</p> <p>主な実施場所:近隣の体育館、小中学校の体育館、県の障害者福祉センター、福祉・健康施設</p> <p>重要な他者:バドミントン仲間、地域のバドミントンコーチ、家族</p>
スポーツ継続	<p>・バドミントンが東京 2020 パラリンピックで正式競技に決定したことをき</p>

<p>に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>っかけにパラリンピック出場を目標に練習に打ち込んだ。          ・2018年に転職し、アスリート従業員枠として午前中は勤務、午後はコーチ付きで練習を行う環境があった。</p>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<p>・企業や市民を対象としたパラスポーツ等に関する講演会を行っていく予定である。講演会では自分自身の経験、例えば、幼稚園長が障害に理解があり、何でも挑戦させてくれたことで今の自分があることなどを伝えたい。          ・バドミントンは今後も継続していきたい。</p>
<p>まとめ</p>	<p>・子どもの頃からスポーツを含め何にでも挑戦できる環境があったことは現在のスポーツ継続に大きく影響している。          ・障害者スポーツセンターの存在がパラスポーツを知り、体験するきっかけになった。          ・障害者スポーツセンターの職員と一緒にスポーツを行ってくれたことが運動の継続につながっている。          ・東京 2020 パラリンピック大会決定後、アスリート助成、アスリート雇用などの制度ができ、経済的な支援、練習環境などが整った。          ・今後は、バドミントンを継続しつつ、企業や市民を対象としたパラスポーツ等に関する講演会を行い、自身の体験等を伝えていきたいと考えている。</p>

(兒玉友)

## 50人のパラアスリートのインタビュー調査から

藤田紀昭(日本福祉大学)

### はじめに

本調査プロジェクトでは 2019 年度からパラアスリートのスポーツキャリアに関するインタビュー調査を実施してきた。そして、今年度までに 50 名(男性 37 名、女性 13 名)の選手の話聞くことができた。調査年度ごとに調査の結果を報告しているが、今回は中間総括としてこれまでに明らかになったことを報告する。なお 50 名の障害種は、切断・欠損 17 名、脊髄・頸髄損傷等 14 名、その他の肢体不自由 10 名、視覚障害 7 名、脳性麻痺 2 名であった。障害程度は重度障害 30 名、中度障害 17 名、軽度障害 3 名であった。障害発生時期では先天的障害 16 名、後天的障害 34 名であった。

50 名のインタビュー調査からパラアスリートのスポーツへの社会化(どのようにしてスポーツをするに至ったか)および競技の継続に関して、以下の視点(条件)が重要であることが明らかになってきた。

1. スポーツを始める前の状況(スポーツに関心があるか否か)
2. 障害者スポーツに関する情報を得ている
3. 障害者スポーツの場へのファーストアクセスがある
4. 障害者スポーツを継続するための受け皿がある
5. 継続的な障害者スポーツの場へのアクセス方法が確保されている
6. 競技レベルに応じた社会的支援(家族、職場などの支援)、経済的支援(海外遠征、合宿、用具の購入など)がある
7. 何らかの形(ロールモデルの存在、指導者、ライバルの存在、パラリンピックなどの大会、目標となる記録や成績など)で競技に対するモチベーションが維持されている

インタビューに答えていただいた選手の皆さんはいずれもこうした視点(条件)がクリアされている。逆に言えば、これらの視点(条件)が整っていなければ、障害のある人がスポーツにアクセスし、継続することが難しいと言えるのではないだろうか。

そこで、この中間総括ではこれらの 7 つの視点(条件)について、障害種類と障害発生時期(先天的障害、後天的障害)などの側面から特徴を確認していく。

## 1. スポーツを始める前の状況(スポーツに関心があるか否か)

第1の視点(条件)は障害のある人がスポーツを始める前の前提条件と言える。これについては、5名(20-G、22-C、22-E、22-G、22-I)および不明の1名(21-K)を除く44名がスポーツに関心や興味があったとみることができる。障害のある人がスポーツを実施するためにはまず、スポーツに関心があることが条件と言える。スポーツに関心がなければ次の視点(条件)である障害者スポーツに関する情報を探そうとしないであろうし、情報がもたらされたとしてもスポーツへ気持ちが向くこともないと考えられる。また、後天的障害者で受傷前にスポーツに全く関心がなかった人やスポーツ嫌いだった人が受傷後スポーツにすぐに関心を持つことは難しいと考えられる。

関心がなかった5名全員が重度障害であり、うち4名(20-G、22-E、22-G、22-I)は先天的障害であった。22-Gや22-Iは日常生活で介助を要する脳性麻痺の重度障害であり、おそらく幼少期のスポーツ経験が乏しかったと考えられる。そのことがスポーツへの関心が持てていなかった要因ではないかと推察される。

こうした状況を勘案すると、障害者スポーツの普及を図るための第1の条件として、障害の有無に関係なく多くの子どもたちにスポーツを様々な形で体験させ、好きになってもらうことが必要だと考えられる。そのことで途中で障害を持ったとしてもスポーツに関心を持ってくれるであろうし、先天的に障害があったとしてもスポーツすることが可能であることを知る人が増え、障害者のスポーツ普及に結びつくと考えられる。

## 2. 障害者スポーツに関する情報を得ている

第2の視点(条件)は障害者スポーツに関する情報を必ず得ているということである。情報を自ら主体的に探し求めた人もいれば、何らかの機会に他人やメディアから情報を得たという人もおり、情報源は多様である。多様ではあるが、脊髄損傷・頸髄損傷等の人と切断・欠損の人は医療関係者から得ていることが多い。脊髄損傷・頸髄損傷等では17名中5名、切断・欠損では17名中8名であった。

脊髄損傷・頸髄損傷等の人の場合は5名(19-A、19-C、20-C、20-J、21-C)ともリハビリテーションセンター(療育センターを含む)におけるリハビリ時に情報を得ていた。5名の障害発生時期は1973年～2004年で、医療保険によるリハビリテーションが長く受けられる時期であったと推測される。十分なりハビリテーションの最後にスポーツへの導入が図られ、スポーツへと導かれたものと考えられる。ゆえに次の視点(条件)である「障害者スポーツの場へのファーストアクセス」もスムーズに行われたことが推察できる。

切断・欠損の人の情報源の内訳は医師4名(19-H、21-B、21-D、22-B)、義肢装具士3



名(19-B、20-B、21-E)、理学療法士1名(21-H)であった。医師が障害者スポーツについて情報を持っている場合、切断後のスポーツ活動を想定して、切断部位を考えるなど、その後のスポーツ活動に大きな影響を及ぼすことが考えられる。また情報提供者が医師の場合も義肢装具士につながるものが一般的で、切断・欠損の障害の場合、義肢装具士がスポーツへの導きに大きな影響を与えていることも推察される。

脊髄損傷・頸髄損傷等の人では同じ障害のあるパラスポーツ選手から情報がもたらされている人が3名(20-M、21-A、21-K)いた。自分の足での歩行から車いすによる移動へと日常生活方法が大きく変わる中で、同様の障害を持つ人がもたらす情報はより現実的なものであったのではないかと思われる。

先天的障害と後天的障害では前者において家族・親族や教育関係者からの情報提供、後者において医療関係者からの情報提供が目立った。

また、視覚障害者柔道3名(20-K、21-L、22-A)に関しては2名(20-K、21-L)は障害発生前から柔道をしていた。1名(22-A)は先天的障害で特別支援学校高等部から柔道を始めており、後天的に視覚障害となったのちに柔道を始めた人はみられなかった。なお、先天的障害の1名は「柔道の投げ」を「やり投げのように人を投げる」とこととイメージしていたようで、体育の授業で柔道を体験して初めて「柔道の投げ」の内容を知り、柔道のイメージが変わり、競技を始めたということであった。

### 3. 障害者スポーツの場へのファーストアクセスがある

第3の視点(条件)は障害者スポーツの場へのファーストアクセスがなされていることである。障害者のスポーツへの社会化では情報が当該者に届いただけではスポーツ活動に結びつかない場合がある。障害者スポーツに関する情報があっても、どこに行けば活動できるのか、どのようにアクセスすればいいのかがわかり、そのアクセス方法が確保されなくてはスポーツの場には行けないからである。また、人によってはスポーツの場へアクセスすることに対する心理的な壁が高く、現場になかなか足が向かないことがあるかもしれない。「知り合いが練習の場にいたから自分も気楽に練習に行くことができた」(22-I)という発言からもそのことがうかがえる。障害の内容や程度、年齢によっては自分でアクセスができないため家族等に頼らなくてはならない場合もある(19-D、19-E、21-F、22-B、22-D、22-G、22-I)。場合によってはスポーツの場へのファーストアクセスを情報提供者やその関係者が支援してくれる場合や先述のようにリハビリテーションの各現場でファーストアクセスが可能な場合もある(19-A、19-B、19-C、21-C)。

ファーストアクセスで多くの人はそのスポーツを体験し、面白さを知り、あるいはそこにいる

人に勧められたりして継続的なスポーツ活動につながる。まさに「はじめの第一歩」は非常に重要なのである。

なお、先天的障害と後天的障害では前者において家族・親族によるファーストアクセス、後者においては自分から動いてファーストアクセスを行った人が目立った。

#### 4. 障害者スポーツを継続するための受け皿がある

4 つ目の視点(条件)は障害者スポーツを継続するための受け皿があるということである。今回インタビューをさせていただいた選手には全員スポーツ継続のための受け皿があった。多くの場合は当該競技のクラブやチームであった。スノーボードで日常的には個人的にゲレンデで練習している人(21-M)や自分で受け皿(チーム)を作った人(21-I、22-K)もいたが、いずれにしても継続的なスポーツ活動の場があった。中にはスポーツ活動の場をいくつか持っており、多くの日を練習に費やしている人もいた(19-F、20-H、20-L、21-F、21-P、22-B、22-H)。

スポーツ実施の受け皿がないことが障害のある人のスポーツ活動の妨げになっていることがある。希望する競技のチームやクラブがなかったり、諸事情で体育館を使わせてもらえなかったり、近くに利用可能なスポーツ施設がなかったり、あるいは次の視点(条件)で述べるスポーツの場へのアクセスが難しい場合なども受け皿がないことの要因となる。

#### 5. 継続的な障害者スポーツの場へのアクセス方法が確保されている

5 つ目の視点(条件)は継続的な障害者スポーツの場へのアクセス方法の確保である。スポーツ活動を継続するためにはスポーツの場へのアクセス方法が確保されていなくてはならない。多くの場合は、自分で車を運転したり、公共交通機関を利用したりしてスポーツの場へアクセスしているが、スポーツの場へのファーストアクセスと同様に、障害の内容や程度、年齢によっては自分でアクセスができないため家族等に頼らなくてはならない場合がある。頸髄損傷や脳性まひ、筋ジストロフィーなど重度の肢体不自由者の場合、公的な移動支援制度が自治体によってはあるものの、利用目的や回数に制限があるためスポーツの場へのアクセスを家族等が支援している場合がある(19-A、21-A、22-G、22-I)。18歳未満では運転免許が取得できず、家族も仕事の関係で支援が難しい場合、スポーツ活動が著しく制限され、運転免許取得後に本格的にスポーツを始めるといった例もある(22-D)。

#### 6. 競技レベルに応じた社会的支援(家族、職場などの支援)、経済的支援(海外遠征、合宿、用具の購入など)がある

6 つ目の視点(条件)は競技レベルに応じた社会的支援や経済的支援が受けられていることである。50 名中 17 名は選手雇用されており、競技に専念できる環境であった。そのうち、14 名は国際大会入賞のレベルである。残り 3 名も国際大会経験者である。スポーツ継続の重要な他者として、スポンサーを挙げた人も 2 名(21-D、21-G)いた。パラリンピックに出場するためには世界ランキング上位にいたり国際大会予選を勝ち抜く必要があり、海外遠征や日本代表合宿を頻繁に行う必要がある。一般雇用の選手は 24 名、国際大会入賞レベルの選手は 12 名であった。この中には一般雇用でありながら選手雇用とほぼ同じ条件で勤務している選手(19-F)、調査時は一般雇用であったがかつては選手雇用であった選手(22-K)もいた。一般雇用の選手の場合、海外遠征などは有給休暇や特別休暇を取得し、平時に人並み以上に働き、職場の理解を得て職場を抜けるような努力をしていた(21-M、21-L)。

既婚者の場合、スポーツを続けることに対する理解や家族からの精神的な支援やスポーツにお金を使うことへの理解や練習や試合時の移動支援を得ている場合が多い(19-A、19-F、19-H、20-C、20-J、21-C、21-I、21-M、21-N)。未婚の場合は父母から同様の支援を受けていることが多い(21-A、22-I)。

## 7. 何らかの形(ロールモデルの存在、指導者、ライバルの存在、パラリンピックなどの大会、目標となる記録や成績など)で競技に対するモチベーションが維持されている

最後の視点(条件)はモチベーションの維持である。スポーツを継続的に実施するためにはそのためのモチベーションが維持されなくてはならない。今回インタビューをした 50 名は様々な形でモチベーションを維持していると考えられる。インタビュー調査ではスポーツを継続することにおいて重要な人物はだれかを尋ねている。また、スポーツ継続のロールモデルとなる人を挙げる人もいた。さらに、今後の目標などについて尋ねた。これらの結果から、目標となる人物の存在、指導者、目標とする大会、チームメイトの存在を挙げる人が多かった。6 番目の視点(条件)と明確に分けることは難しいが、各選手が何らかの支援や目標を動機づけとしていることが明らかになった。

## おわりに

今回 50 名の選手のインタビュー調査結果の中間報告を行った。それぞれがスポーツをやるようになるまでの経緯は一言でいうと「多様」である。その中からある程度共通する部分を今回切り出した形である。データをどう解釈するかは非常に難しいものがある。また、インタ

ビューアーによって聞き逃してしまったことなどもあり、調査結果として十分でないところもある。さらに、インタビュー調査は調査のアレンジから報告、まとめまで非常に時間がかかるが、アンケート調査ではみえない選手の実像がみえてくる点が魅力的である。

今回挙げた 7 つの視点(条件)はほぼ 50 人に共通するものであったと思われる。裏返せば、こうした条件がない障害者はスポーツを継続するのが難しいということである。また、大きな気づきとして今回インタビューした人たちのほとんどはスポーツに関心がある人たちだということがある。障害発生時期にかかわらず、子どもの時からスポーツに接することができ、スポーツで楽しい、あるいはよい経験をした人が、障害がありながらもスポーツを実施する可能性が高いということである。それゆえ、障害者のスポーツ普及には障害の有無にかかわらず子どもの時から豊かなスポーツ経験ができる環境づくり、プログラム作り、体育授業が非常に重要だと言える。

50 名という大人数のインタビューから得られた結果であるが、インタビュー対象者の性別や、障害種、競技等に偏りがみられる。今後は偏りが少なくなるようさらにインタビュー調査を進めていきたい。最後に、インタビュー調査に快く応じていただいた選手の皆さんに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

■図表 1-2 2019～2022 年のキャリア調査インタビュー一覧

判別記号	性別	生年	障害名	障害程度	受障後最初の競技	現在の主競技	先天・後天	競技レベル	スポーツへの関心	情報源
19-A	男	1967	脊損・頸損等	重度	ツインバスケ	水泳	後天	国際出場	有	医療関係者
19-B	男	1978	切断・欠損	中度	陸上	陸上	後天	国際出場	有	医療関係者
19-C	男	1956	脊損・頸損等	重度	車いすバスケ	パラホッケー	後天	国際入賞	有	医療関係者
19-D	男	1996	その他の肢体	重度	卓球	卓球	先天	国際入賞	有	家族・親族
19-E	男	1976	脊損・頸損等	重度	水泳	陸上	先天	全国入賞	有	家族・親族
19-F	男	1976	脊損・頸損等	重度	車いすバスケ	車いすフェンシング	後天	国際入賞	有	家族・親族
19-G	男	1969	その他の肢体	軽度	アーチェリー	アーチェリー	後天	国際入賞	有	その他
19-H	男	1969	切断・欠損	中度	その他	射撃	後天	国際出場	有	医療関係者
19-I	男	1971	脊損・頸損等	重度	水泳	水泳	後天	国際入賞	有	スポーツ関係者
20-A	女	1981	切断・欠損	中度	水泳	トライアスロン	後天	国際入賞	有	その他
20-B	女	1975	切断・欠損	重度	スキー	スキー	先天	国際入賞	有	医療関係者
20-C	男	1973	脊損・頸損等	重度	アーチェリー	アーチェリー	先天	国際入賞	有	医療関係者
20-D	男	1983	脊損・頸損等	中度	卓球	卓球	先天	国際入賞	有	その他
20-E	男	1967	その他の肢体	重度	車いすテニス	車いすテニス	後天	国際入賞	有	福祉関係者
20-F	男	1970	その他の肢体	中度	水泳	水泳	後天	全国入賞	有	スポーツ関係者
20-G	男	1993	CP	重度	車いすバスケ	陸上	先天	全国入賞	無	教育関係者
20-H	男	1990	切断・欠損	中度	車いすバスケ	車いすバスケ	後天	国際入賞	有	メディア
20-I	女	1997	切断・欠損	中度	車いすバスケ	車いすバスケ	後天	国際出場	有	スポーツ関係者
20-J	男	1955	脊損・頸損等	重度	車いすバスケ	車いすテニス	後天	国際出場	有	医療関係者
20-K	男	1980	視覚	重度	柔道	柔道	後天	国際入賞	有	家族・親族
20-L	男	1988	切断・欠損	軽度	その他	パラバドミントン	先天	国際入賞	有	教育関係者
20-M	男	1977	脊損・頸損等	重度	陸上	陸上	後天	全国出場	有	パラスポーツ選手
21-A	男	1990	脊損・頸損等	重度	ポッチャ	ポッチャ	後天	全国入賞	有	パラスポーツ選手
21-B	男	1982	切断・欠損	中度	スノボ	陸上	後天	国際入賞	有	医療関係者
21-C	男	1985	脊損・頸損等	重度	ツインバスケ	車いすラグビー	後天	国際入賞	有	医療関係者
21-D	男	1980	切断・欠損	中度	陸上	陸上	後天	国際入賞	有	医療関係者
21-E	男	1991	切断・欠損	中度	陸上	陸上	後天	国際入賞	有	医療関係者
21-F	男	1979	脊損・頸損等	重度	車いすバスケ	車いすバスケ	先天	国際入賞	有	家族・親族
21-G	女	1998	切断・欠損	中度	陸上	陸上	後天	国際入賞	有	パラスポーツ選手
21-H	男	1990	切断・欠損	中度	陸上	陸上	後天	国際入賞	有	医療関係者
21-I	男	1966	視覚	重度	柔道	陸上	後天	国際入賞	有	その他のパラスポーツ関係者
21-J	男	1959	切断・欠損	重度	アーチェリー	アーチェリー	後天	全国出場	有	メディア
21-K	女	1961	脊損・頸損等	重度	パラバドミントン	パラバドミントン	先天	国際入賞	不明	パラスポーツ選手
21-L	男	1976	視覚	重度	柔道	柔道	後天	国際入賞	有	
21-M	男	1981	その他の肢体	軽度	スノボ	スノボ	後天	国際入賞	有	メディア
21-N	男	1981	切断・欠損	中度	スノボ	スノボ	後天	国際入賞	有	メディア
21-O	男	1980	切断・欠損	重度	スノボ	スノボ	後天	国際入賞	有	その他
21-P	女	1985	視覚	重度	水泳	水泳	先天	国際入賞	有	その他
21-Q	女	1982	その他の肢体	中度	シッティングバレーボール	シッティングバレーボール	後天	国際入賞	有	メディア
22-A	女	1990	視覚	重度	柔道	柔道	先天	国際入賞	有	教育関係者
22-B	女	1991	切断・欠損	中度	陸上	陸上	後天	全国入賞	有	医療関係者
22-C	女	1962	視覚	重度	STT	STT	後天	全国出場	無	福祉関係者
22-D	男	1972	切断・欠損	中度	車いすバスケ	車いすテニス	後天	国際入賞	有	家族・親族
22-E	女	1977	その他の肢体	重度	車いすテニス	水泳	先天	全国出場	無	その他のパラスポーツ関係者
22-F	男	1979	脊損・頸損等	重度	卓球	卓球	後天	全国入賞	有	
22-G	女	1997	CP	重度	ポッチャ	ポッチャ	先天	国際入賞	無	医療関係者
22-H	男	1990	視覚	重度	その他	ゴールボール	後天	国際出場	有	教育関係者
22-I	男	1999	その他の肢体	重度	ポッチャ	ポッチャ	先天	国際入賞	無	福祉関係者
22-J	男	1982	その他の肢体	中度	パラテコンドー	パラテコンドー	先天	国際入賞	有	メディア
22-K	女	1986	その他の肢体	重度	水泳	パラバドミントン	先天	国際入賞	有	その他のパラスポーツ関係者

判別記号	受け皿	アクセス方法	ロールモデル	開始時重要な他者	継続時重要な他者
19-A	有	他者が車を運転	無	医療関係者	家族・親族
19-B	有	自分で車を運転	有	医療関係者	バラスポーツ選手
19-C	有	自分で車を運転		医療関係者	バラスポーツ選手
19-D	有		有	家族・親族	家族・親族
19-E	有	自分で車を運転	無	その他	バラスポーツ選手
19-F	有			家族・親族	家族・親族
19-G	有			その他	家族・親族
19-H	有			医療関係者	家族・親族
19-I	有			スポーツ関係者	スポーツ関係者
20-A	有		有	バラスポーツ指導者等	バラスポーツ指導者等
20-B	有		有	医療関係者	バラスポーツ指導者等
20-C	有	自分で車を運転		バラスポーツ選手	家族・親族
20-D	有	その他	有	教育関係者	家族・親族
20-E	有	自分で車を運転		バラスポーツ選手	バラスポーツ選手
20-F	有			バラスポーツ指導者等	バラスポーツ選手
20-G	有	その他	有	教育関係者	バラスポーツ指導者等
20-H	有	自分で車を運転		メディア	バラスポーツ選手
20-I	有		有	スポーツ関係者	バラスポーツ選手
20-J	有		有	医療関係者	家族・親族
20-K	有		有	家族・親族	バラスポーツ選手
20-L	有		有	バラスポーツ指導者等	バラスポーツ指導者等
20-M	有			バラスポーツ選手	バラスポーツ選手
21-A	有	他者が車を運転		バラスポーツ選手	家族・親族
21-B	有	自分で車を運転		医療関係者	スポーツ関係者
21-C	有			医療関係者	家族・親族
21-D	有			医療関係者	その他
21-E	有	その他		医療関係者	バラスポーツ選手
21-F	有		有	家族・親族	バラスポーツ選手
21-G	有		有	医療関係者	その他
21-H	有		有	医療関係者	バラスポーツ選手
21-I	有	公共交通（介助なし）		スポーツ関係者	家族・親族
21-J	有			医療関係者	その他
21-K	有			バラスポーツ選手	スポーツ関係者
21-L	有			教育関係者	バラスポーツ選手
21-M	有	自分で車を運転	有	バラスポーツ選手	家族・親族
21-N	有			バラスポーツ選手	家族・親族
21-O	有		有	家族・親族	バラスポーツ選手
21-P	有			その他	バラスポーツ指導者等
21-Q	有			バラスポーツ指導者等	バラスポーツ指導者等
22-A	有			教育関係者	スポーツ関係者
22-B	有	自分で車を運転	有	バラスポーツ選手	バラスポーツ選手
22-C	有			バラスポーツ指導者等	
22-D	有	自分で車を運転		家族・親族	バラスポーツ指導者等
22-E	有	自分で車を運転		その他のバラスポーツ関係者	バラスポーツ指導者等
22-F			有	教育関係者	バラスポーツ選手
22-G	有	他者が車を運転	有	バラスポーツ選手	バラスポーツ指導者等
22-H	有	公共交通（介助なし）		教育関係者	教育関係者
22-I	有	他者が車を運転		バラスポーツ選手	家族・親族
22-J	有		有	スポーツ関係者	スポーツ関係者
22-K	有		有	家族・親族	バラスポーツ選手



## 第2章

# テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信 環境調査



## 調査概要

### (1)調査目的

北京 2022 パラリンピック大会の開催に合わせ、障害者スポーツのテレビメディアでの露出状況(量的、番組傾向、トピックスなど)を把握し、影響度や障害者スポーツの社会的認知度を図る。

### (2)データ抽出内容

放送日時、テレビ局、番組名、放送時間帯、開始時刻、終了時刻、番組カテゴリー、番組内コーナーなどの項目でデータを抽出する。

### (3)データ抽出条件

東京都内での地上波デジタル(サブチャンネルは含まれない)の放送環境を有するテレビ局の東京エリア放送分のデータをもとに、検索対象ワードとして、①“パラリン”、②“障害” AND “スポーツ”、③“障がい” AND “スポーツ”、④“パラスポーツ”の4条件を設定した。①について、“パラ”と設定した場合、パラリンピック関連以外のワードが大量に対象になってしまうために、本調査では、「パラリンピック」「パラリンピアン」のいずれのワードも対象となるように、“パラリン”を検索対象ワードに設定した。なお、対象となったデータ件数は以下の通りである。

(図表 2-1)

	①“パラリン”	②“障害”AND “スポーツ”	③“障がい”AND “スポーツ”	④“パラスポーツ”
バンクーバー大会	758 件	15 件	0 件	0 件
ソチ大会	1,164 件	35 件	3 件	0 件
平昌大会	2,117 件	59 件	8 件	22 件
北京大会	1,409 件	52 件	5 件	11 件

(4)データ抽出期間

(図表 2-2)

	開会前(31 日間)	開催中(12 日間)	開催後(31 日間)
バンクーバー大会	2010/2/9~2010/3/11	2010/3/12~2010/3/21	2010/3/22~2010/4/21
ソチ大会	2014/2/4~2014/3/6	2014/3/7~2014/3/16	2014/3/17~2014/4/16
平昌大会	2018/2/6~2018/3/8	2018/3/9~2018/3/18	2018/3/19~2018/4/18
北京大会	2022/2/1~2022/3/3	2022/3/4~2022/3/13	2022/3/14~2022/4/13

(5)データ提供者

株式会社エム・データ (M Data CO.,Ltd)

住所:東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビルディング 9 階

TEL:03-3519-7060

URL:<https://mdata.tv/>

(6)集計・分析

株式会社サーベイリサーチセンター 調査事務局

住所:東京都荒川区西日暮里 2-40-10

TEL:03-3802-6775

URL:<http://www.surece.co.jp>

## 要約

- ◆ 過去 4 大会の合計放送時間は、バンクーバー大会が 35 時間 27 分 13 秒、ソチ大会が 72 時間 5 分 15 秒、平昌大会が 113 時間 28 分 40 秒、北京大会が 79 時間 18 分 26 秒と、平昌大会で増加した放送時間は、北京大会で減少した。
- ◆ 「開催前」「開催中」「開催後」の北京大会の放送時間をみると、「開催前」はソチ大会、平昌大会、北京大会と大きな違いはみられず、「開催中」はソチ大会から平昌大会にかけて倍増したが、北京大会で減少した。「開催後」はソチ大会から平昌大会にかけて微増したが、北京大会では減少して、ソチ大会と同規模の放送時間であった。
- ◆ 過去4大会のテレビ局の合計放送時間は、「NHK 総合」(139 時間 36 分 18 秒)が最も多く、ついで、「NHK 教育」(46 時間 9 分 9 秒)、「日本テレビ」(31 時間 31 分 24 秒)であった。大会別に 10 時間以上放送しているテレビ局は、バンクーバー大会、ソチ大会では「NHK 総合」「NHK 教育」の 2 局、平昌大会では「NHK 総合」「NHK 教育」「日本テレビ」の 3 局、北京大会では「NHK 総合」「NHK 教育」「日本テレビ」「TBS」の 4 局であった。
- ◆ 過去4大会の番組カテゴリー別の合計放送時間は、「スポーツ」(100 時間 50 分 18 秒)が最も多く、ついで、「ニュース/報道」(95 時間 35 分 35 秒)、「情報/ワイドショー」(64 時間 21 分 11 秒)であった。「スポーツ」「ニュース/報道」「情報/ワイドショー」の放送時間は、平昌大会が最も多く、北京大会ではいずれも減少した。
- ◆ 番組内で取り上げられたコーナー別の放送時間は、過去 4 大会ともに「スポーツ」が最も多かった。「スポーツ」では、ソチ大会から平昌大会にかけて放送時間が倍増したが、平昌大会から北京大会にかけて減少した。

## 調査報告

## 1. メディア放送時間(単純集計)

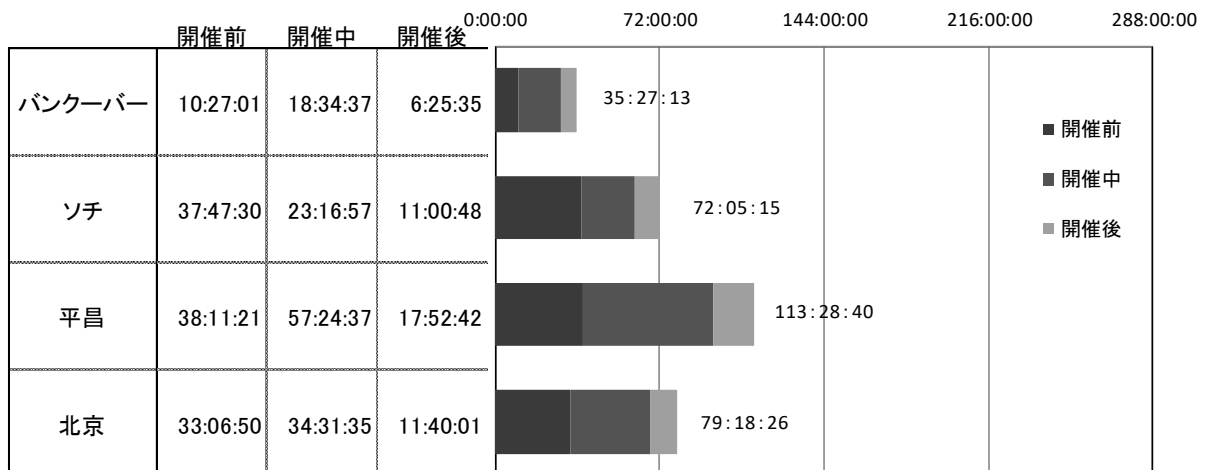
バンクーバー大会、ソチ大会、平昌大会、北京大会の地上波テレビ放送をパラリンピックの開催前1か月、開催中、開催後1か月で見ると、4大会の合計放送時間は、300時間19分34秒であった。

### 1.1 過去4大会(冬季大会)の放送時間の変遷

大会ごとでは、バンクーバー大会が35時間27分13秒、ソチ大会が72時間5分15秒、平昌大会が113時間28分40秒、北京大会が79時間18分26秒であった(図表2-3)。平昌大会で増加した放送時間は、北京大会で減少した。

図表 2-3 過去4大会(冬季大会)の放送時間

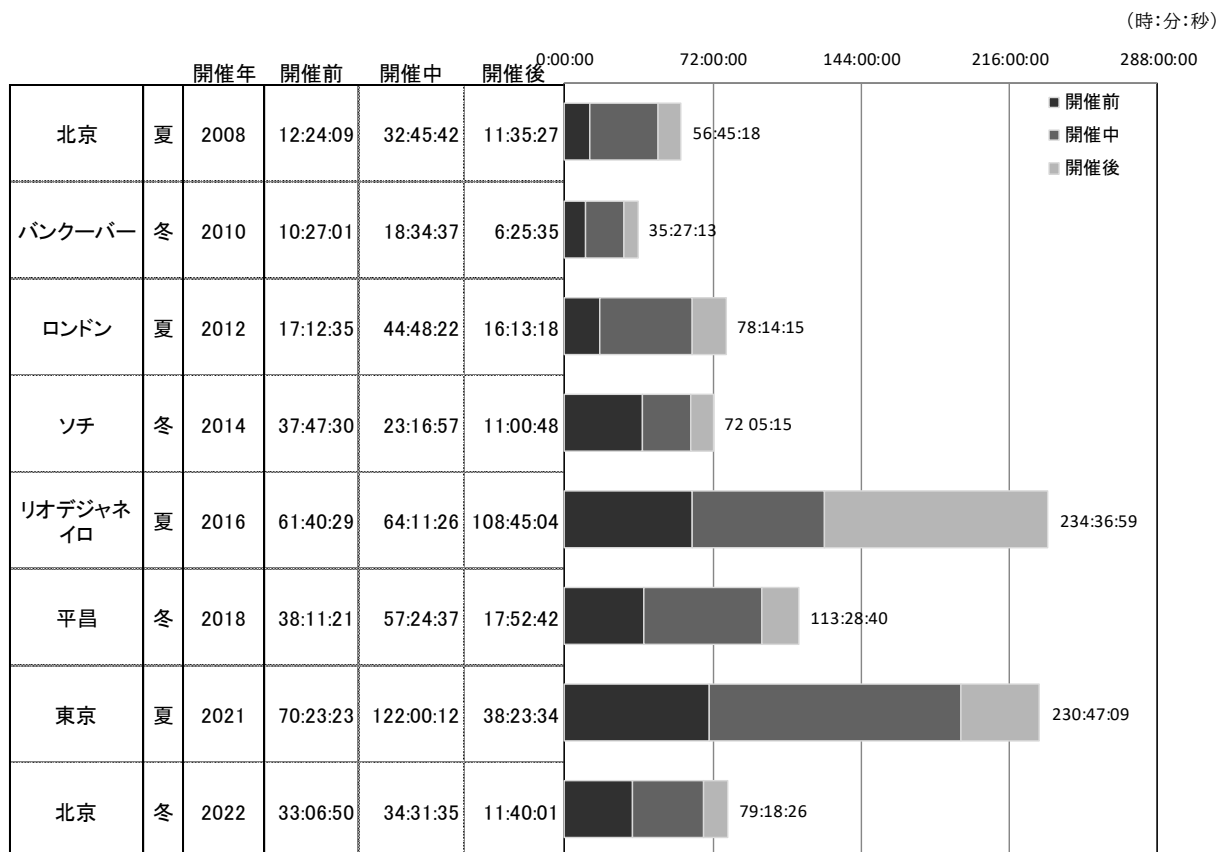
(時:分:秒)



## 1.2 過去 8 大会(夏季・冬季)の放送時間の変遷

夏季大会、冬季大会を合わせた大会ごとの放送時間を時系列でみた。最も放送時間が多かったのはリオデジャネイロ大会の 234 時間 36 分 59 秒、最も放送時間が少なかったのはバンクーバーの 35 時間 27 分 13 秒だった (図表 2-4)。

図表 2-4 過去 8 大会(夏季大会・冬季大会)の放送時間

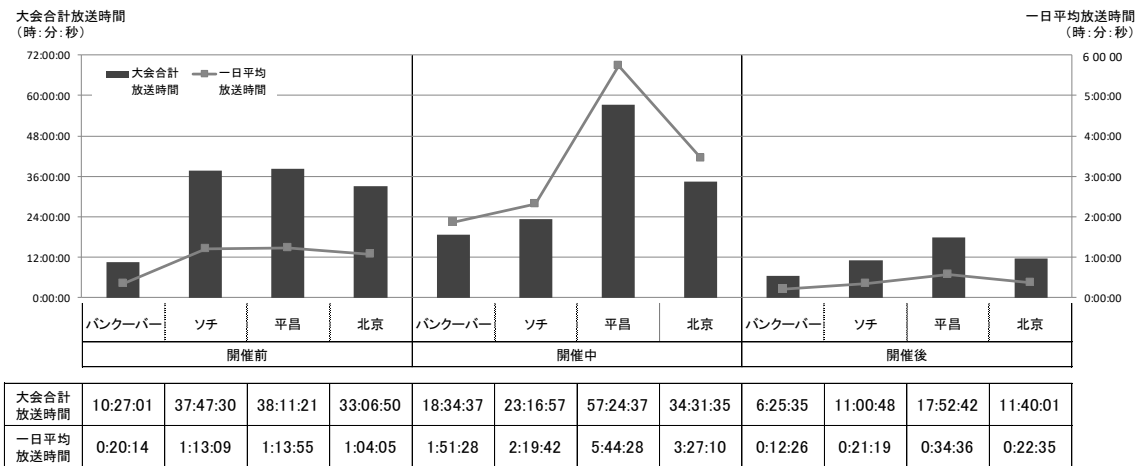


### 1.3 過去4大会(冬季)の開催前・開催中・開催後別放送時間

パラリンピック大会(冬季大会)の「開催前」「開催中」「開催後」にわけて、合計放送時間と一日平均放送時間についてみた(図表 2-5)。「開催前」「開催後」は 31 日間、「開催中」は 10 日間として、一日平均放送時間を算出した。

「開催前」では、バンクーバー大会からソチ大会に放送時間は増加したが、ソチ大会から北京大会にかけて放送時間に大きな違いはみられなかった。「開催中」では、ソチ大会から平昌大会にかけて倍増したが、北京大会では減少した。「開催後」では、ソチ大会から平昌大会にかけて微増したが、北京大会では減少して、ソチ大会と同規模の放送時間であった。

図表 2-5 過去 4 大会(冬季)の開催前、開催中、開催後別放送時間

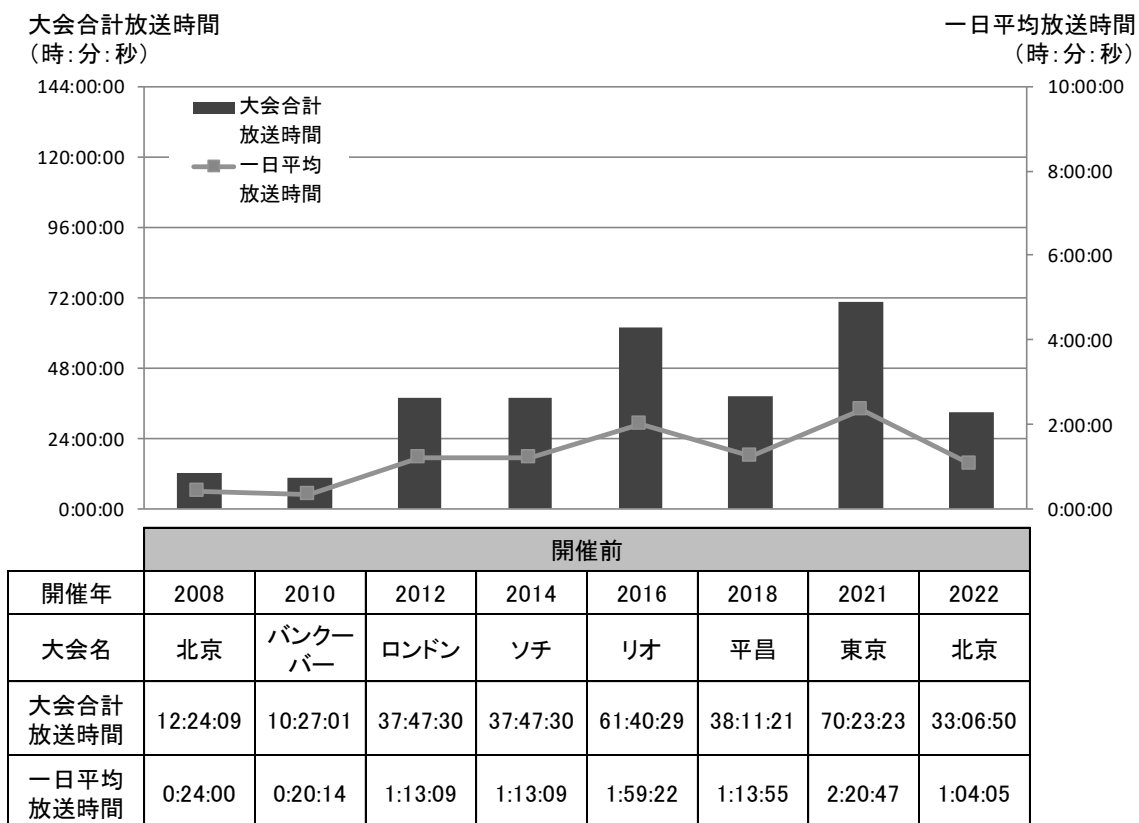


#### 1.4 過去 8 大会(夏季・冬季)の開催前・開催中・開催後別放送時間

過去 8 大会(夏季・冬季)の「開催前」「開催中」「開催後」にわけて、合計放送時間と一日平均放送時間についてみた。「開催前」「開催後」は 31 日間、「開催中」は夏季大会 12 日間、冬季大会 10 日間として、一日平均放送時間を算出した。

「開催前」の一日平均放送時間をみると、東京大会が 2 時間 20 分 47 秒で最も多く、ついでリオ大会の 1 時間 59 分 22 秒だった。ロンドン大会、ソチ大会、平昌大会は 1 時間 13 分台でほぼ同じだった(図表 2-6)。

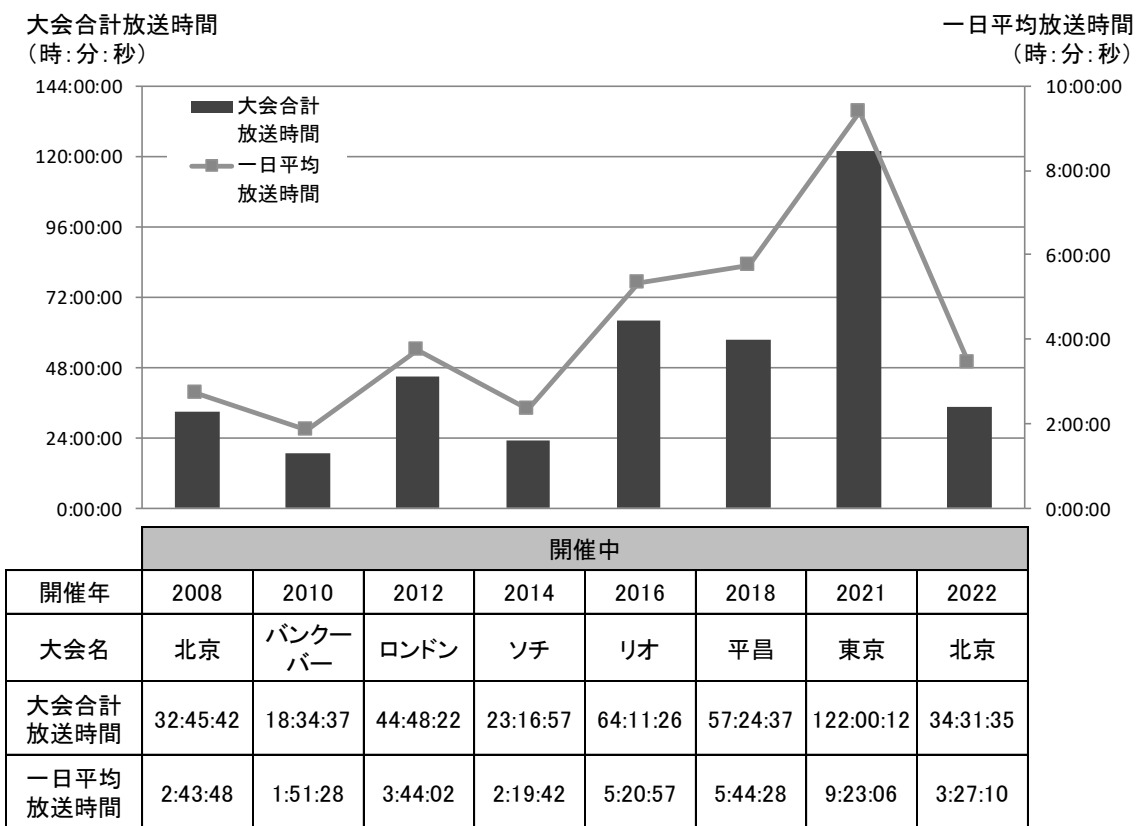
図表 2-6 過去 8 大会(夏季・冬季)の開催前の放送時間





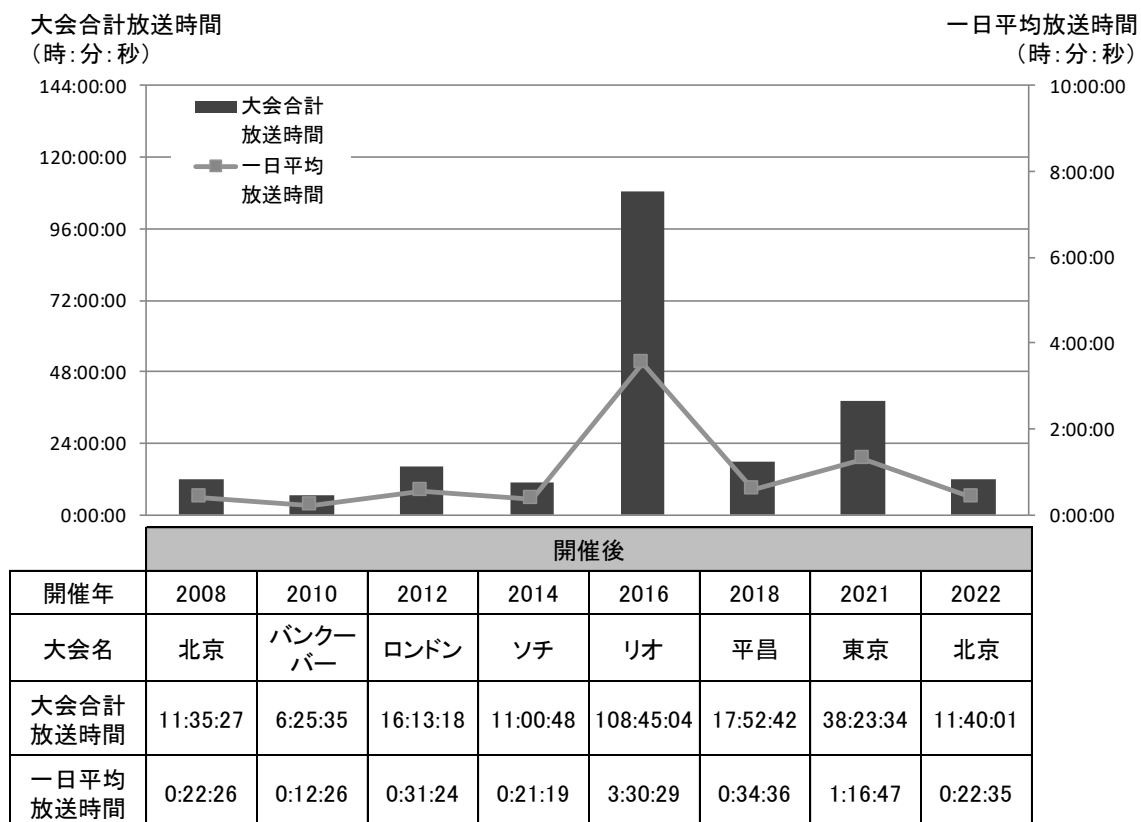
「開催中」の一日平均時間をみると、東京大会 9 時間 23 分 6 秒で最も多く、ついで平昌大会の 5 時間 44 分 28 秒、リオ大会の 5 時間 20 分 57 秒だった(図表 2-7)。東京大会に向けて、リオ大会、平昌大会と一日平均放送時間が徐々に増加した。

図表 2-7 過去 8 大会(夏季・冬季)の開催中の放送時間



「開催後」の一日平均放送時間では、リオ大会が3時間30分29秒で最も多く、ついで東京大会の1時間16分47秒だった(図表2-8)。

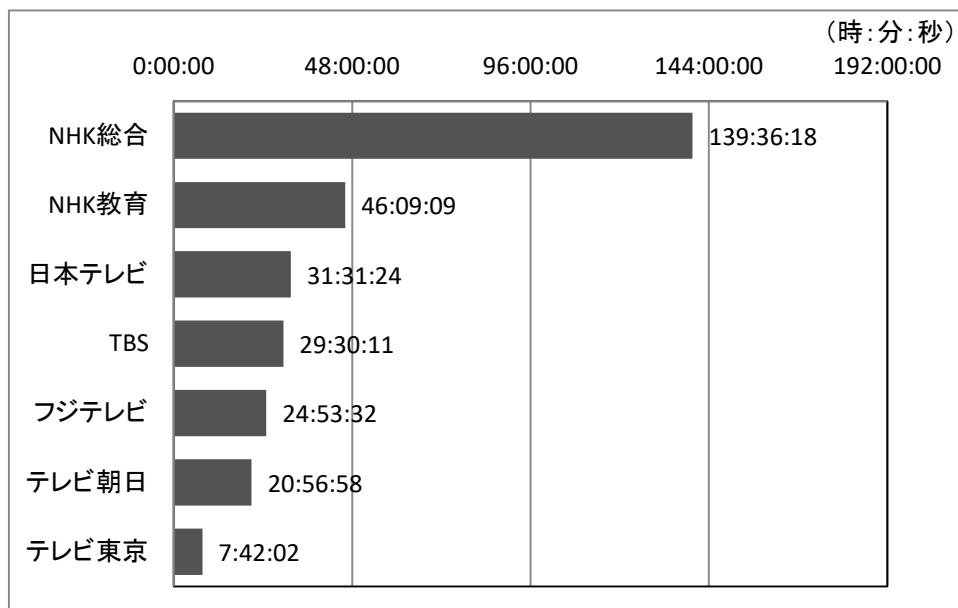
図表2-8 過去8大会(夏季・冬季)の開催後の放送時間



### 1.5 テレビ局ごとの放送時間

テレビ局ごとに過去4大会(冬季)の合計放送時間をみると、「NHK 総合」が139時間36分18秒と最も多く、ついで、「NHK 教育」の46時間9分9秒、「日本テレビ」の31時間31分24秒であった(図表2-9)。

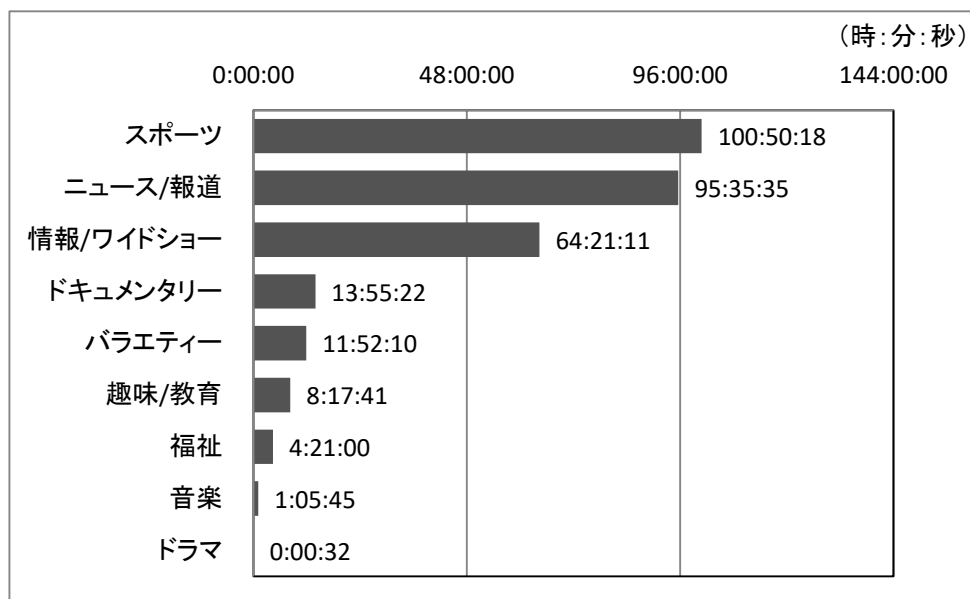
図表2-9 テレビ局の放送時間(過去4大会合計)



## 1.6 番組カテゴリー別にみる放送時間

番組カテゴリー別に過去4大会(冬季)の合計放送時間をみると、最も放送している番組カテゴリーは「スポーツ」(100時間50分18秒)で、ついで、「ニュース/報道」(95時間35分35秒)、「情報/ワイドショー」(64時間21分11秒)であった(図表2-10)。

図表 2-10 番組カテゴリー別にみる放送時間(過去4大会合計)



注) 番組カテゴリーは番組自体の分類を指し、番組内コーナーは番組内で取り上げたコーナーのことを指す。例えば、ニュース番組内のスポーツコーナーでパラリンピアンについての話題を取り上げた場合、番組カテゴリーは「ニュース/報道」、番組内コーナーは「スポーツ」となる。

参考までに、番組カテゴリー別に主な番組名をまとめると、図表 2-11 の通りである。

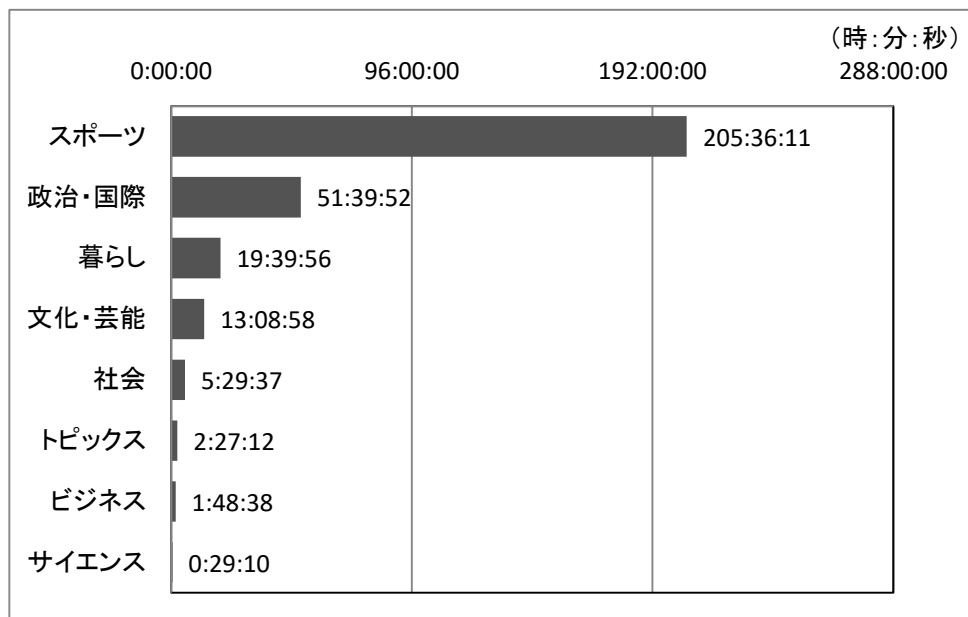
図表 2-11 番組カテゴリー別にみる主なテレビ番組

番組カテゴリー	『番組名』(テレビ局名)
情報/ワイドショー	『ハートネットTV(NHK総合)』『週刊まるわかりニュース(NHK総合)』 『ZIP! (日本テレビ)』『スッキリ(日本テレビ)』『シューイチ(日本テレビ)』 『ノンストップ! (フジテレビ)』『ひるおび(TBS)』『サンデーモーニング(TBS)』 『とくダネ! (フジテレビ)』『めざましテレビ(フジテレビ)』『Mr. サンデー(フジテレビ)』 『グッド! モーニング(テレビ朝日)』『羽鳥慎一モーニングショー(テレビ朝日)』 『なないろ日和! (テレビ東京)』など
ニュース/報道	『週刊こどもニュース(NHK総合)』『ニュース7(NHK総合)』『ニュースウオッチ9(NHK総合)』 『newsevery,(日本テレビ)』『news zero(日本テレビ)』 『サンデーモーニング(TBS)』『news23(TBS)』『Nスタ(TBS)』 『FNNLiveNews α (フジテレビ)』『LiveNewsイット! (フジテレビ)』 『報道ステーション(テレビ朝日)』『サンデーLIVE!! (テレビ朝日)』 『ワールドビジネスサテライト(テレビ東京)』『Newsモーニングサテライト(テレビ東京)』など
スポーツ	『北京オリンピック(NHK総合)』『北京パラリンピックデイリーハイライト(NHK総合)』 『Going! Sports & News(日本テレビ)』 『S☆1PLUS(TBS)』 『北京オリンピック(フジテレビ)』『S-PARK(フジテレビ)』 『SPORTSウォッチャー(テレビ東京)』など

### 1.7 番組内コーナー別にみる放送時間

番組内で取り上げられたコーナー別に過去4大会(冬季)の合計放送時間をみると、最も取り上げられることが多かったコーナーは「スポーツ」(205時間36分11秒)で、ついで、「政治・国際」(51時間39分52秒)であった(図表2-12)。

図表 2-12 番組内コーナー別にみる放送時間(過去4大会合計)



注) 番組カテゴリーは番組自体の分類を指し、番組内コーナーは番組内で取り上げたコーナーのことを指す。例えば、ニュース番組内のスポーツコーナーでパラリンピアンについての話題を取り上げた場合、番組カテゴリーは「ニュース/報道」、番組内コーナーは「スポーツ」となる。

## 2. メディア放送時間(クロス集計)

### 2.1 テレビ局ごとにみた過去4大会(冬季)の放送時間

テレビ局ごとに過去4大会(冬季)の放送時間をみた。「NHK 総合」「日本テレビ」「テレビ朝日」は平昌大会が最も多く、「TBS」「フジテレビ」「テレビ東京」では、北京大会に向けて徐々に放送時間が増加した(図表 2-13)。10 時間以上放送したテレビ局を大会別にみると、バンクーバー大会、ソチ大会では「NHK 総合」「NHK 教育」の2局、平昌大会では「NHK 総合」「NHK 教育」「日本テレビ」の3局、北京大会では「NHK 総合」「NHK 教育」「日本テレビ」「TBS」の4局であった。

図表 2-13 テレビ局別にみる過去4大会(冬季)の放送時間

(時:分:秒)

		0:00:00	24:00:00	48:00:00	72:00:00
NHK 総合	バンクーバー	15:57:08			
	ソチ	36:48:08			
	平昌	60 32 54			
	北京	26:18:08			
NHK 教育	バンクーバー	10:06:12			
	ソチ	13:05:44			
	平昌	11:39:58			
	北京	11:17:15			
日本テレビ	バンクーバー	1:55:18			
	ソチ	6:30:50			
	平昌	12 29:19			
	北京	10:35 57			
TBS	バンクーバー	4:34:49			
	ソチ	6:12:48			
	平昌	8:04:27			
	北京	10 38:07			
フジテレビ	バンクーバー	1 24:13			
	ソチ	6:02:45			
	平昌	8:36:48			
	北京	8:49:46			
テレビ朝日	バンクーバー	1:06:48			
	ソチ	2 32 51			
	平昌	8:54:41			
	北京	8:22:38			
テレビ東京	バンクーバー	0:22:45			
	ソチ	0:52:09			
	平昌	3:10:33			
	北京	3:16:35			

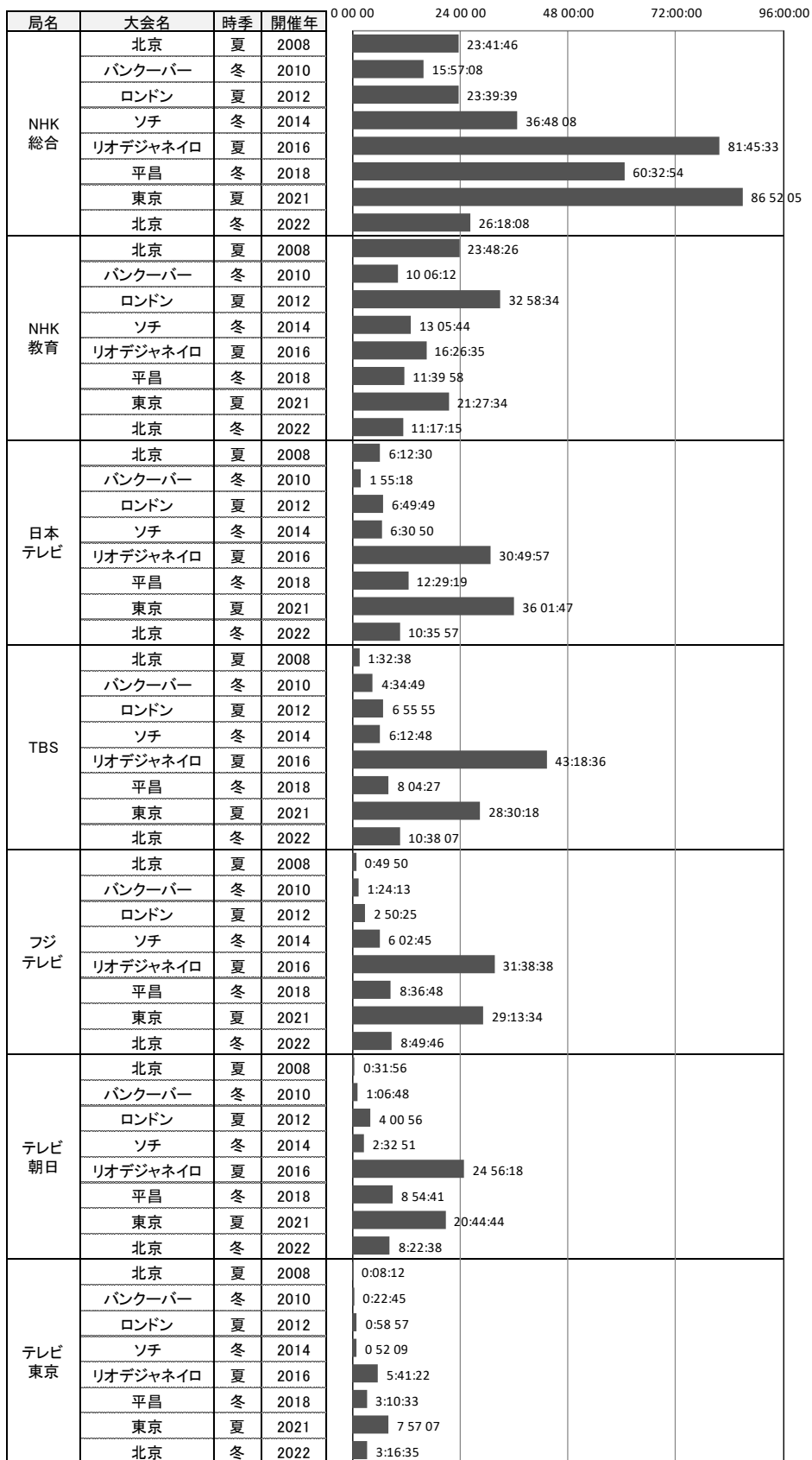
## 2.2 テレビ局ごとにみた過去 8 大会(夏季・冬季)の放送時間

テレビ局ごとに過去 8 大会(夏季・冬季)の放送時間をみた。最も放送時間が多かったのは「NHK 総合」の東京大会の 86 時間 52 分 5 秒だった(図表 2-14)。テレビ局別に最も放送時間の多かった大会をみると、「日本テレビ」「テレビ東京」は東京大会、「TBS」「フジテレビ」「テレビ朝日」はリオデジャネイロ大会だった。



図表 2-14 テレビ局別にみる過去 8 大会(夏季・冬季)の放送時間

(時:分:秒)

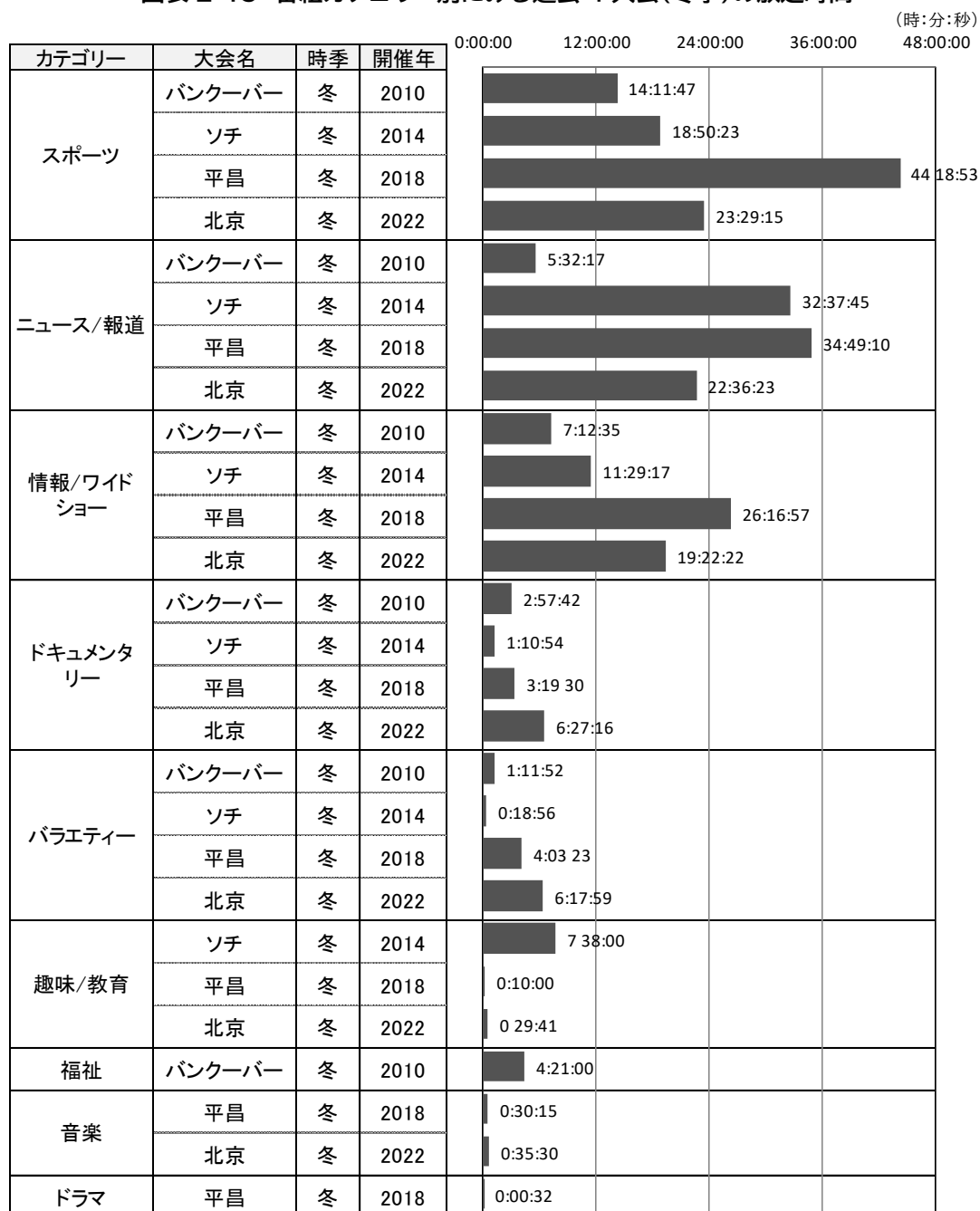


テレビ放送

## 2.3 番組カテゴリー別にみる過去 4 大会(冬季)の放送時間

番組カテゴリー別に過去 4 大会(冬季)の放送時間をみると、「スポーツ」「ニュース/報道」「情報/ワイドショー」は、平昌大会が最も多く、北京大会でいずれも減少した(図表 2-15)。

図表 2-15 番組カテゴリー別にみる過去 4 大会(冬季)の放送時間

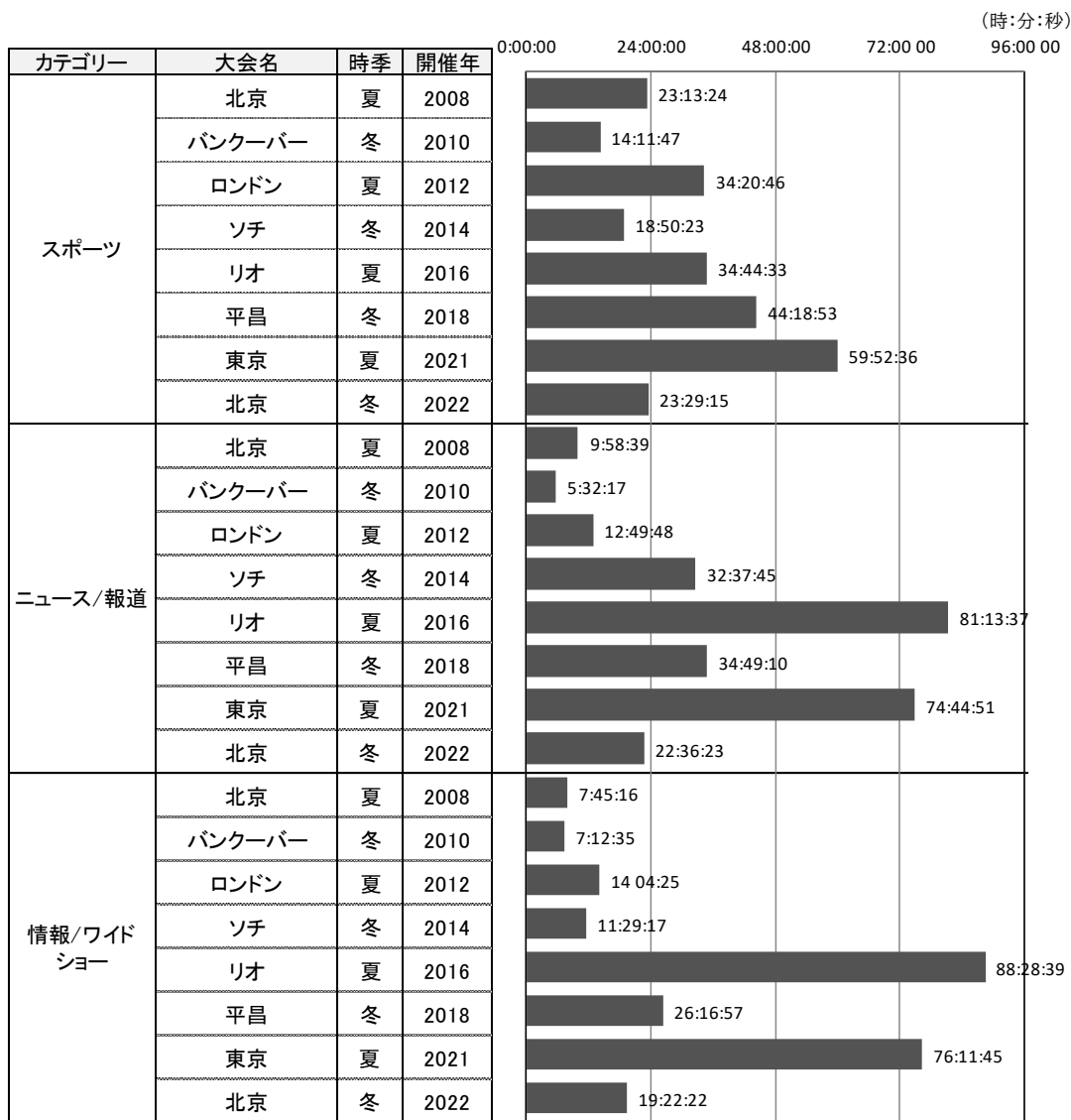


注) 番組カテゴリーは番組自体の分類を指し、番組内コーナーは番組内で取り上げたコーナーのことを指す。例えば、ニュース番組内のスポーツコーナーでパラリンピアンについての話題を取り上げた場合、番組カテゴリーは「ニュース/報道」、番組内コーナーは「スポーツ」となる。

## 2.4 番組カテゴリー別にみる過去 8 大会(夏季・冬季)の放送時間

番組カテゴリー別に過去 8 大会(夏季・冬季)の放送時間を、「情報/ワイドショー」「ニュース/報道」「スポーツ」についてみた。「情報/ワイドショー」「ニュース/報道」では、リオデジャネイロ大会が最も多く、ついで東京大会だった。「スポーツ」では、リオデジャネイロ大会、平昌大会と徐々に増え、東京大会が最も多かった(図表 2-16)。

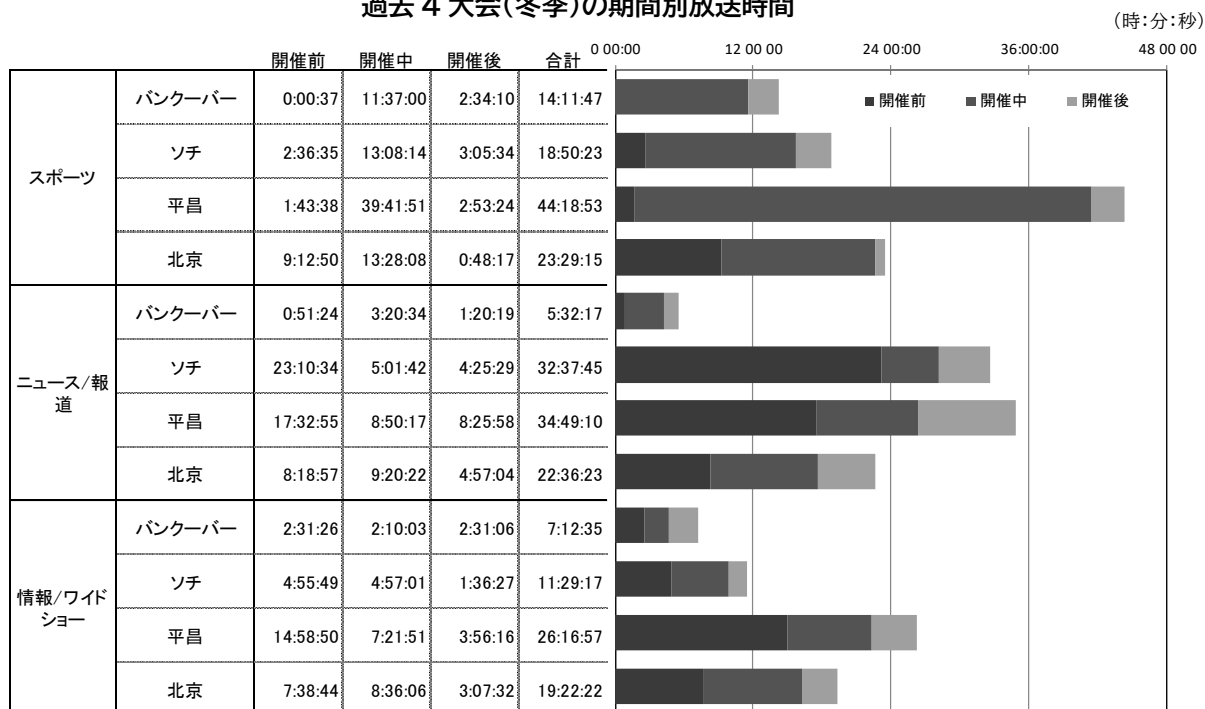
図表 2-16 番組カテゴリー別にみる過去8大会(夏季・冬季)の放送時間



## 2.5 番組カテゴリー別(上位3カテゴリー)にみる過去4大会(冬季)の期間別放送時間

番組カテゴリー別(上位3カテゴリー)の過去4大会(冬季)の放送時間を「開催前」「開催中」「開催後」でみると、「スポーツ」は平昌大会の「開催中」が最も多く、「ニュース/報道」はソチ大会の「開催前」、「情報/ワイドショー」は平昌大会の「開催前」が最も多かった(図表2-17)。

図表 2-17 番組カテゴリー別(上位3カテゴリー)にみる  
過去4大会(冬季)の期間別放送時間

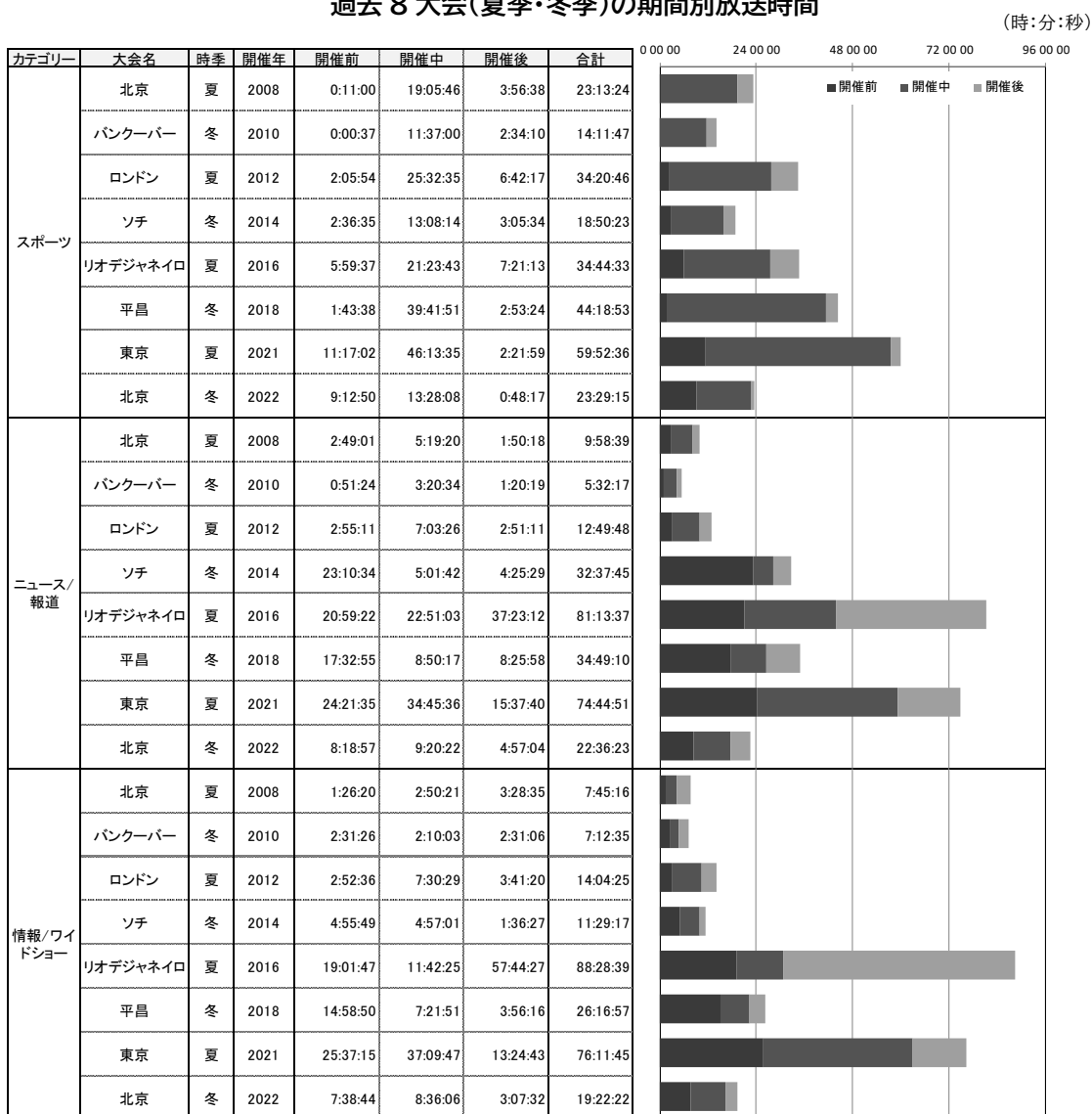


注) 番組カテゴリーは番組自体の分類を指し、番組内コーナーは番組内で取り上げたコーナーのことを指す。例えば、ニュース番組内のスポーツコーナーでパラリンピアンについての話題を取り上げた場合、番組カテゴリーは「ニュース/報道」、番組内コーナーは「スポーツ」となる。

## 2.6 番組カテゴリー別(上位3カテゴリー)にみる過去8大会(夏季・冬季)の期間別放送時間

番組カテゴリー別(上位3カテゴリー)の過去8大会(夏季・冬季)の放送時間を「開催前」「開催中」「開催後」でみると、「スポーツ」は、東京大会の「開催中」が最も多く、「ニュース/報道」「情報/ワイドショー」は、リオデジャネイロ大会の「開催後」が最も多かった(図表2-18)。

図表2-18 番組カテゴリー別(上位3カテゴリー)にみる過去8大会(夏季・冬季)の期間別放送時間

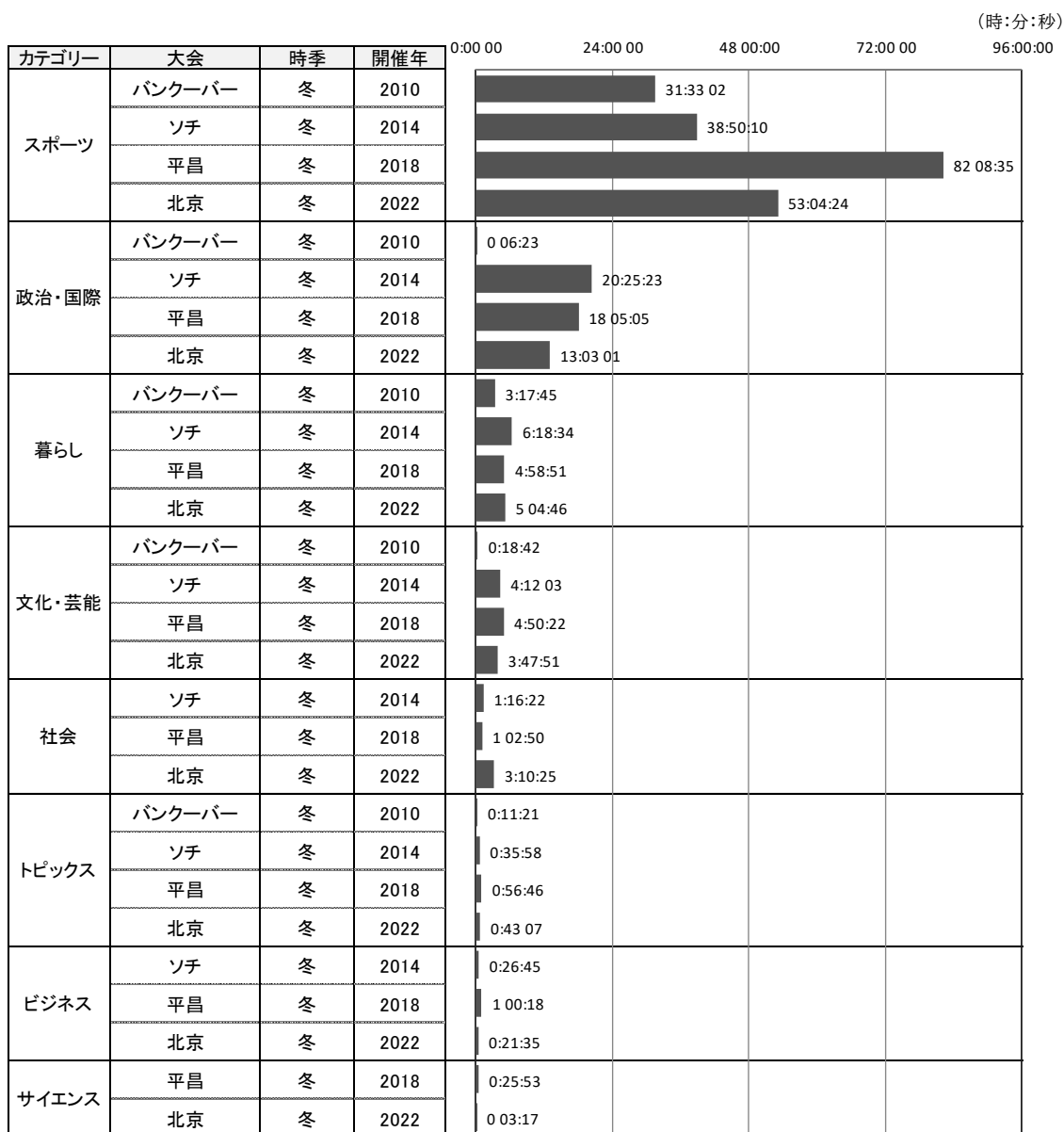


注) 番組カテゴリーは番組自体の分類を指し、番組内コーナーは番組内で取り上げたコーナーのことを指す。例えば、ニュース番組内のスポーツコーナーでパラリンピアンについての話題を取り上げた場合、番組カテゴリーは「ニュース/報道」、番組内コーナーは「スポーツ」となる。

## 2.7 番組内コーナー別にみる過去4大会(冬季)の放送時間

番組内で取り上げられたコーナー別に過去4大会(冬季)の放送時間をみると、過去4大会ともに「スポーツ」コーナーで取り上げられる放送時間が最も多かった(図表 2-19)。「政治・国際」では、ソチ大会、平昌大会、北京大会と放送時間が10時間以上だった。

図表 2-19 番組内コーナー別にみる過去4大会(冬季)の放送時間

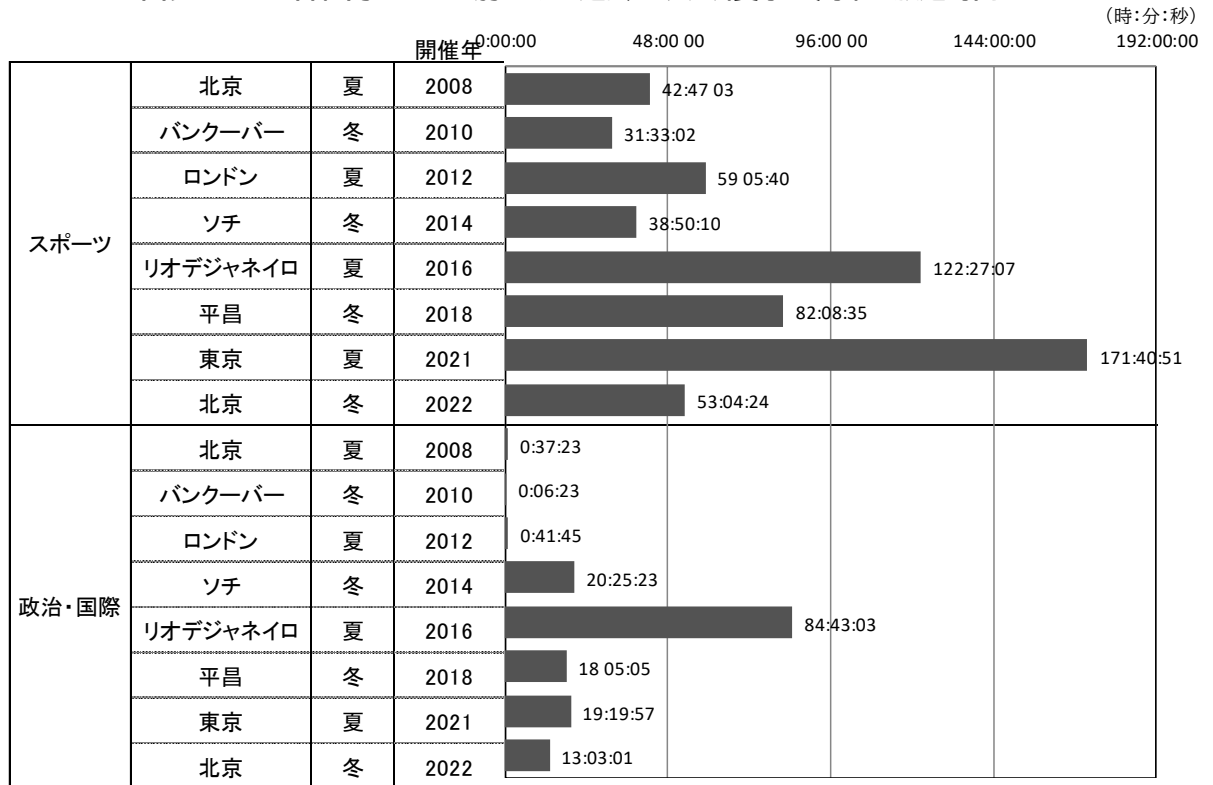


注) 番組カテゴリーは、番組自体の分類を指し、番組内コーナーは番組内で取り上げたコーナーのことを指す。例えば、ニュース番組内のスポーツコーナーでパラリンピアンについての話題を取り上げた場合、番組カテゴリーは「ニュース/報道」、番組内コーナーは「スポーツ」となる。

## 2.8 番組内コーナー別(上位 2 位)にみる過去 8 大会(夏季・冬季)の放送時間

番組内で取り上げられたコーナーの上位 2 位の「スポーツ」「政治・国際」について、過去 8 大会(夏季・冬季)の放送時間をみた(図表 2-20)。「スポーツ」コーナーでは東京大会(171 時間 40 分 51 秒)が最も多く、ついでリオデジャネイロ大会(122 時間 27 分 7 秒)だった。「政治・国際」では、リオデジャネイロ大会(84 時間 43 分 3 秒)が最も多く、ついでソチ大会(20 時間 25 分 23 秒)、東京大会(19 時間 19 分 57 秒)、平昌大会(18 時間 5 分 5 秒)だった。

図表 2-20 番組内コーナー別にみる過去 8 大会(夏季・冬季)の放送時間



注) 番組カテゴリーは、番組自体の分類を指し、番組内コーナーは番組内で取り上げたコーナーのことを指す。例えば、ニュース番組内のスポーツコーナーでパラリンピアンについての話題を取り上げた場合、番組カテゴリーは「ニュース/報道」、番組内コーナーは「スポーツ」となる。

### 3.北京大会日本代表選手別の放送時間

北京大会に出場した日本代表選手 29 人のうち、放送時間の多い上位 20 人は以下の通りであった(図表 2-21)。

図表 2-21 北京大会の放送時間が長い選手上位 20 位

NO.	氏名	ふりがな	競技	(時:分:秒)
				放送時間 合計
1	村岡桃佳	むらおかももか	アルペンスキー	11:11:00
2	川除大輝	かわよけ たいき	クロスカントリースキー	7:48:11
3	新田佳浩	にったよしひろ	クロスカントリースキー	6:26:33
4	森井大輝	もりいたいき	アルペンスキー	5:44:21
5	岡本圭司	おかもとけいじ	スノーボード	3:06:45
6	小栗大地	おぐりだいち	スノーボード	2:44:09
7	森宏明	もりひろあき	クロスカントリースキー／バイアスロン	2:05:34
8	大岩根正隆	おおいわね まさたか	スノーボード	1:51:13
9	鈴木猛史	すずきたけし	アルペンスキー	1:38:52
10	田中佳子	たなかよしこ	アルペンスキー	0:59:16
11	狩野亮	かのうあきら	アルペンスキー	0:50:08
12	小須田潤太	こすだじゅんた	スノーボード	0:48:03
13	本堂杏実	ほんどう あんみ	アルペンスキー	0:33:18
14	原田紀香	はらだのりか	アルペンスキー	0:29:49
15	岩本啓吾	いわもと けいご	クロスカントリースキー	0:29:02
16	田淵伸司	たぶちしんじ	スノーボード	0:28:27
17	出来島桃子	できじまももこ	クロスカントリースキー／バイアスロン	0:28:23
18	佐藤圭一	さとうけいいち	クロスカントリースキー／バイアスロン	0:27:52
19	市川貴仁	いちかわたかひと	スノーボード	0:25:58
20	藤原哲	ふじわらてつ	アルペンスキー	0:25:03



開催前、開催中、開催後ごとの放送時間の多い上位 10 人は以下の通りであった(図表 2-22)。

図表 2-22 北京大会の放送時間が長い選手上位 10 位(開催前・開催中・開催後)

(時:分:秒)

NO.	開催前			開催中			開催後		
	氏名	競技	放送時間	氏名	競技	放送時間	氏名	競技	放送時間
1	村岡桃佳	アルペン スキー	2:49:36	村岡桃佳	アルペン スキー	6:58:19	村岡桃佳	アルペン スキー	1:23:05
2	新田佳浩	クロスカント リースキー	2:30:47	川除大輝	クロスカント リースキー	5:10:28	川除大輝	クロスカント リースキー	0:53:14
3	森井大輝	アルペン スキー	2:07:40	新田佳浩	クロスカント リースキー	3:46:27	鈴木猛史	アルペン スキー	0:25:29
4	岡本圭司	スノーボード	1:47:25	森井大輝	アルペン スキー	3:13:24	森井大輝	アルペン スキー	0:23:17
5	川除大輝	クロスカント リースキー	1:44:29	小栗大地	スノーボード	1:27:52	本堂杏実	アルペン スキー	0:18:40
6	小栗大地	スノーボード	1:16:17	岡本圭司	スノーボード	1:14:20	小須田潤太	スノーボード	0:16:39
7	森宏明	クロスカント リースキー	1:13:42	田中佳子	アルペン スキー	0:54:25	新田佳浩	クロスカント リースキー	0:09:19
8	大岩根正隆	スノーボード	0:58:25	鈴木猛史	アルペン スキー	0:53:42	岡本圭司	スノーボード	0:05:00
9	鈴木猛史	アルペン スキー	0:19:41	大岩根正隆	スノーボード	0:52:48	田中佳子	アルペン スキー	0:04:51
10	田淵伸司	スノーボード	0:04:07	森宏明	クロスカント リースキー	0:51:52	狩野亮	アルペン スキー	0:04:31

#### 4.まとめと考察

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で1年延期となった東京2020パラリンピック競技大会が終了して1年以上が経過した。本調査は、2021年9月に閉幕した東京パラリンピックから、半年後に開催された北京2022パラリンピック大会の地上波テレビ放送時間に、夏季・冬季合わせた過去8大会のパラリンピックの放送時間を追加し、集計・分析したものである。

まずは、冬季大会について概観する。大会別の放送時間をみると、バンクーバー大会(35時間27分13秒)、ソチ大会(72時間5分15秒)、平昌大会(113時間28分40秒)と放送時間は大会を重ねるごとに増加していたが、北京大会(79時間18分26秒)で減少した。大会を「開催前」「開催中」「開催後」にわけてみると、「開催前」はソチ大会、平昌大会、北京大会と放送時間に大きな違いはみられず、「開催後」についても、ソチ大会から平昌大会にかけて微増はあったが、北京大会含めて、放送時間に大きな違いはなかった。「開催中」では、ソチ大会から平昌大会にかけて倍増したが、北京大会では減少し、平昌大会の開催期間の放送時間が非常に多かった。テレビ局ごとにみると、4大会の合計放送時間は「NHK総合」が最も多く、ついで「NHK教育」「日本テレビ」「TBS」となっている。過去4大会でみると、「NHK総合」では平昌大会(60時間32分54秒)から北京大会(26時間18分8秒)で放送時間は半減以上となった。これはソチ大会(36時間48分8秒)よりも減少したことになる。要因として考えられるのが、日本代表選手の選手数と参加競技数である(図表2-23)。平昌大会の選手数は38人、参加競技数は4競技(アルペンスキー、クロスカントリースキー/バイアスロン、スノーボード、アイスホッケー)である。ソチ大会、北京大会と比べても選手数、参加競技数ともに多い。選手数が多く、参加競技数も多いと、多くの日本代表選手に注目した放送をすることが可能となることから、過去4大会で平昌大会の放送時間が最も多かった理由の1つだと推察する。一方で、北京大会とソチ大会を比較すると、選手数、参加競技数ともに北京大会の方が多い。平時であれば、北京大会の放送時間の方が多かったと予想できるが、北京大会の開催時期は、ロシアによるウクライナ侵攻と重なり、限られた放送時間を社会的影響力のあるニュースに譲ったと考えるのが自然だろう。さらに、選手数、参加競技数をみると、バンクーバー大会が過去4大会では最多である。ただ、開催した2010年は、東京でのパラリンピック開催が決定する2013年よりも前の時期にあたる。メディアの注目度もそれほど大きくなく、それが放送時間にも影響したと推察できる。

図表 2-23 冬季大会の日本代表選手団の選手数と参加競技

		バンクーバー 2010大会	ソチ 2014大会	平昌 2018大会	北京 2022大会
選手数		41	20	38	29
競技	アルペンスキー	13	12	9	14
	クロスカントリースキー／ バイアスロン	8	8	9	9
	スノーボード			3	6
	アイスホッケー (アイススレッジホッケー)	15		17	
	車いすカーリング	5			

続いて、2008年以降のパラリンピックの放送時間を概観する。夏季・冬季を合わせた過去8大会の放送時間と日本代表選手数をまとめた(図表2-24)。日本代表選手数をみると、夏季大会、冬季大会で大きな差があることがわかる。出場する日本選手数や実施競技数などが夏季と冬季では大きく異なることから、一概に比較することは難しいことが図表からも確認できる。放送時間に着目すると、100時間を超えたのはリオ大会、平昌大会、東京大会の3大会である。2013年に東京パラリンピックの開催が決定し、東京2020組織委員会が発足したのが2014年1月である。東京2020スポンサーシッププログラムが開始された2015年から、メディアが東京大会に向けた機運醸成のフェーズに入ったと推察でき、その翌年リオ大会を迎えた。メディアにとってリオ大会は、東京大会に向けたリハーサル的な意味合い、様々な試験的な取り組みに挑戦した大会だったと言えるだろう。その結果が、初めて200時間を超える放送時間につながったと考える。大会開催後の放送時間もリオ大会だけが100時間以上だったことから、平昌、東京に向けた機運醸成の観点では、リオ大会は、非常に重要な大会であったと言えるだろう。

図表 2-24 過去 8 大会(夏季・冬季)の放送時間と日本代表選手数

大会名	時季	開催年	放送時間	(時:分:秒)			日本代表選手数
				開催前	開催中	開催後	
北京	夏	2008	56:45:18	12:24:09	32:45:42	11:35:27	162
バンクーバー	冬	2010	35:27:13	10:27:01	18:34:37	6:25:35	41
ロンドン	夏	2012	78:14:15	17:12:35	44:48:22	16:13:18	134
ソチ	冬	2014	72:05:15	37:47:30	23:16:57	11:00:48	20
リオデジャネイロ	夏	2016	234:36:59	61:40:29	64:11:26	108:45:04	132
平昌	冬	2018	113:28:40	38:11:21	57:24:37	17:52:42	38
東京	夏	2021	230:47:09	70:23:23	122:00:12	38:23:34	254
北京	冬	2022	79:18:26	33:06:50	34:31:35	11:40:01	29

こうした事情から、放送時間の観点で見れば、リオ大会、平昌大会、東京大会の 3 大会は、TV 各局も特別な報道体制がとられたこともあり、国内で開催された東京大会に向けた機運醸成の役割を担った“特別”な大会であったと位置づけることができる。“特別”な大会が終了し、コロナ禍、ロシア・ウクライナ問題があるとはいえ、“平時”に戻った北京大会をどう捉えるかは、ソチ大会との比較でみるのが、現実的だ。ソチ大会(72 時間 5 分 15 秒)と比べて、北京大会(79 時間 18 分 26 秒)は同規模の放送時間を維持している。東京大会で盛り上がりを見せた放送時間が、“特別”の大会が終了した後どのように変化したかについては、同じ夏季大会であり、“平時”に戻った 2024 年のパリ大会をみて評価したいと考える。

(小淵和也)

## 【コラム】 ロシア・ウクライナ問題について考える

笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所

政策ディレクター 小淵和也

本調査の実施期間中にロシアのウクライナへの軍事侵攻が始まった。コロナ禍で実施された東京 2020 パラリンピック大会に続き、北京 2022 大会も、大会開催の是非を含めて、過去のパラリンピックとは一線を画す形での大会となった。本稿では、ロシアによるウクライナ軍事侵攻(以下、ロシア・ウクライナ問題)に焦点をあてて、放送時間をみていく。

ロシア・プーチン大統領は、2022 年 2 月 24 日、ウクライナ東部での軍事作戦決行を発表した。対するウクライナ・ゼレンスキー大統領もロシアとの国交断絶を宣言し、ウクライナ全土に戒厳令を発令し、市民に抗戦を呼びかけた。そうした緊迫した国際情勢は、2022 年 3 月 4 日に開催を控えた北京大会にも大きな影響を及ぼした。北京大会の開催前、開催中、開催後の障害者スポーツやパラリンピックに関する放送時間は合計 79 時間 18 分 26 秒、そのうち、ロシア・ウクライナ問題に関する放送時間は、20 時間 11 分 58 秒と放送時間の 4 分の 1 を占めた(図表 2-25)。「開催前」「開催中」「開催後」でロシア・ウクライナ問題に関連する割合をみていくと、開催前(19.2%)、開催中(28.8%)、開催後(33.6%)と戦禍が悪化するにつれて、占める割合が増えていったことがわかる。

図表 2-25 北京大会の放送時間におけるロシア・ウクライナ問題の放送時間

(時:分:秒)

	開催前	開催中	開催後	計
北京全体	33:06:50	34:31:35	11:40:01	79:18:26
ロシア・ウクライナ関連	6:20:48	9:55:50	3:55:20	20:11:58
割合	19.2%	28.8%	33.6%	25.5%

テレビ番組内で取り上げられたコーナー別にロシア・ウクライナ問題に関する報道をみると、「スポーツ」が 10 時間 9 分 13 秒と最も多く、ついで「政治・国際」の 9 時間 46 分 31 秒であった(図表 2-26)。コーナー別の放送時間の割合をみると、「スポーツ」では 19.1%であったが、「政治・国際」では 74.9%と、放送時間の多くをロシア・ウクライナ問題に割いていたことがわかる。

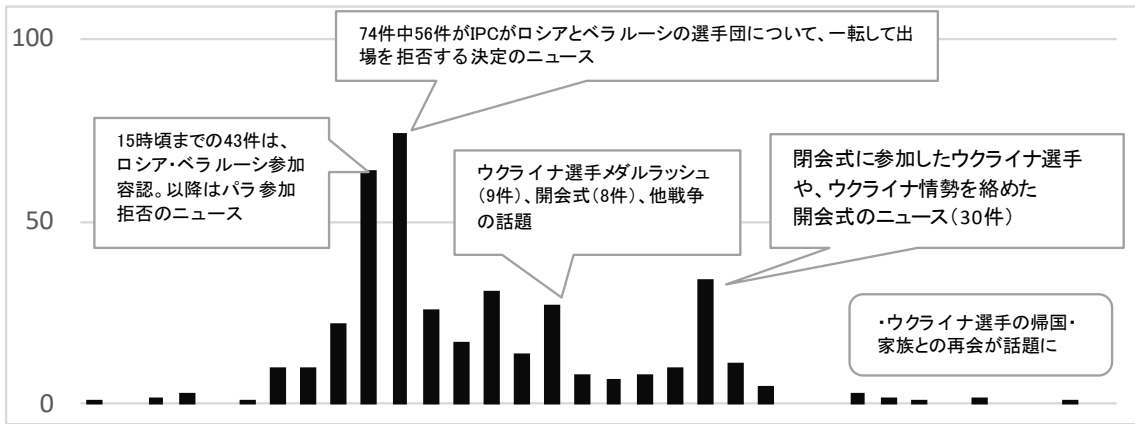
図表 2-26 北京大会の番組内コーナー別にみる放送時間とロシア・ウクライナ問題の割合

コーナー	放送時間 (時:分:秒)		コーナー別放送時間に占める割合
	全体	ロシア・ウクライナ関連	
スポーツ	53:04:24	10:09:13	19.1%
政治・国際	13:03:01	9:46:31	74.9%
暮らし	5:04:46	0:12:26	4.1%
文化・芸能	3:47:51	0:00:14	0.1%
社会	3:10:25	-	-
トピックス	0:43:07	0:03:34	8.3%
ビジネス	0:21:35	-	-
サイエンス	0:03:17	-	-

放送時間と戦禍の経過を日別に追っていく(図表 2-27)。ロシア軍のウクライナ侵攻が続く中、国際パラリンピック委員会(IPC)は3月2日に国旗、国歌を使わない「中立選手」としての参加を容認することを発表したが、翌日に一転して、ロシアとロシアのウクライナ侵攻に協力的なベラルーシの選手のパラリンピック出場を認めないと、改めてリリースを出した。3月3日、4日の放送件数が急増したのは、IPCの方針転換が理由として考えられる。北京大会の開幕後は、ロシア・ベラルーシ選手の出場不可の話題から、戦禍で大会に参加したウクライナ選手の活躍に目が向けられてきた。大会序盤には、ウクライナ選手の開会式参加やメダル獲得の報道が増え、大会終盤にはウクライナ選手の閉会式出席や激化してきた戦禍のウクライナ情勢に絡めた報道が多くなった。大会閉幕後は、パラリンピックを絡めた報道は減少し、ウクライナ選手の帰国や家族との再会が話題となった。

放送時間と放送件数でロシア・ウクライナ問題を見てきたが、平和の祭典であるパラリンピックの報道にこれほどまでに戦争関連の話題が混じった大会は、過去にはなかったのではないかと。改めて、スポーツができることのありがたさを感じつつも、異例の大会の中でプレーせざるを得なかった選手の心情を察するに余りあると言えよう。

図表 2-27 北京大会前後におけるロシア・ウクライナ問題の放送件数と戦禍の状況



期間	2月							3月																												
	22	23	24	25	26	27	28	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27		
	開催前							パラリンピック(3/4~13)開催中										開催後																		
件数	1		2	3		1	10	10	22	64	74	26	17	31	14	27	8	7	8	10	34	11	5				3	2	1		2				1	

## 第3章

# パラリンピアンに対する社会的認知度調査



## 調査概要

### (1)調査目的

北京 2022 パラリンピック大会の開催に合わせ、パラリンピアンに対する社会的認知度を測定する。

### (2)調査内容

主な調査内容は以下の通りである。

- ・北京 2022 パラリンピック日本代表選手認知度
- ・北京パラリンピックの観戦形態
- ・北京パラリンピック観戦後の感想

### (3)調査対象

全国の市町村に在住する 20 歳以上の男女

### (4)調査期間

2022 年 5 月 27 日(金)～2022 年 5 月 31 日(火)

### (5)調査方法

インターネットによるウェブ調査  
当財団調べ(マクロミルモニタを利用)

### (6)回答結果

回答者数:2,060 人

東日本エリア/男性/20代	103	西日本エリア/男性/20代	103
東日本エリア/男性/30代	103	西日本エリア/男性/30代	103
東日本エリア/男性/40代	103	西日本エリア/男性/40代	103
東日本エリア/男性/50代	103	西日本エリア/男性/50代	103
東日本エリア/男性/60代以上	103	西日本エリア/男性/60代以上	103
東日本エリア/女性/20代	103	西日本エリア/女性/20代	103
東日本エリア/女性/30代	103	西日本エリア/女性/30代	103
東日本エリア/女性/40代	103	西日本エリア/女性/40代	103
東日本エリア/女性/50代	103	西日本エリア/女性/50代	103
東日本エリア/女性/60代以上	103	西日本エリア/女性/60代以上	103

(7) 調査報告並びにトピック内に示した図表の注意事項

- ・ 帯グラフにおいて 3%未満のデータラベルは非表示とした。
- ・ クロス集計においては、原則  $\chi^2$  検定分析による有意差検定で処理して、有意水準 1% を▲▼、5%を△▽、10%を∴∴で表示するとともに、有意差が認められない場合には非表示とした。

## 要約

- ◆ 最も認知度が高い選手は「村岡桃佳」(11.6%)で、ついで、「岡本圭司」(5.6%)、「小栗大地」(4.5%)、「川除大輝」(4.2%)、「新田佳浩」(4.1%)、「高橋幸平」(4.1%)であった。
- ◆ 実施競技の正答率が最も高かったのは「村岡桃佳(アルペンスキー)」(46.9%)で、ついで、「川除大輝(クロスカントリー)」(27.2%)、「新田佳浩(クロスカントリー)」(24.4%)、「森井大輝(アルペンスキー)」(22.1%)、「岡本圭司(スノーボード)」(21.1%)であった。
- ◆ 北京パラリンピックの観戦形態は、「テレビのニュース番組で観た」が42.9%で最も多く、ついで、「テレビで中継番組を観た」(31.3%)、「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」(7.7%)であった。観戦した競技は、「開会式」(39.3%)が最も多く、ついで、「アルペンスキー」(29.4%)、「スノーボード」(28.7%)、「閉会式」(22.9%)であった。
- ◆ 北京パラリンピックを観戦した感想は、「アスリートとして非常に優れていると感じた」が「よく当てはまる」「やや当てはまる」を合わせると約6割で最も多かった。ついで、「障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた」「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」が続き、いずれも5割を超えた。「2024年パリ・パラリンピックを直接観戦したい」は15.8%で、東京2020パラリンピック終了後の23.2%と比べると減少した。
- ◆ 日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景を見たことがあるかについて、「障害のある人がスポーツを行う光景を見ることある」は、2018年の平昌大会終了後の9.4%から、2022年の北京大会終了後に7.9%と減少した。

## 調査報告

## 1. パラリンピアン認知度

北京パラリンピックに出場したパラリンピアン 29 名を対象に認知度をたずねた。最も認知度の高い選手は、「村岡桃佳」であり、「知っている」「聞いたことがある」を合わせると、11.6%であった(図表 3-1)。ついで、「岡本圭司」5.6%(知っている:1.3%、聞いたことがある:4.3%)、「小栗大地」4.5%(知っている:1.0%、聞いたことがある:3.5%)、「川除大輝」4.2%(知っている:1.4%、聞いたことがある:2.8%)、「新田佳浩」4.1%(知っている:1.3%、聞いたことがある:2.8%)だった。前述の「知っている」「聞いたことがある」と回答した人を対象に実施競技についてたずねたところ、正答率が最も高かったのは「村岡桃佳(アルペンスキー)」の 46.9%だった。

図表 3-1 パラリンピアン認知度と正答率(上位 10 位)

NO	氏名	全体(N)	認知している (知っている+聞いたことがある)			知らない	競技名	正答率
			知っている	聞いたことがある				
1	村岡 桃佳	2201	11.6	4.5	7.1	88.4	アルペンスキー	46.9
2	岡本 圭司	2201	5.6	1.3	4.3	94.4	スノーボード	21.1
3	小栗 大地	2201	4.5	1.0	3.5	95.5	スノーボード	11.0
4	川除 大輝	2201	4.2	1.4	2.8	95.8	クロスカントリー	27.2
5	新田 佳浩	2201	4.1	1.3	2.8	95.9	クロスカントリー	24.4
5	高橋 幸平	2201	4.1	1.0	3.1	95.9	アルペンスキー	9.9
7	森井 大輝	2201	3.9	1.4	2.5	96.1	アルペンスキー	22.1
7	森 宏明	2201	3.9	1.1	2.8	96.1	クロスカントリー	12.8
9	藤原 哲	2201	3.9	0.9	3.0	96.1	アルペンスキー	9.4
10	佐藤 圭一	2201	3.7	1.1	2.6	96.3	クロスカントリー/バイアスロン	17.1
10	田中 佳子	2201	3.7	1.0	2.6	96.3	アルペンスキー	17.3

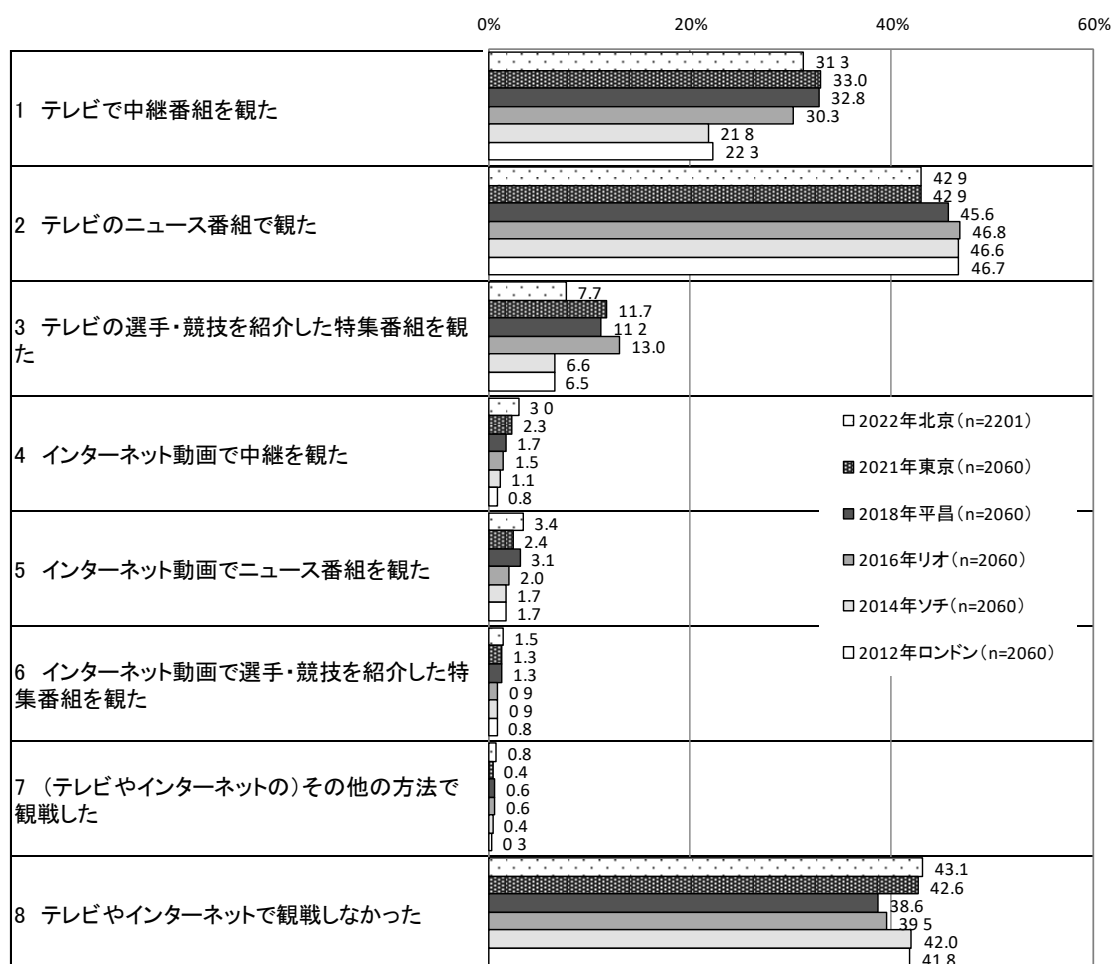
※正答率:クロスカントリー/バイアスロン両方に出場した選手の場合、いずれかを選択していたら正解とみなして集計した

## 2. パラリンピックの観戦

### 2.1 パラリンピックの観戦形態

北京パラリンピックの観戦形態についてみると、「テレビのニュース番組で観た」が42.9%と最も多く、ついで「テレビで中継番組を観た」(31.3%)であった(図表 3-2)。観戦形態をたずねたこれまでの調査(夏季大会、冬季大会)と比べて、「テレビで中継番組を観た」「テレビのニュース番組で観た」がほとんど変わらなかった。「テレビやインターネットで観戦しなかった」も、ほとんど変化がみられなかった。

図表 3-2 過去 6 大会のパラリンピック観戦形態(複数回答)

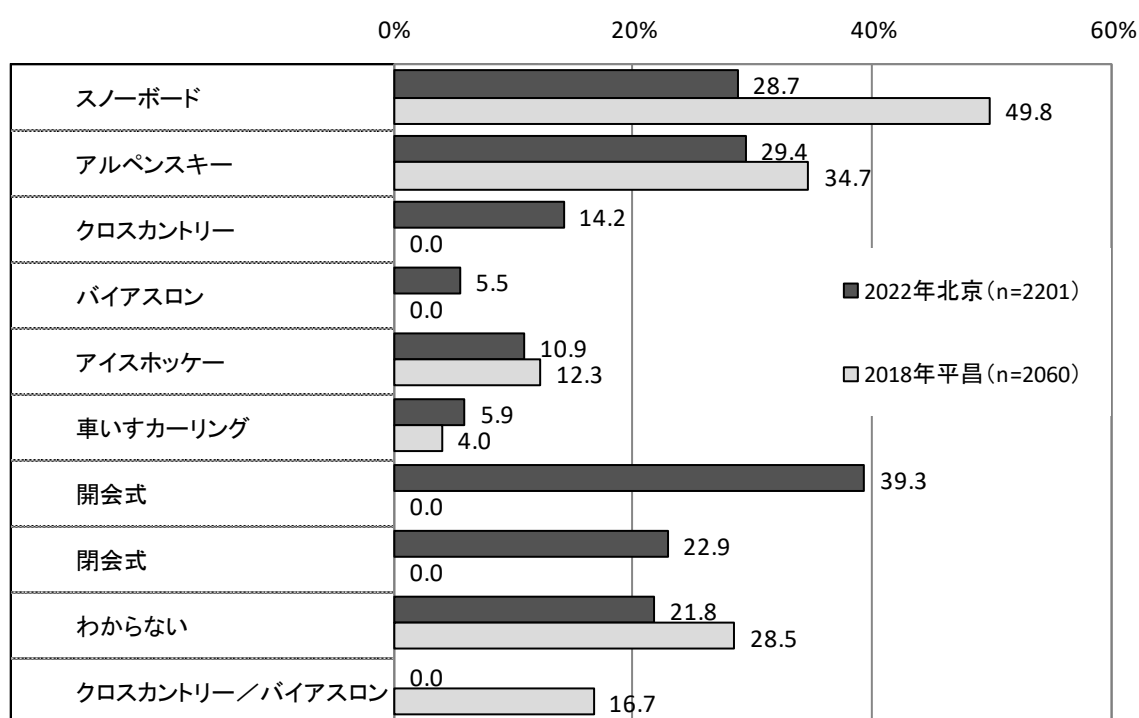


※2012年大会は、2014年度に調査を実施したため、調査条件が異なる。

## 2.2 観戦種目

テレビやインターネットで北京パラリンピック大会を観戦した人のうち、観戦競技についてたずねたところ、「開会式」が39.3%で最も多く、ついで「アルペンスキー」(29.4%)、「スノーボード」(28.7%)、「閉会式」(22.9%)であった(図表3-3)。平昌パラリンピック大会と比べると、「スノーボード」は49.8%(平昌)→28.7%(北京)、「アルペンスキー」は34.7%(平昌)→29.4%(北京)と減少した。

図表3-3 北京パラリンピックの観戦競技(複数回答)



※「開会式」、「閉会式」は2018年度調査では回答選択肢なし

※「クロスカントリー／バイアスロン」は2018年度調査では同一選択肢とし、2022年度調査ではそれぞれとしている。

### 2.3 北京パラリンピック大会観戦後の感想

テレビやインターネットで北京パラリンピック大会を観戦した人のうち、観戦した感想についてたずねたところ、最も多かったのが「アスリートとして非常に優れていると感じた」であった（図表 3-4、図表 3-5）。「よく当てはまる」（25.7%）と「やや当てはまる」（35.4%）を合わせると約 6 割であった。ついで、「障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた」の 55.6%（よく当てはまる：16.0%、やや当てはまる：39.7%）、「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」の 55.2%（よく当てはまる：13.4%、やや当てはまる：41.8%）であった。

これまでの調査との比較では、東京大会観戦後の感想と北京大会観戦後の感想を比べると、すべての項目において、東京大会から減少していた。さらに、同じ冬季大会の比較で、平昌大会観戦後の感想と北京大会観戦後の感想を比べると、すべての項目において平昌大会から減少していた。



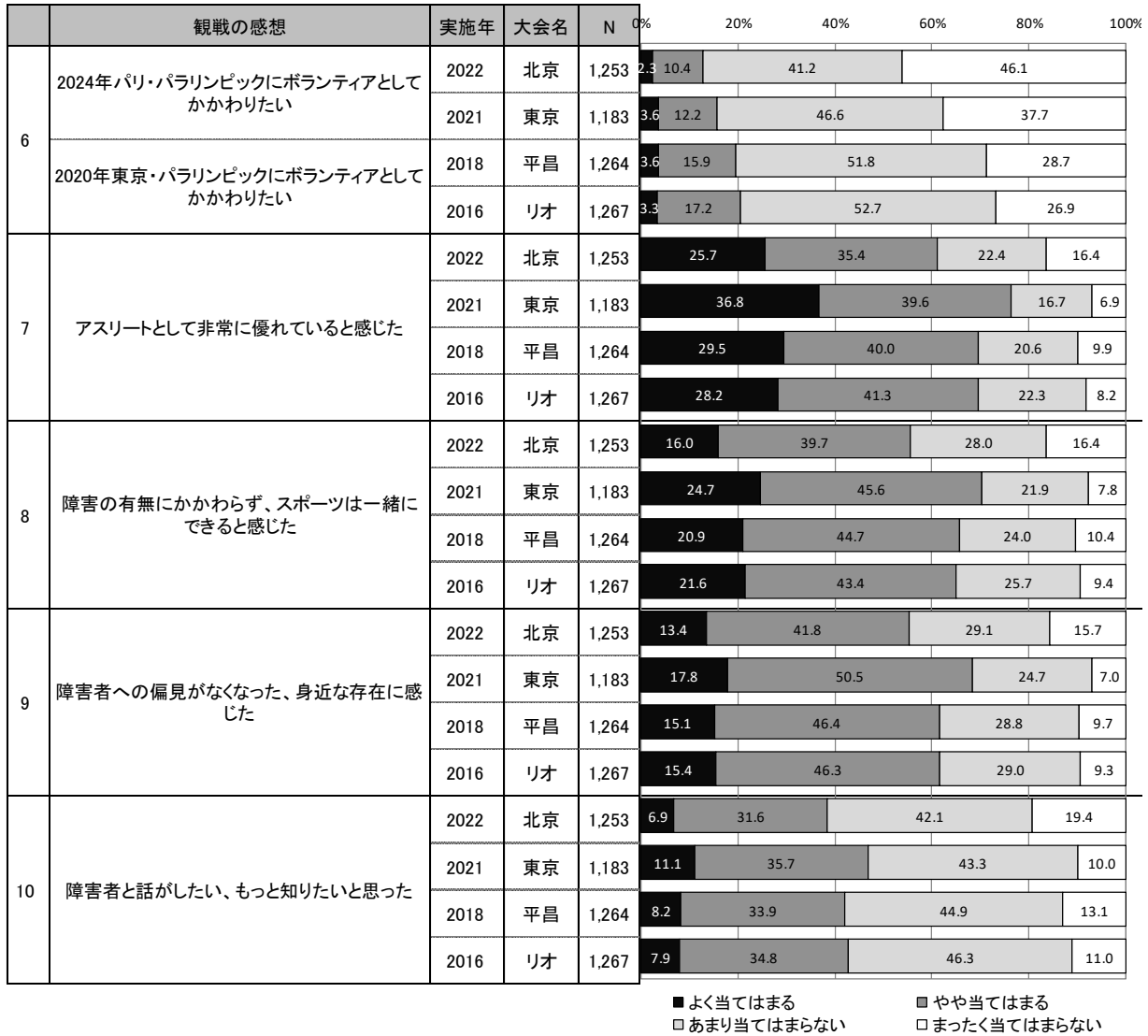
図表 3-4 北京パラリンピック大会観戦後の感想 1/2

	観戦の感想	実施年	大会名	N	%			
					0%	20%	40%	60%
1	障害者スポーツをテレビやインターネットで観戦したい	2022	北京	1,253	6.4	33.5	40.5	19.6
		2021	東京	1,183	11.8	42.5	36.4	9.2
		2018	平昌	1,264	6.7	37.4	43.3	12.6
		2016	リオ	1,267	5.9	37.1	44.4	12.6
2	障害者スポーツを直接観戦したい	2022	北京	1,253	3.6	20.0	48.1	28.3
		2021	東京	1,183	7.7	26.6	47.4	18.3
		2018	平昌	1,264	4.6	21.4	53.8	20.3
		2016	リオ	1,267	3.8	22.5	55.2	18.5
3	2024年パリ・パラリンピックを直接観戦したい	2022	北京	1,253	3.3	12.5	45.2	39.1
	2021	東京	1,183	5.7	17.5	48.0	28.8	
	2018	平昌	1,264	9.3	25.9	44.9	19.9	
	2020年東京・パラリンピックを直接観戦したい	2016	リオ	1,267	9.1	26.1	46.6	18.1
4	障害者スポーツを体験したい	2022	北京	1,253	3.1	16.0	46.4	34.5
		2021	東京	1,183	5.7	22.2	48.6	23.5
		2018	平昌	1,264	3.3	18.1	53.4	25.2
		2016	リオ	1,267	4.3	16.8	54.1	24.8
5	障害者スポーツのボランティアをしたい	2022	北京	1,253	2.6	18.9	46.2	32.3
		2021	東京	1,183	4.7	21.6	50.2	23.5
		2018	平昌	1,264	3.9	19.3	53.2	23.6
		2016	リオ	1,267	3.9	17.1	56.8	22.2

■よく当てはまる                      ■やや当てはまる  
 □あまり当てはまらない              □まったく当てはまらない

選手の認知度

図表 3-5 北京パラリンピック大会観戦後の感想 2/2

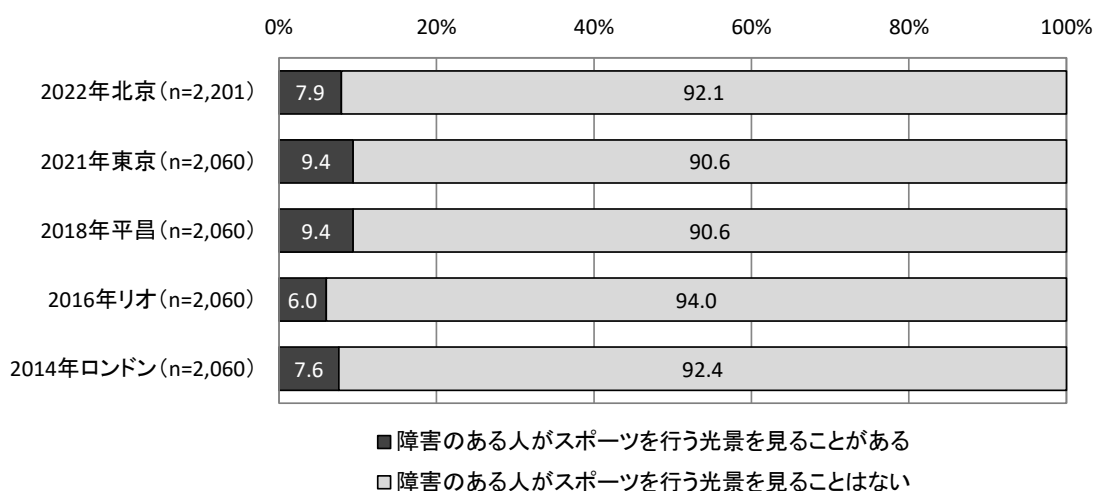


### 3. 障害者スポーツとの接点

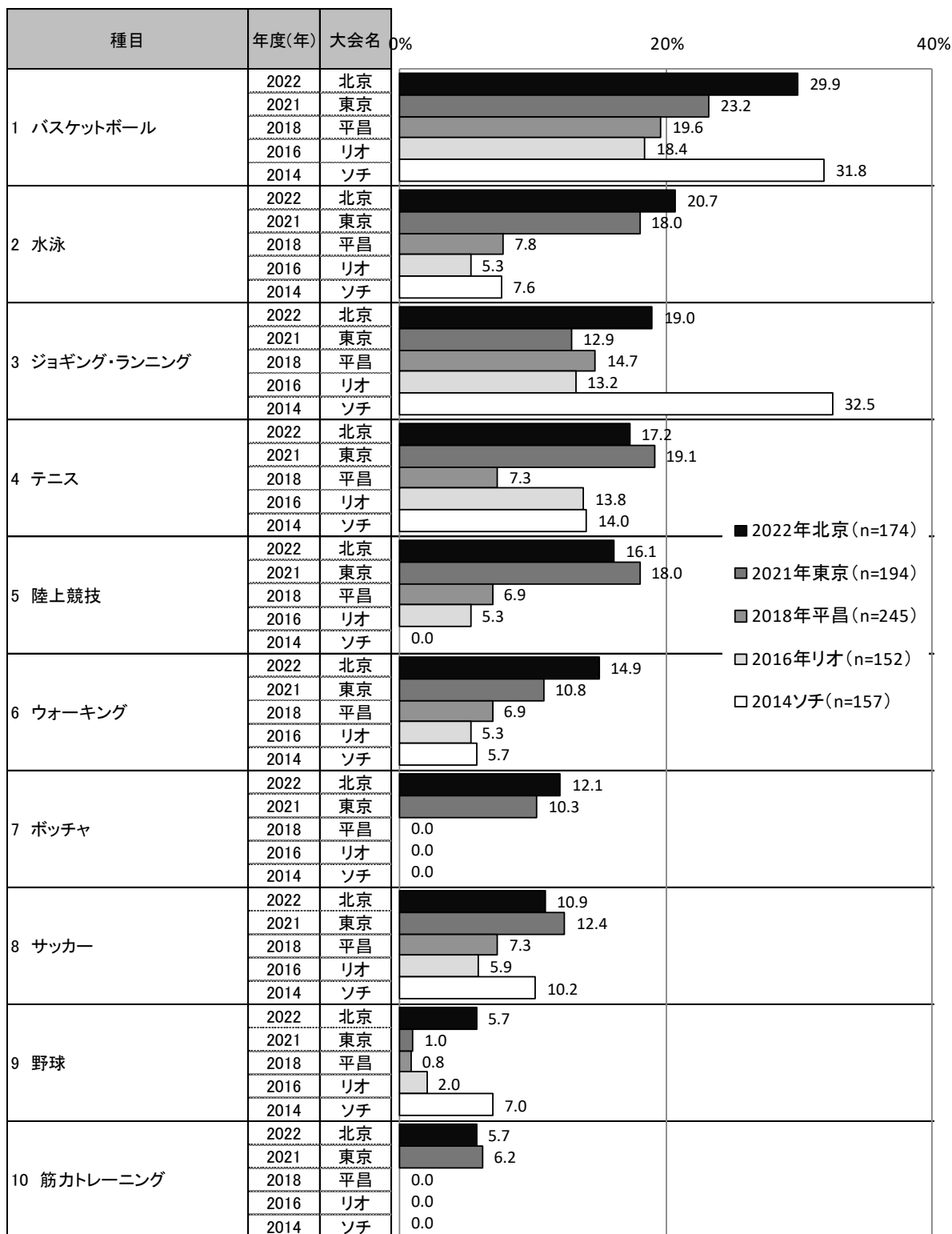
#### 3.1 障害のある人がスポーツを行う光景・種目

日常生活の中で人々がスポーツを行う光景を見ることがあるかについてたずねたところ、「障害のある人がスポーツを行う光景を見ることがある」は、2021年度調査の9.4%から7.9%に減少した(図表3-6)。見たスポーツの種目は、「バスケットボール」が最も多く、ついで、「水泳」「ジョギング・ランニング」「テニス」「陸上競技」であった(図表3-7)。

図表 3-6 障害のある人がスポーツを行う光景



図表 3-7 障害のある人がスポーツを行う光景で見る種目一覧(複数回答)



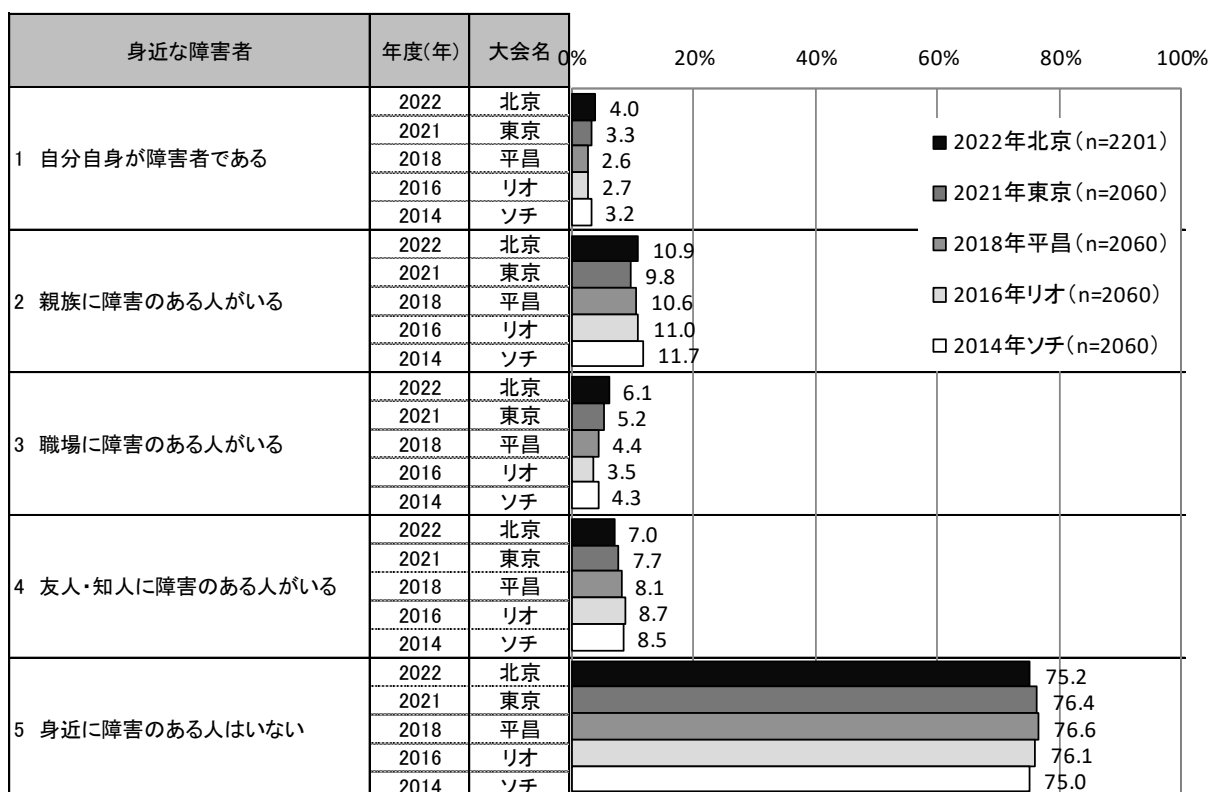
※2022年の選択肢の降順(上位10種目を掲載)

※選択肢「筋力トレーニング」「ボッチャ」は2018年～

### 3.2 身近にいる障害のある人

身近にいる障害のある人についてたずねたところ、「身近に障害のある人はいない」が75.2%で最も多く、ついで、「親族に障害のある人がいる」(10.9%)、「友人・知人に障害のある人がいる」(7.0%)であった。「自分自身が障害者である」は4.0%であった(図表3-8)。

図表 3-8 身近にいる障害のある人の有無



選手の認知度

#### 4. クロス集計

身近に障害のある人の有無別にパラリンピック観戦形態についてみると、「自分以外の身近な人に障害者がいる」では、「テレビで中継番組を観た」「テレビのニュース番組で観た」「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」「インターネット動画で中継を観た」「インターネット動画でニュース番組を観た」「インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た」「(テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した」が1%水準で有意に高かった(図表 3-9)。一方で、「身近に障害のある人はいない」では、「テレビの中継番組を観た」「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」「インターネット動画で中継を観た」「インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た」「(テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した」が1%水準で有意に低かった。「テレビやインターネットで観戦しなかった」非実施層は、「身近に障害のある人はいない」が1%水準で有意に高かった。

図表 3-9 身近に障害のある人の有無別にみるパラリンピック観戦形態

		全体	テレビで中継番組を観た	テレビのニュース番組で観た	テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た	インターネット動画で中継を観た	インターネット動画でニュース番組を観た	インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た	(テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した	テレビやインターネットで観戦しなかった
全体		2,201	31.3	42.9	7.7	3.0	3.4	1.5	0.8	43.1
あなたの身近に障害のある人がいますか。	自分自身が障害者である	87	33.3	41.4	11.5	△6.9	3.4	△4.6	2.3	44.8
	自分以外の身近な人に障害者がいる	487	▲36.8	▲48.5	▲11.9	▲5.5	▲5.7	▲3.5	▲2.3	▼32.4
	身近に障害のある人はいない	1,655	▼29.7	▽41.5	▼6.5	▼2.3	▽2.8	▼0.9	▼0.4	▲46.0

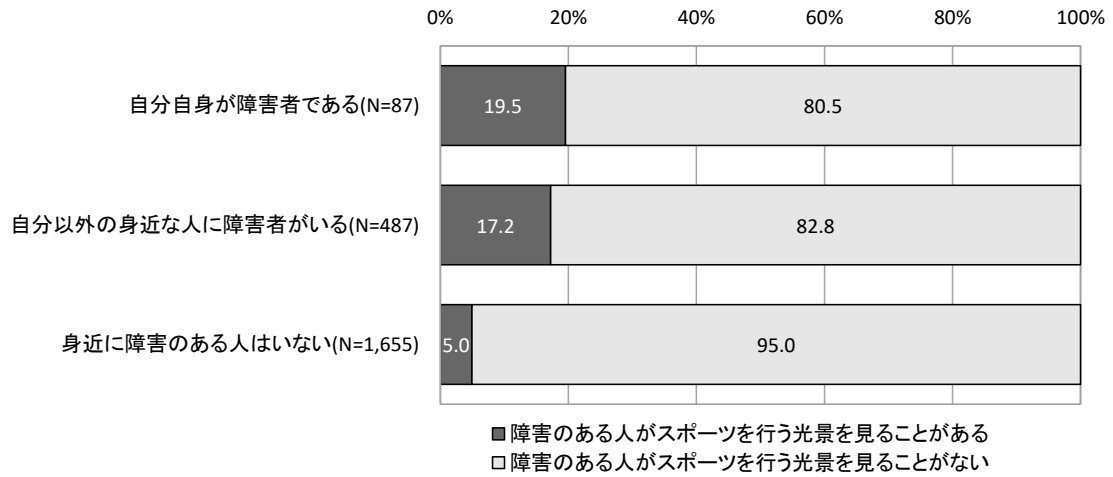
身近に障害のある人の有無別にパラリンピック観戦を感想別にみた。「自分以外の身近な人に障害者がいる」では、「障害者スポーツをテレビやインターネットで観戦したい」「障害者スポーツを体験したい」「障害者スポーツのボランティアをしたい」「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」「障害者と話がしたい、もっと知りたいと思った」が「よく当てはまる」において1%水準で有意に高かった(図表 3-10)。一方で、「身近に障害のある人はいない」では、「障害者スポーツをテレビやインターネットで観戦したい」「障害者スポーツを体験したい」「障害者スポーツのボランティアをしたい」「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」「障害者と話がしたい、もっと知りたいと思った」が「よく当てはまる」において1%水準で有意に低かった。

図表 3-10 身近に障害のある人の有無別にみる観戦後の感想

		全体	よく当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: auto;">                     【全体との差の検定】                      有意水準 高 低                      1% ▲ ▼                      5% △ ▽                      10% ∴ ∵                 </div>				
障害者スポーツをテレビやインターネットで観戦したい	全体	1,253	6.4	33.5	40.5	19.6
	自分自身が障害者である	48	10.4	35.4	41.7	12.5
	自分以外の身近な人に障害者がいる	329	▲10.3	△39.5	▽35.3	▽14.9
	身近に障害のある人はいない	894	▼4.9	▽31.5	∴42.2	△21.4
障害者スポーツを直接観戦したい	全体	1,253	3.6	20.0	48.1	28.3
	自分自身が障害者である	48	△10.4	22.9	41.7	25.0
	自分以外の身近な人に障害者がいる	329	4.0	▲28.0	47.1	▼21.0
	身近に障害のある人はいない	894	3.1	▼17.3	48.5	▲31.0
2026年 ミラノ・コルティナダンベツツォ・パラリンピックを直接観戦したい	全体	1,253	3.3	12.5	45.2	39.1
	自分自身が障害者である	48	△10.4	▲27.1	35.4	27.1
	自分以外の身近な人に障害者がいる	329	4.9	△16.4	43.2	35.6
	身近に障害のある人はいない	894	▽2.6	▼10.6	46.1	∴40.7
障害者スポーツを体験したい	全体	1,253	3.1	16.0	46.4	34.5
	自分自身が障害者である	48	▲12.5	25.0	▽29.2	33.3
	自分以外の身近な人に障害者がいる	329	▲6.1	▲21.0	45.6	▼27.4
	身近に障害のある人はいない	894	▼1.9	▼13.8	47.3	▲37.0
障害者スポーツのボランティアをしたい	全体	1,253	2.6	18.9	46.2	32.3
	自分自身が障害者である	48	△8.3	27.1	▽31.3	33.3
	自分以外の身近な人に障害者がいる	329	▲4.9	▲24.9	44.4	▼25.8
	身近に障害のある人はいない	894	▼1.6	▼16.4	47.3	▲34.7
2026年 ミラノ・コルティナダンベツツォ・パラリンピックにボランティアとしてかかわりたい	全体	1,253	2.3	10.4	41.2	46.1
	自分自身が障害者である	48	△8.3	16.7	35.4	39.6
	自分以外の身近な人に障害者がいる	329	∴4.0	△13.7	41.0	∴41.3
	身近に障害のある人はいない	894	▽1.7	▽8.9	41.3	△48.1
アスリートとして非常に優れていると感じた	全体	1,253	25.7	35.4	22.4	16.4
	自分自身が障害者である	48	22.9	41.7	20.8	14.6
	自分以外の身近な人に障害者がいる	329	∴29.8	36.5	21.3	▽12.5
	身近に障害のある人はいない	894	∴24.3	35.0	22.8	△17.9
障害の有無にかかわらず、スポーツと一緒にできると感じた	全体	1,253	16.0	39.7	28.0	16.4
	自分自身が障害者である	48	16.7	43.8	27.1	12.5
	自分以外の身近な人に障害者がいる	329	∴19.1	△45.6	▽22.8	▽12.5
	身近に障害のある人はいない	894	15.0	▽37.5	△29.8	△17.8
障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた	全体	1,253	13.4	41.8	29.1	15.7
	自分自身が障害者である	48	∴22.9	37.5	25.0	14.6
	自分以外の身近な人に障害者がいる	329	▲18.8	45.6	▼23.1	∴12.5
	身近に障害のある人はいない	894	▼11.3	40.6	▲31.3	16.8
障害者と話がしたい、もっと知りたいと思った	全体	1,253	6.9	31.6	42.1	19.4
	自分自身が障害者である	48	△16.7	37.5	▽25.0	20.8
	自分以外の身近な人に障害者がいる	329	▲11.2	▲38.6	▽36.5	▼13.7
	身近に障害のある人はいない	894	▼5.1	▼29.1	△44.4	▲21.4

身近に障害のある人の有無別に、障害のある人がスポーツを行う光景を見ることの有無についてたずねたところ、「障害のある人がスポーツを行う光景を見ることがある」では、「身近に障害のある人はいない」(5.0%)が、「自分自身が障害者である」(19.5%)の約4分の1、「自分以外の身近な人に障害者がいる」(17.2%)の約3分の1だった(図表 3-11)。

図表 3-11 身近にいる障害のある人の有無別にみる  
障害のある人がスポーツを行う光景を見ることの有無





日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景を見ることの有無についてみると、日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景を見たことがある人の方が、「テレビで中継番組を観た」「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」「インターネット動画で中継を観た」「インターネット動画でニュース番組を観た」「インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た」において、1%水準で有意に高かった(図表 3-12)。

図表 3-12 日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景を見ることの有無別にみる  
北京パラリンピック大会の観戦形態

		全体	テレビで中継番組を観た	テレビのニュース番組で観た	テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た	インターネット動画で中継を観た	インターネット動画でニュース番組を観た	インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た	(テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した	テレビやインターネットで観戦しなかった
		(%)								
全体		2,201	31.3	42.9	7.7	3.0	3.4	1.5	0.8	43.1
あなたは日常生活の中で、障害のある人がスポーツを行う光景をみるがありますか。	ある	174	▲50.0	46.6	▲13.8	▲13.8	▲10.3	▲6.3	△2.9	▼24.1
	ない	2,027	▼29.6	42.6	▼7.2	▼2.0	▼2.8	▼1.0	▼0.6	▲44.7

【全体との差の検定】  
有意水準 高 低  
1% ▲ ▼  
5% △ ▽  
10% ☆ ☆

## 5.まとめと考察

本調査の回答対象とした北京パラリンピックに出場した 29 名のパラリンピアンのうち、最も認知度の高い選手は「村岡桃佳」で、「知っている」「聞いたことがある」を合わせた認知度は 11.6% だった。第 2 位は「岡本圭司」で、「知っている」「聞いたことがある」を合わせた認知度は 5.6% だった。2018 年度調査の第 1 位は「成田緑夢」で、「知っている」「聞いたことがある」を合わせた認知度は 50.9% と、回答者の過半数が成田選手を認知していた。

2018 年度調査の第 2 位は、「村岡桃佳」で「知っている」「聞いたことがある」を合わせた認知度は 9.6% だった。村岡選手の認知度は、平昌大会から 2 ポイント増加したことになる。

北京大会の認知度上位 10 名のうち、平昌大会にも出場した選手は 4 名いたが、村岡選手以外の 3 名はいずれも認知度が平昌大会から減少する結果であった。本調査は、北京大会終了後、2 か月後に実施された。北京大会も東京大会同様、コロナ禍での開催となったため、大会で活躍した選手がメディアに登場する機会が減ったこと、ロシアによるウクライナ侵攻が北京大会の開催期間中も行われていたことから、国民の意識も北京大会終了後の“余韻”に浸ることなく、すぐにロシア・ウクライナ問題を目にする機会が増えたことが原因だと推察できる。

過去 6 大会のパラリンピックの観戦状況についてみると、「テレビやインターネットで観戦しなかった」非観戦層は、約 4 割と、これまでと大きな変化はみられなかった。非観戦層は、時差のない国内開催であり、メディアが多くの放送時間を費やして機運醸成につとめた東京大会でも変わることはなかった。さらに、ロシア・ウクライナ問題があった北京大会でも非観戦層が増加することもなかった。もともとパラリンピックに興味がない層と言い換えることもできるが、非観戦層の分析は今後の課題の一つと言えるだろう。一方で、北京大会を東京大会と比較すると、テレビで中継や特集番組を観た人が減った半面、インターネットで中継や特集番組を観た人が増加した。インターネット視聴は、パラリンピック観戦に限らず、社会的な観戦形態の変化と言えるが、パラリンピックにもその影響が出始めた大会と言えるかもしれない。

パラリンピック観戦後の感想については過去 4 大会でたずねている。ほとんどの設問において、リオ大会、平昌大会では同様の結果を示し、東京大会で増加、北京大会で平昌大会と同様の結果に戻った。この結果から、東京大会が国民に与えたインパクトの大きさを測り知ることができるのと同時に、東京大会で感じた思いが翌年の北京大会まで継続できていないことも示された。

身近な環境に障害者がいることが自身の行動、本調査においては、パラリンピックの観戦状況やパラリンピック観戦後の感想に影響を与えていることが、過去の調査同様、再確認できた。

(小淵和也)



## 第4章

### テレビコマーシャルによる

### 障害者スポーツ情報発信環境調査

## ①障害者スポーツ関連のテレビコマーシャル実態調査

## 調査概要

### (1)調査名

障害者スポーツ関連のテレビコマーシャル実態調査

### (2)調査目的

障害者スポーツ関連のテレビコマーシャルの実態(放送年、競技、出演者など)を把握し、社会のムーブメント形成の背景を探る。

### (3)データ抽出内容／データ抽出条件

継続的に保存されている関東キー局のテレビコマーシャル放送実績データベースより、障害者スポーツ、障害者スポーツ競技が画面上に表出しているテレビコマーシャルをテキスト検索にて抽出(データ提供者 ニホンモニター株式会社)

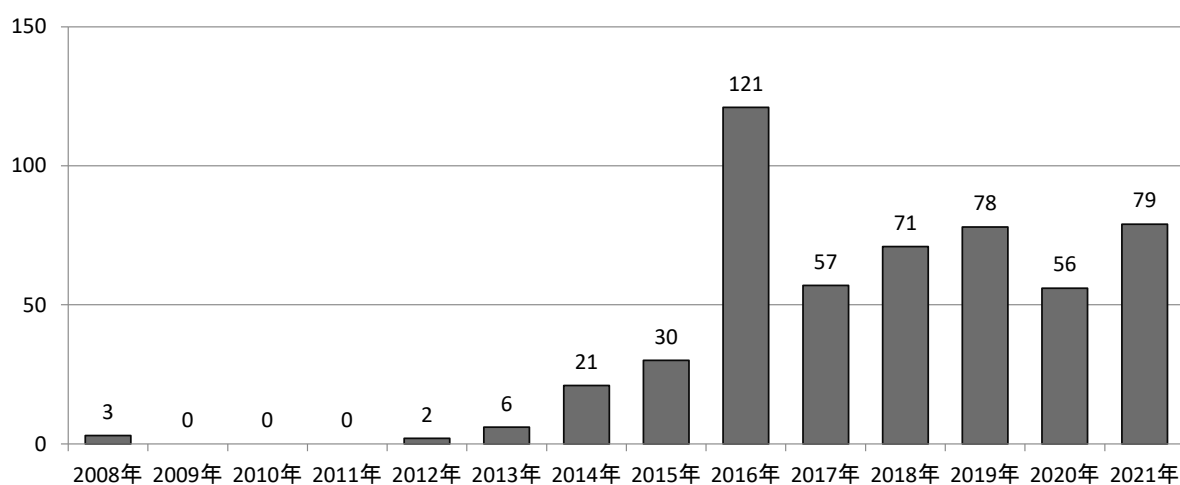
### (4)データ抽出期間

2008年1月1日～2021年12月31日

## 1.年別にみる障害者スポーツ関連のコマーシャル本数の変遷

障害者スポーツ関連のテレビコマーシャル本数を年別にみると、北京 2008 大会が開催された 2008 年は 3 本、ロンドン 2012 大会が開催された 2012 年は 2 本であった(図表 4-1)。東京 2020 大会の開催が決定した 2013 年以降、徐々に本数は増え、2014 年に 20 本、2015 年に 30 本、2016 年には 120 本を越えた。2017 年以降は 50~80 本で推移した。

図表 4-1 年別にみる障害者スポーツ関連のテレビコマーシャル本数  
(2008 年~2021 年)

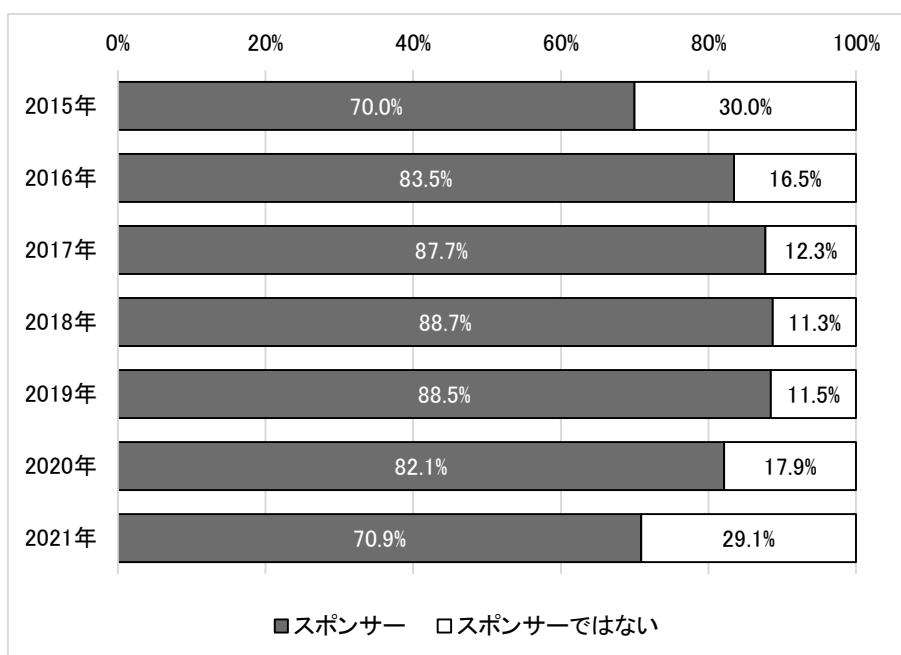


(注)2008~2017 年は、前回調査(2017 年度)のデータをもとに、本調査ではパラリンピック関連ロゴが掲載されている CM を追加した

## 2. スポンサー別にみる障害者スポーツ関連のコマーシャル本数の変遷

2015年1月から東京2020大会のスポンサー契約が開始以降の障害者スポーツ関連のテレビコマーシャル本数の割合を「東京2020スポンサーシッププログラム」企業(スポンサー)別にみると、2015年は70.0%、2016年～2020年では8割以上がスポンサー企業だった(図表4-2)。

図表4-2 スポンサー別にみる障害者スポーツ関連のテレビコマーシャル本数  
(2015年～2021年)

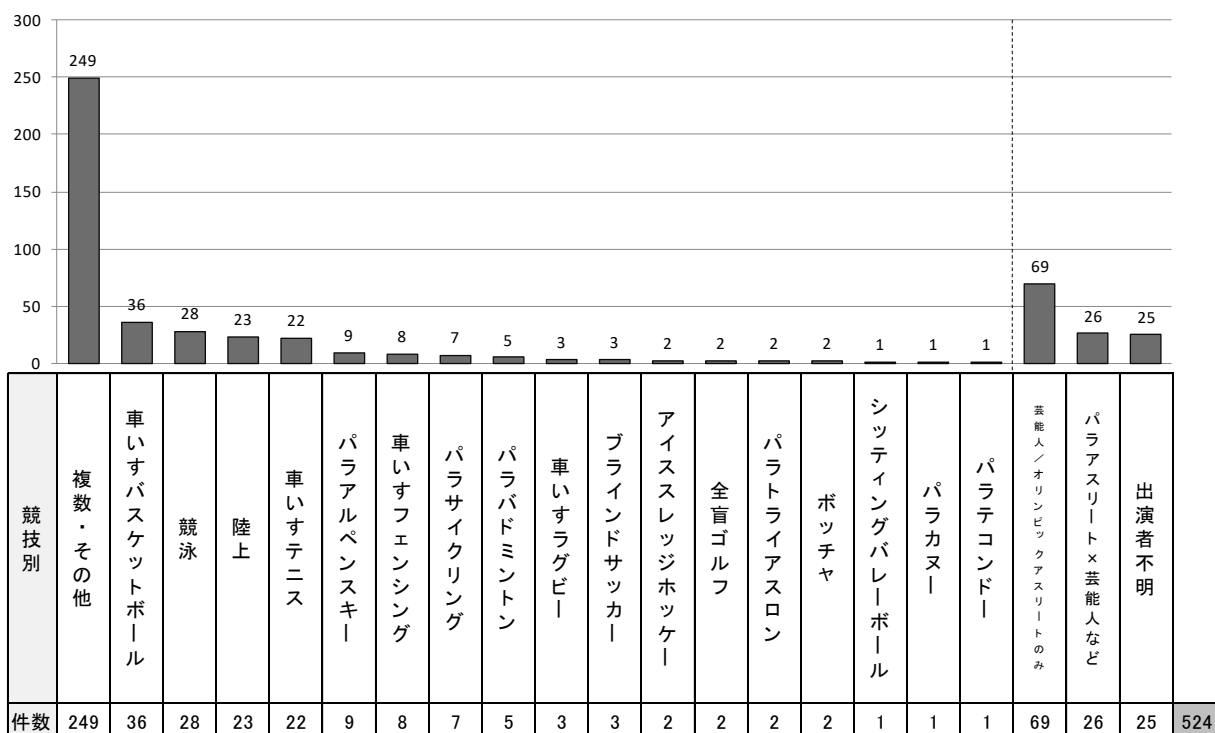




### 3.競技別にみる障害者スポーツ関連のコマーシャル本数

テレビコマーシャルをタイトル、および出演者の実施競技をもとに競技別に分類した(図表4-3)。タイトル、出演者から競技が特定できなかったコマーシャルについては「複数・その他」として集計した。最も多かったのは「複数・その他」の249本で、ついで「車いすバスケットボール」(36本)、「競泳」(28本)、「陸上」(23本)、「車いすテニス」(22本)であった。

図表 4-3 競技別にみる障害者スポーツ関連のテレビコマーシャル本数(2008年～2021年)



## ②パラアスリート起用のテレビコマーシャル実態調査

## 調査概要

### (1) 調査名

パラアスリート起用のテレビコマーシャル実態調査

### (2) 調査目的

パラアスリートを起用したテレビコマーシャルの実態(選手、競技、広告主など)を把握し、社会のムーブメント形成の背景を探る。

### (3) データ抽出内容/データ抽出条件

テレビスポーツデータ年鑑 2008～2021(ニホンモニター株式会社発行)の掲載データより、アスリート名/競技名/広告主が明確なデータを抽出

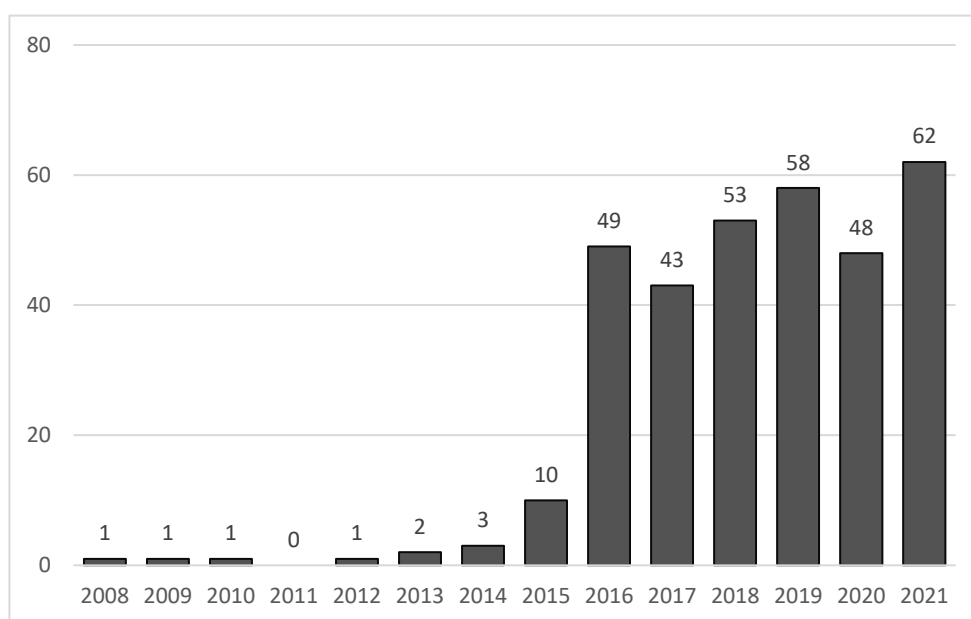
### (4) データ抽出期間

2008年1月1日～2021年12月31日

## 1.年別にみるパラアスリート起用のコマーシャル本数の変遷

2008年～2021年までに、パラアスリートを起用したテレビコマーシャル本数は332本だった。年別にみると、2008年、2012年は国枝慎吾選手(車いすテニス)、2009年、2010年は京谷和幸選手(車いすバスケットボール)だった。東京2020大会の開催が決定した2013年以降、徐々に本数は増え、2015年には10本、2016年以降は40本を超えて推移している(図表4-4)。

図表4-4 年別にみるパラアスリート起用のテレビコマーシャル本数(2008年～2021年)



## 2.パラアスリート別にみるコマーシャル本数の変遷

2015年1月から東京2020大会のスポンサー契約が開始以降のパラアスリート起用のテレビコマーシャル本数をパラアスリート別にみると、1位は「国枝慎吾」(21本)、2位は「上地結衣」(15本)、3位は「池崎大輔」(12本)だった(図表4-5)。

図表 4-5 パラアスリート別にみるテレビコマーシャル本数(2015年～2021年)

NO	選手名	競技	総数 (2015年～2021年)
1	国枝 慎吾	車いすテニス	21
2	上地 結衣	車いすテニス	15
3	池崎 大輔	車いすラグビー	12
4	高桑 早生	パラ陸上競技	10
5	池 透暢	車いすラグビー	9
	豊田 まみ子	パラバドミントン	9
7	佐藤 圭太	パラ陸上競技	8
	山田 拓朗	パラ水泳	8
9	今井 友明	車いすラグビー	7
	秦 由加子	パラトライアスロン	7
	大西 瞳	パラ陸上競技	7
	中西 麻耶	パラ陸上競技	7
	木村 敬一	パラ水泳	7
14	鈴木 徹	パラ陸上競技	6
15	村上 清加	パラ陸上競技	5
	ベアトリーチェ・ヴィオ	パラフェンシング	5
	一ノ瀬 メイ	パラ水泳	5
	山本 篤	パラ陸上競技	5
	瀬立 モニカ	パラカヌー	5
	川原 凜	車いすバスケットボール	5
	谷 真海	パラトライアスロン	5

### 3.まとめと考察

障害者スポーツ関連のテレビコマーシャル、パラアスリート起用のテレビコマーシャルと2つの調査を実施したが、いずれの調査結果からも2016年からテレビコマーシャル本数が急増したことが明らかとなった。東京大会の開催が決定した2013年以降、2014年に東京2020組織委員会が発足、2015年に「東京2020スポンサーシッププログラム」の募集が開始され、東京大会に向けた開催準備が本格的に進み始めた。2016年のリオデジャネイロ大会の開催時期も重なり、2016年以降のテレビコマーシャル本数の急増につながった。障害者スポーツ関連のテレビコマーシャルが、2016年には121本と初めて100本を超え、前年比4倍増となった。2017年以降は50本以上で推移し、東京大会が開催される2020年に向けて徐々に本数が増えるはずであった。2020年に新型コロナウイルス感染症が拡大し、東京大会は1年延期され、コロナ禍による自粛ムードも相まって、2020年の本数は2016年から半減する結果になった。1年延長となった東京大会の開催年である2021年には79本と多少は持ち直したが、2016年の121本と比べると決して多いとは言えない。

パラアスリート起用のテレビコマーシャル本数も同様で、2016年に49本と前年比約5倍増となり、徐々に本数が増えるはずであったが、2020年には一時減少した。いずれの調査結果からも、コロナ禍がテレビコマーシャルにも影響したことがうかがえる。

競技別にみると、「複数・その他」が最も多かった。「複数・その他」には、複数競技のテレビコマーシャルに加えて、東京パラリンピックをきっかけとした共生社会実現に向けた啓蒙的なコマーシャルや出演者名が特定できないコマーシャルなどが含まれる。2015年9月には、国連サミットで加盟国の全会一致で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標として、持続可能な開発目標(SDGs:Sustainable Development Goals)に対して、日本でも積極的に取り組み始めた。その世界的潮流に、東京大会の基本コンセプトとして掲げられた「多様性と調和」が合致して、啓蒙のコマーシャルが増えたとも考えられる。

(小淵和也)

## 【コラム】 プロアスリート・国枝慎吾選手が残した功績について考える

笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所

政策ディレクター 小淵和也

2023年1月22日、男子車いすテニスの国枝慎吾氏が現役引退を発表した。国枝氏は四大大会で通算50勝(男子シングルス28勝、男子ダブルス22勝)、パラリンピックはアテネ2004大会から東京2020大会まで5大会連続出場、北京、ロンドン、東京の3大会で金メダルを獲得した、言わずと知れた世界的レジェンドである。

国枝氏の主な戦績を振り返ってみたい。2007年に男子シングルスでは史上初となる年間グランドスラム(全豪オープン、ジャパンオープン、ブリティッシュオープン、全米ウィールチェアの四大大会)を達成した。当時の四大大会は現在のグランドスラムと大会が異なっており、健常者と同じ現在のグランドスラム(全豪オープン、全仏オープン、ウィンブルドン選手権、全米オープン)になったのは2009年のルール改正時で、ウィンブルドン選手権にシングルスが追加されたのは2016年のことである。2022年、ウィンブルドン選手権を制覇したことにより、男子シングルス初の四大大会制覇の「キャリアグランドスラム」を達成、四大大会制覇にパラリンピック制覇が加わる「キャリアゴールデンスラム」の偉業も成し遂げた。全豪オープン優勝11回、全仏オープン優勝8回、ウィンブルドン選手権優勝1回、全米オープン優勝8回は前人未達の功績と言える。2023年3月、国枝氏への国民栄誉賞の授与が決定したことからも、これまでに歩んできたキャリアがパラスポーツ界だけに留まらず、日本国民に大きなインパクトを残してきたことの証と言えるだろう。

本稿では、国枝氏がわが国に与えた社会的インパクトの観点から概観する。ヤマハ発動機スポーツ振興財団(以下、YMFS)「パラリンピアンに対する社会的認知度調査」(2017)では、リオ2016パラリンピック大会(リオ2016大会)の終了後に、全国の20歳以上の男女約2,000人を対象に、リオ2016大会に出場したパラリンピアン認知度調査を実施した。第1位は国枝氏で、「知っている」(20.9%)、「聞いたことがある」(13.1%)を合わせた認知度は34.0%であった(図表4-6)。第2位の上地結衣選手の認知度が14.8%だったことを考えると国枝氏の認知度が一人だけ高いことがわかる。国枝氏の実施競技が「車いすテニス」であることを知っている「正答率」は79.2%で、国枝氏を認知している人の約8割は車いすテニスの選手であることを把握していた。YMFS「パラリンピアンに対する社会的認知度調査」(2022)では、東京2020パラリンピック大会(東京2020大会)終了後に全国の20

歳以上の男女約 2,000 人を対象に、東京 2020 大会に出場したパラリンピアンへの認知度調査を実施した。リオ 2016 大会同様、第 1 位は国枝氏、第 2 位は上地選手であった。国枝氏を「知っている」(31.3%)、「聞いたことがある」(13.9%)を合わせた認知度は 45.2%で、リオ 2016 大会の 34.0%から 11.2 ポイント増加した。国枝氏の実施競技が「車いすテニス」であることを知っている「正答率」は 81.7%でリオ 2016 大会の 79.2%から 2.5 ポイント増加した。国民の約 2 人に 1 人が「車いすテニスプレーヤー・国枝慎吾」を認知していた。2009 年からはプロアスリートとして活動を始め、パラスポーツ界の第 1 人者として、誰も歩んでこなかった道を切り開き、結果を残してきた実績は、日本国民の意識にも大きな影響を与えてきたことが推察できる。

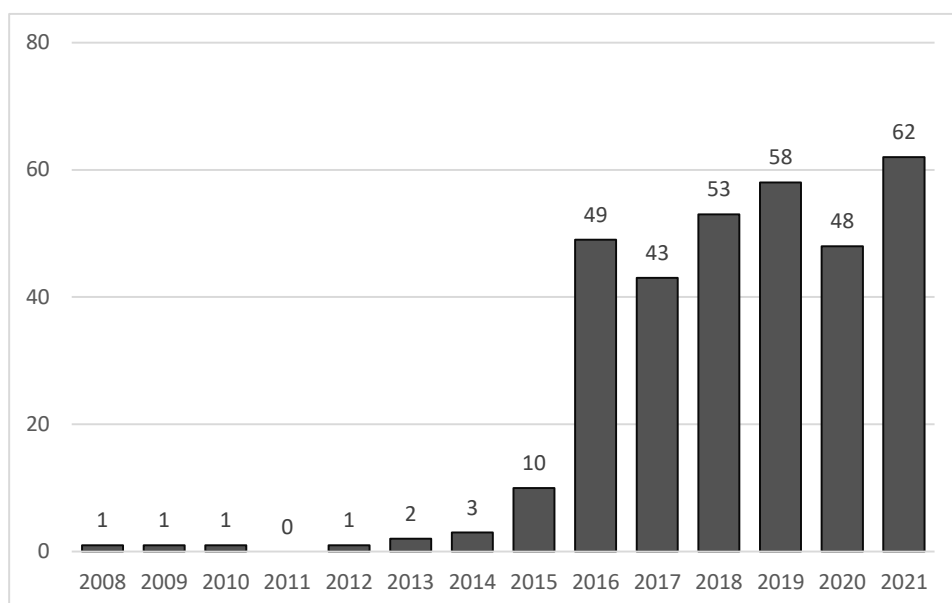
図表 4-6 パラリンピアンへの認知度と正答率:上位 5 位(リオ 2016 大会・東京 2020 大会)

リオ2016大会					東京2020大会				
順位	氏名	認知している (知っている+聞いたことがある)	競技名	正答率	順位	氏名	認知している (知っている+聞いたことがある)	競技名	正答率
1	国枝 慎吾	34.0%	車いすテニス	79.2%	1	国枝 慎吾	45.2%	車いすテニス	81.7%
2	上地 結衣	14.8%	車いすテニス	56.4%	2	上地 結衣	22.5%	車いすテニス	71.2%
3	成田 真由美	10.5%	水泳	60.8%	3	富田 宇宙	11.3%	水泳	36.8%
4	一ノ瀬 メイ	8.3%	水泳	32.4%	4	池崎 大輔	8.7%	車いすラグビー	28.3%
5	辻 沙絵	6.1%	陸上競技	40.8%	5	山本 篤	7.9%	陸上競技	37.7%

YMFS「パラアスリート起用のテレビコマーシャル(TVCM)」実態調査(2022)では、パラアスリートを起用した TVCM の実態を把握した(図表 4-7)。2008 年時にはパラアスリートが起用された TVCM は 1 件のみであったが、その 1 件が国枝氏の出演する TVCM であった。東京 2020 大会の開催が決定する 2013 年よりも 5 年も前の出来事である。



図表 4-7(再掲) パラアスリート起用関連の CM 件数(2008～2021)



2008 年は、国枝氏が 2007 年に車いすテニス男子シングルス史上初の年間グランドスラムを達成した翌年である。「共生社会」という言葉が今ほど出てこなかった時代である。メディアや国民、企業などがパラリンピックに注目する以前から、国枝氏が世界で結果を残し、著名なアスリートが起用されることの多い TVCM に唯一の障害者のアスリートとして出演してきたことがわかる。“障害者の代表”としてではなく、プロアスリートとしての結果が評価されメディアに登場していたと言える。

東京 2020 大会の大会スポンサーの契約が始まったのは 2015 年である。2016 年からはパラアスリートを起用した TVCM が急増し、現在もその傾向は続いている。2015 年～2021 年までのパラアスリートを起用した CM 数の首位も国枝氏(21 件)だった(図表 4-8)。2013 年に東京 2020 大会の開催が決定した以降も、東京 2020 大会の顔としての役割を各所から期待されていたことがうかがえる。

図表 4-8(再掲) パラアスリート別 CM 数 (2015~2021)上位 20 位

NO	選手名	競技	総数 (2015年~2021年)
1	国枝 慎吾	車いすテニス	21
2	上地 結衣	車いすテニス	15
3	池崎 大輔	車いすラグビー	12
4	高桑 早生	パラ陸上競技	10
5	池 透暢	車いすラグビー	9
	豊田 まみ子	パラバドミントン	9
7	佐藤 圭太	パラ陸上競技	8
	山田 拓朗	パラ水泳	8
9	今井 友明	車いすラグビー	7
	秦 由加子	パラトライアスロン	7
	大西 瞳	パラ陸上競技	7
	中西 麻耶	パラ陸上競技	7
	木村 敬一	パラ水泳	7
14	鈴木 徹	パラ陸上競技	6
15	村上 清加	パラ陸上競技	5
	ベアトリーチェ・ヴィオ	パラフェンシング	5
	一ノ瀬 メイ	パラ水泳	5
	山本 篤	パラ陸上競技	5
	瀬立 モニカ	パラカヌー	5
	川原 凜	車いすバスケットボール	5
	谷 真海	パラトライアスロン	5

世間が注目する以前から結果を出し続け、さらに世間の注目が高まった中、特に東京2020大会では日本選手団の主将を務め、地元開催のプレッシャーに打ち勝っての金メダル獲得は、後世に語り継がれる前人未到の偉業と言える。国枝氏の現役引退はわが国のパラスポーツにとって、ひとつの転換点になると考える。国枝氏のようなスーパーヒーローの出現も待たれるところだが、パラスポーツ界全体で盛り上げていく意識がさらに重要になるだろう。

#### 参考文献等

プロ車いすテニスプレイヤー国枝慎吾公式サイト: <https://shingokunieda.com/>  
(2023/3/1)

ヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピアンに対する社会的認知度調査」(2017)

ヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピアンに対する社会的認知度調査」(2022)

ヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラアスリート起用のテレビコマーシャル(TVCM)」実態調査(2022)



## 第5章

# ユニ★スポ体験での児童の意識変容調査

## 1. チャレンジ！ユニ★スポについて

「チャレンジ！ユニ★スポ」とは、“健常者と障害者の相互理解促進”や“共生社会実現への貢献”を目的に、“静岡県内の特別支援学級がある小・中学校の児童・生徒・教員”を対象に障害者スポーツ『ボッチャ』をユニバーサルなスポーツ教材と位置づけた体験授業で、当財団が(公財)静岡県障害者スポーツ協会(以下、「県協会」、筑波大学体育系齊藤まゆみ教授の協力や指導を得て2019年より実施している事業である。2019年度にケーススタディーとして開始し、2020年度は新型コロナウイルス感染症の拡大で継続開催が危ぶまれたものの12の小学校を対象に実施でき、ボッチャ体験を通じた障害者への理解促進やスポーツが苦手な人に対する有用性などが確認できた。そして2022年度より“静岡県内の全ての小・中学校”を対象を拡大し、継続して事業を展開している。今年度は、これまでの調査方式に加え2020年に参加校の追跡調査を実施した。

「チャレンジ！ユニ★スポ」実施にあたっては、県からのガイドラインを基本に、県協会、講師担当の障がい者スポーツ指導員や開催校の教員から提示された現場視点での感染防止のアイデアを順次取り入れた。さらに、教員から出された「用具がない」「予算がない」「専門の知識がない」というニーズに対し、2021年度開催校より体験会終了後にボッチャセットを各校に寄贈することで、どのような成果があるのかを調査していく。

本事業には、今年度も県協会の多大な協力を得て実施した。また、開催にあたって多岐にわたりご協力をいただいた静岡県、静岡県障害者スポーツ指導者協議会および指導員の皆様、当財団障害者スポーツ・プロジェクトメンバー、そして本活動にご理解ご協力いただいた静岡県内の学校関係者の皆様にお礼申し上げたい。

## 2. プログラムの特徴

本事業ではボッチャ体験会に加え、①障害者スポーツに関する知識の提供(学習機会)、②スポーツが苦手な人に対するスポーツの有用性、価値への理解浸透、意識変革、③スポーツ普及を通じた障害者への理解促進、偏見などの減少、④社会的価値の醸成(学術的価値)を有するプログラムとしている。

## 3. 調査目的

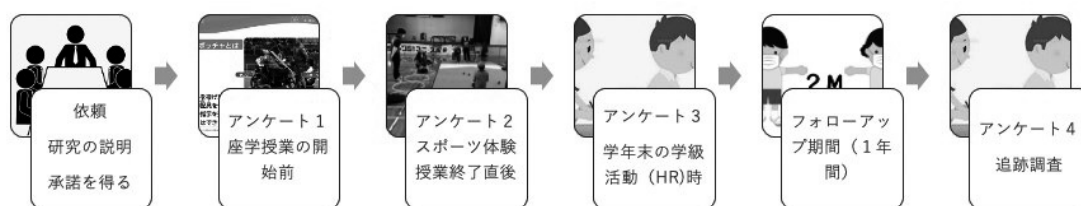
本調査は、2020年度より順次施行された学習指導要領の理念を実現し、スポーツを通じた共生社会実現に寄与する教育内容検討のための基礎資料を得ることを目的としている。この学習指導要領にはパラリンピック教育が明示され、児童生徒の意識のみならず多様な行動変容につながるような教育の推進が期待される。そこで「チャレンジ！ユニ★スポ」の教育内

容で子どもたちの意識や行動がどのように変容するのかを、アダプテッド・センシティブ尺度（齊藤ら,2021）を用いて調査した。

#### 4. 調査方法

2020 年度に参加した 4 年生児童に対する 1 年経過後（5 年生）の追跡調査という位置づけで調査を行った。

調査の手続きとして、2020 年度に参加校において説明と依頼をし承諾を得た。次に事前学習前の意識調査（アンケート 1）を実施した。事前調査実施後に各校において座学での授業を事前学習として実施した。その後ポッチャを教材とした体験学習を実施し、体験学習終了時に意識調査（アンケート 2）を行った。さらに、体験学習の数か月経過後に意識調査（アンケート 3）を実施し、全体の傾向と学校別の分析とフィードバックを実施した。そして、追跡調査としての意識調査（アンケート 4）を 2021 年度に実施した。



調査の流れ(2020 年度および 2022 年度に実施)

##### 4.1. 対象者

「チャレンジ！ユニ★スポ」に応募し、調査協力の同意を得た静岡県内 12 校の児童生徒のうち、1 年後の追跡調査に協力が得られた 10 校 401 名が調査対象である。

##### 4.2. アンケート調査

アンケートは、「事前学習前（アンケート 1）」用、「体験会参加直後（アンケート 2）」用、「体験会から 2～3 か月経過後（アンケート 3）」「1 年後」用の 4 種類であるが、いずれも共通する調査項目を設定している（図表 5-1）。同一対象者へ期間中に 4 回の回答を依頼した（調査用紙は巻末資料参照）。

アンケート実施にあたっては、以下について補足説明を加えた。

- ・アンケートへの協力は強制でなく任意である。

・回答者コードは、外部には回答者を特定できない配慮を加えた個別識別コード設定となっており、児童自身で設定する仕組みである。記入は児童の意思を尊重するが、可能な範囲で協力して欲しい。

・調査結果発表時に回答者個人を特定する情報は一切含まれない。

・「必ず3つ選んでください」と指示している一部の設問では、児童からの質問が想定される。例えば、「2つしか該当項目がない。全てが当てはまる。どれも当てはまらない」などである。その場合は「自分の気持ちに近い順に上から3つ選んで○を」という回答を教師に依頼した。

図表 5-1 調査項目と実施時期

質問項目	事前	直後	数か月後	1年後
障害のある人との距離感	○	○	○	
東京 2020 オリンピック・パラリンピックへの興味	○			
知っている障害者スポーツ種目	○			
ボッチャの感想		○		
障害イメージ	○	○	○	○
障害者スポーツイメージ	○	○	○	○
アダプテッドの考え方	○	○	○	○
アダプテッドの実践力	○	○	○	○

○は実施項目

#### 4.3 事前学習

事前学習は、国際パラリンピック委員会の公認教材である『I'm POSSIBLE(アイムポッシブル)』日本版を用いた。教材についてはスライド、ワークシート、動画を提供し、協力校に実施を依頼した。なお、教材はいずれも TOKYO 2020 for KIDS ウェブサイト (<https://education.tokyo2020.org/jp/>) の東京 2020 教育プログラムからダウンロード可能であった。

\*現在は日本パラリンピック委員会サイトより改訂版のダウンロードが可能 (<https://www.parasports.or.jp/paralympic/iampossible/>)

図表 5-2 事前学習で使用したスライド

スライド
①『パラリンピックってなんだろう?』（必須）
②『ボッチャをやってみよう』（必須） P13までを座学にて依頼 P14以降は体験会にて説明
③「公平について考えてみよう」（任意）
④「東京2020パラリンピックを楽しもう」（任意）

図表 5-3 事前学習で使用した動画

動画
①「リオ 2016 パラリンピックダイジェスト（3分34秒）」（必須）
②「ボッチャ競技説明（2分38秒）」（任意）
③「ボッチャをやってみよう5分10秒」（必須）
④「（教員用）ボッチャ授業の進め方（4分53秒）」（参考）



#### 4.4 結果の概要

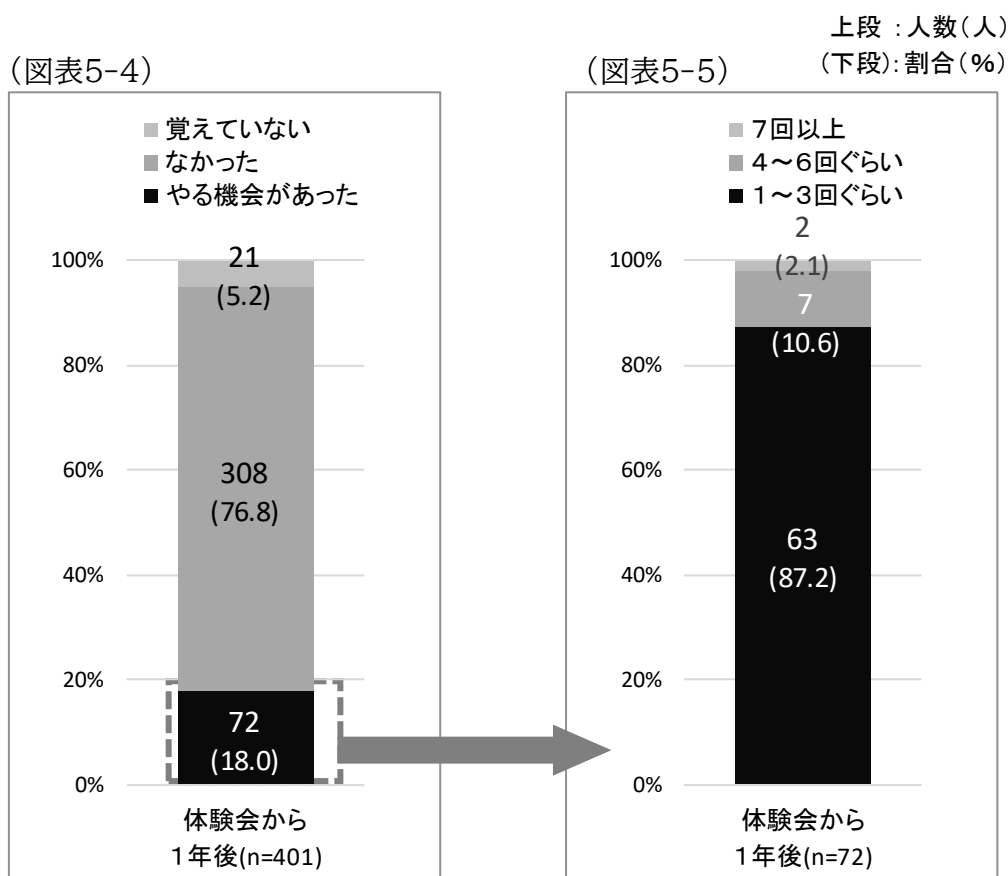
期間中に実施した4回のアンケートから、回答者コードで紐づけられた401組のデータを分析対象とした。結果の概要は以下の通りである。

##### ポッチャをする機会

ユニスポ体験学習のあとに、ポッチャ体験をする機会があったかどうかについて「やる機会があった」「なかった」「覚えていない」より回答してもらった。また、実際の実施状況についても合わせて回答してもらったところ、1～3回が87%以上となっており、日常的に実施できる環境ではないことが示された。図表5-4～5はその結果を示したものである。

図表5-4【体験会から1年後】ポッチャ体験会のあと、ポッチャをやる機会があったか

図表5-5【体験会から1年後】やる機会があった人は、何回ぐらいやりましたか

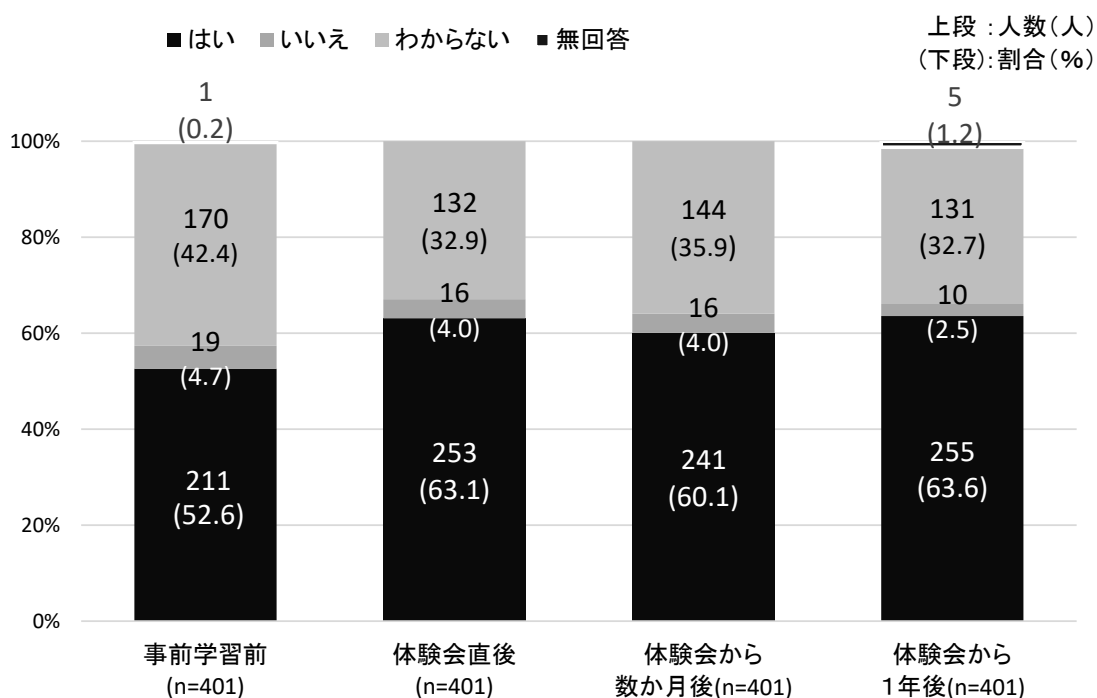


#### 4.4.1. 障害のある人との距離感

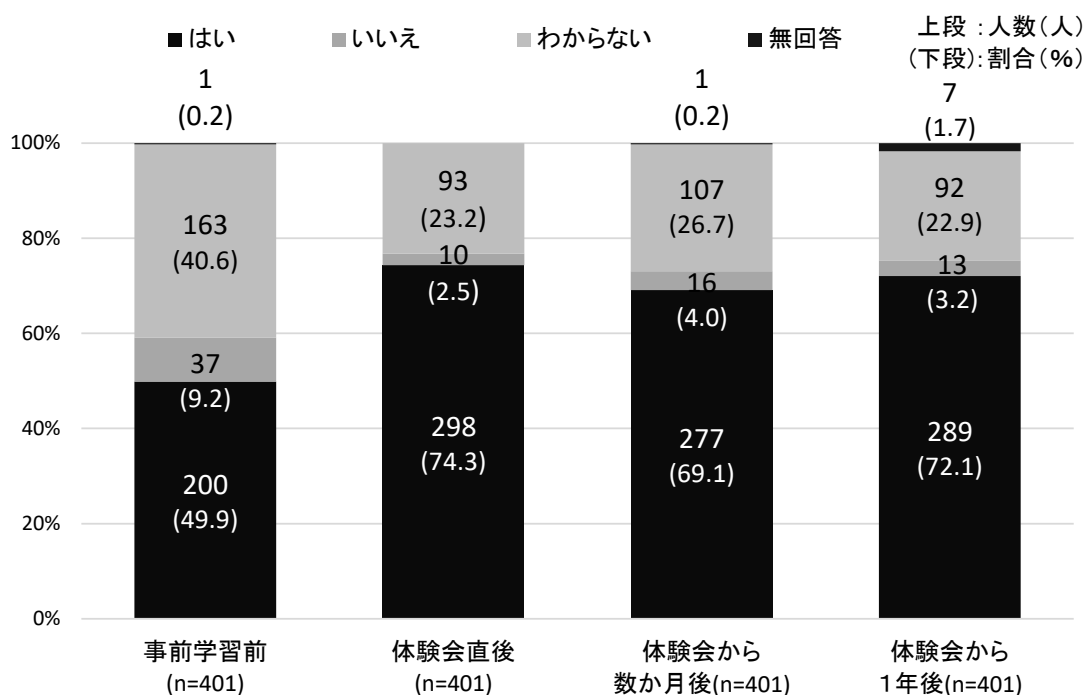
2020年度に実施したものと同一項目である「障害のある人と仲良くできる?」「障害のある人と一緒にスポーツできる?」「一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう?」という3つの質問に「はい」「いいえ」「わからない」で回答してもらった。図表5-6~8はその結果を示したものである。

いずれの項目とも、体験会から数か月後の状態が維持されていることが確認できた。次にポッチャをする機会の有無で比較したところ、経験ありの方が「はい」と答える割合が高いことが示された。つまり、ユニスポ体験学習がその後の児童の意識や行動変容に影響を与えていることが示唆された。

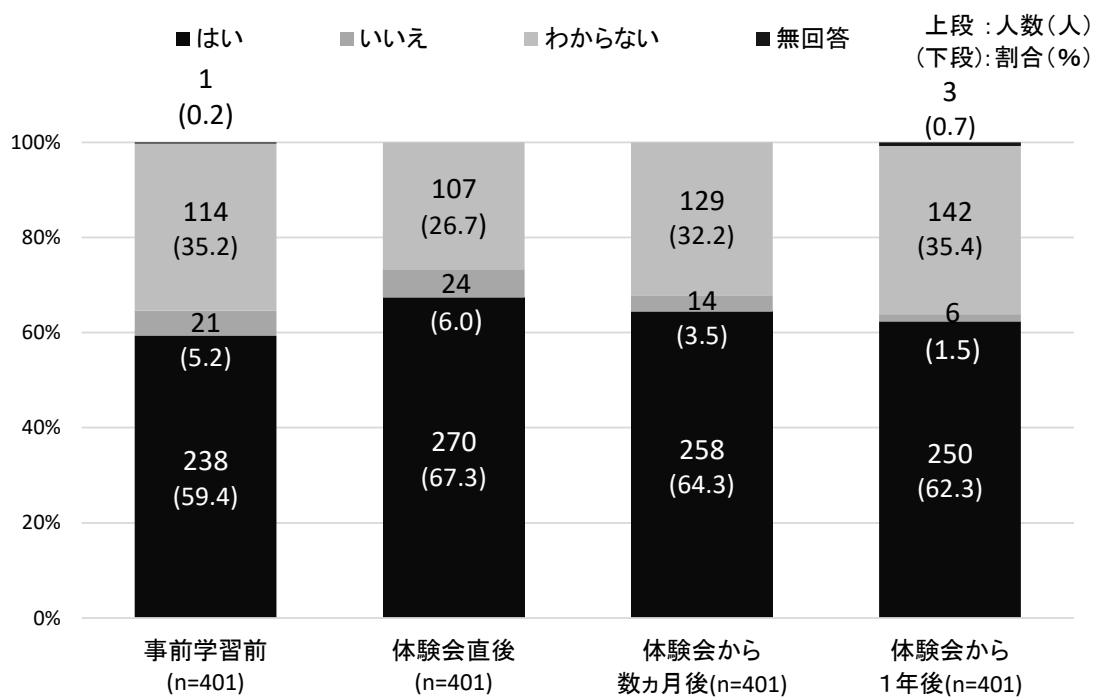
図表 5-6 障害のある人と仲良くできる?



図表 5-7 障害のある人と一緒にスポーツできる？



図表 5-8 一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう？

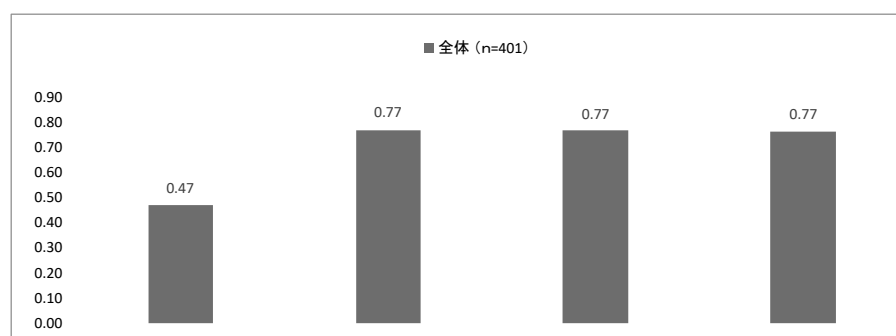


#### 4.4.2. 障害イメージ

障害者に対してどのようなイメージを持っているかを把握するために、「障害」から連想する用語として「困っている、個性的、手伝いが必要、不便なことがある、その人らしさ、リハビリ、自由に動けない、できることがある、車いす」の選択肢から3つを選択してもらい、3回の変化を見た。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、平均値と標準偏差をもとに比較検討した。数値はポジティブなイメージが高い方から3,2,1,0となる。その結果、事前学習前(0.47±0.87)に比べ体験会直後(0.77±0.89)にポジティブなイメージ変化があり、その傾向が数か月後(0.77±0.90)、1年後(0.77±0.91)まで継続することが示された(図5-9)。

次に、体験会終了後から1年後の調査までの間にボッチャ等を継続して実施した児童とそうでない児童で比較したところ、実施した児童の平均スコアが0.97と実施していない児童の0.72に比べ有意に高いことが示された。つまり、体験で止まるのではなく継続することで障害に対するポジティブイメージが醸成されていくことが示唆された(図5-13)。

図表 5-9 障害イメージ



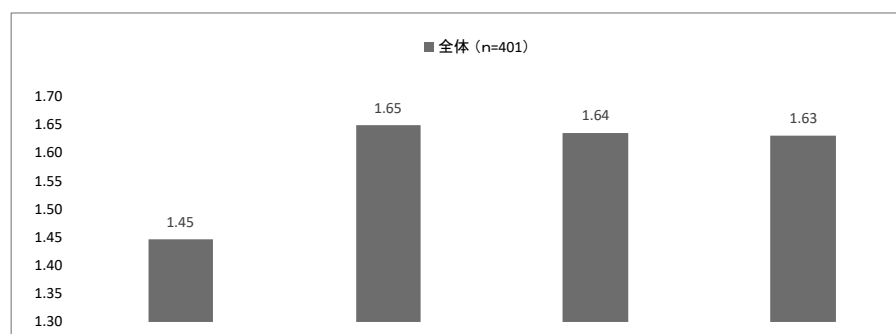
障害イメージ	①事前学習前	②体験会直後	③体験会から数か月後	④1年後
全体 (n=401)	0.47 (±0.87)	0.77 (±0.89)	0.77 (±0.90)	0.77 (±0.91)

#### 4.4.3. 障害者スポーツイメージ

障害者スポーツから連想するイメージについて、「楽しそう、大変そう、チャレンジしてみたい、不便、激しい、障害者のためのもの」という選択肢より3つを選択してもらい、3回の変化を見た。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、平均値と標準偏差をもとに比較検討した。数値はポジティブなイメージが高い方から3,2,1,0となる。その結果、事前学習前(1.45±0.77)に比べ体験会直後(1.65±0.67)にポジティブなイメージ変化があり、その傾向が数か月後(1.64±0.71)、1年後(1.63±0.69)まで継続することが示された(図5-10)。

次に、体験会終了後から1年後の調査までの間にボッチャ等を継続して実施した児童とそうでない児童で比較したところ、実施した児童の平均スコアが1.79と実施していない児童の1.64に比べ有意に高いことが示され、障害に対するポジティブイメージ同様に、障害者スポーツのポジティブイメージも醸成されていくことが示唆された(図5-13)。

図表 5-10 障害者スポーツイメージ



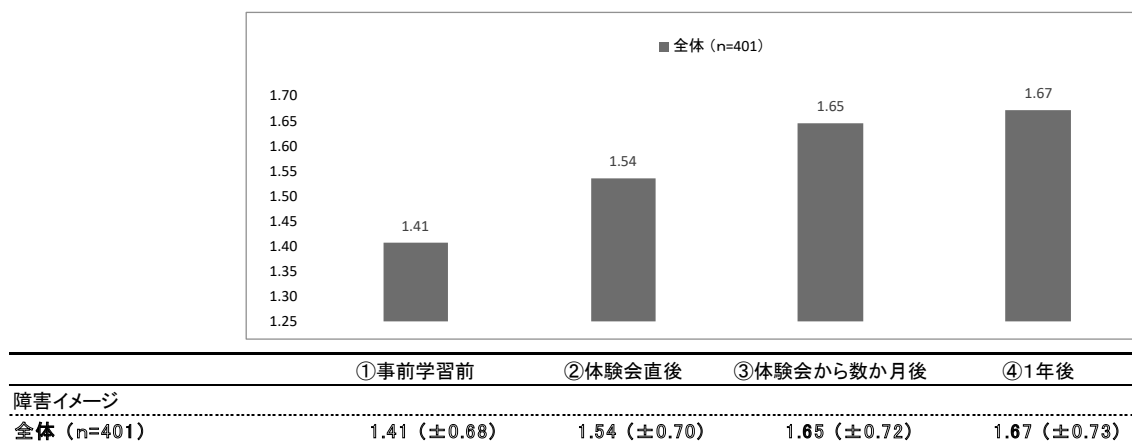
	①事前学習前	②体験会直後	③体験会から数か月後	④1年後
障害イメージ				
全体 (n=401)	1.45 (±0.77)	1.65 (±0.67)	1.64 (±0.71)	1.63 (±0.69)

#### 4.4.4. アダプテッドの考え方

障害のある友達とスポーツをするために必要なものとして、「障害者スポーツに詳しい先生やコーチ、スポーツのルールを変えること、障害者スポーツの本や資料、障害のある友達と相談すること、障害者スポーツ専用の道具や場所、サポートすること」という選択肢より3つを選択してもらい、3回の変化を見た。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、平均値と標準偏差をもとに比較検討した。自らが主体的に関わっていこうとする意識をアダプテッドの自発性と捉え、数値は自発性が高い方から3,2,1,0となる。その結果、事前学習前(1.41±0.68)、体験会直後(1.54±0.70)、数か月後(1.65±0.72)、1年後(1.67±0.73)と高くなることが示された(図5-11)。

次に、体験会終了後から1年後の調査までの間にボッチャ等を継続して実施した児童とそうでない児童で比較したところ、実施した児童の平均スコアが1.68であり、実施していない児童1.64との間に差がないことが示された(図5-13)。

図表 5-11 アダプテッドの考え方(スポーツをするために必要なもの)

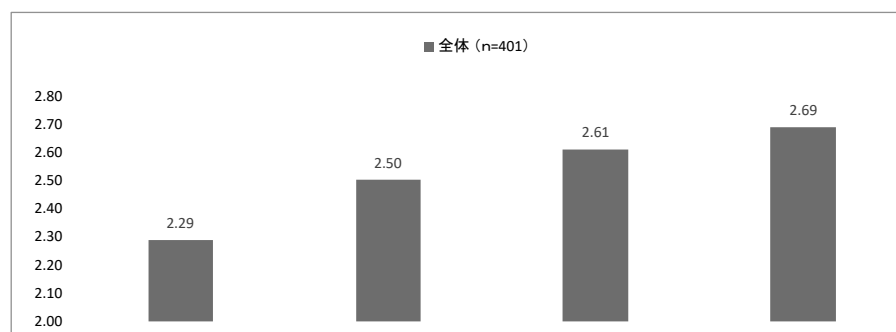


#### 4.4.5. アダプテッドの実践力

障害のある友達とスポーツを楽しむために必要だと思うことを、体育授業での場面設定をもとに「友だちがうまくなるように練習をがんばってもらう、友だちも楽しめるようにルールを変える、あまりボールを渡さないようにしてあげる、みんなが車いすにのって車いすバスケットボールをする、無理をさせず得点係や応援で頑張ってもらう、ボールを使いやすいものに変える」という選択肢から3つを選んでもらい、3回の変化を見た。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、平均値と標準偏差をもとに比較検討した。一緒に楽しむための配慮や工夫を必要な場面で適用しようとする意識をアダプテッドの適用度と捉え、数値は適用度が高い方から3,2,1,0となる。その結果、事前学習前(2.29±0.68)、体験会直後(2.50±0.63)、数か月後(2.61±0.57)、1年後(2.69±0.54)と高くなることが示された(図5-12)。

次に、体験会終了後から1年後の調査までの間にポッチャ等を継続して実施した児童とそうでない児童で比較したところ、実施した児童の平均スコアが2.72であり、実施していない児童2.68との間に差がないことが示された(図5-13)。

図表 5-12 アダプテッドの実践力(車いすバスケットを楽しむために必要なもの)

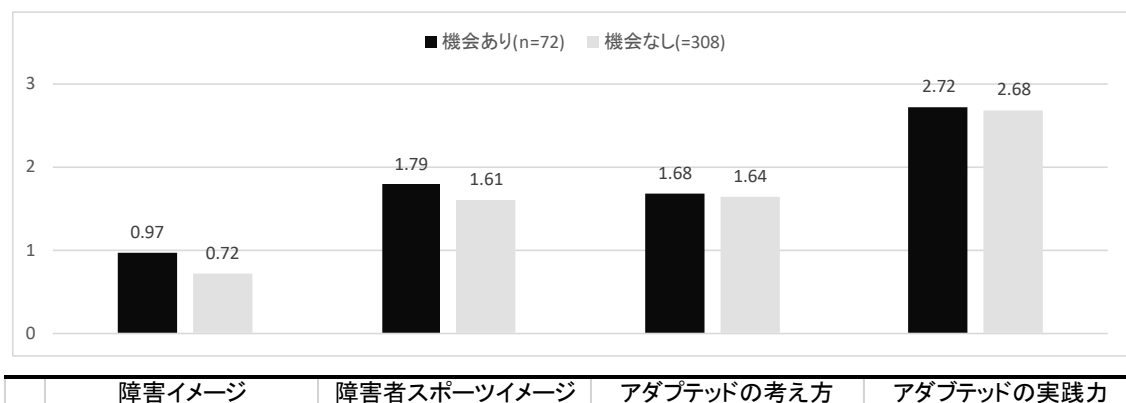


	①事前学習前	②体験会直後	③体験会から数か月後	④1年後
障害イメージ				
全体 (n=401)	2.29 (±0.68)	2.50 (±0.63)	2.61 (±0.57)	2.69 (±0.54)

これらの結果から、一連の学習内容が、児童の障害イメージをポジティブな方向に変容させることが示された。また、障害のある友だちとスポーツをするために自ら主体的に関わっていこうとする意識の醸成や必要な場面でアダプテッドを適用しようとする意識があることも明らかとなった。また、その意識は1年後も継続していることが示された。以上のことから、ユニ

バーサル・スポーツを教材とした体験会を軸とする教育内容は、児童生徒の意識変化に影響すると考えられた。

図表 5-13 ボッチャを継続してやる機会の有無別の平均スコア



## 5. 今後の課題

本調査を実施するにあたっては学校関係者の協力が不可欠である。事前学習では、教師が配布された教材をもとに展開することから教師の教材観や扱い方も重要な要素である。1年後の追跡調査からは、継続して実施することで児童の障害イメージや障害者スポーツのポジティブイメージが醸成されることが示されたが、体育やスポーツ場面におけるアダプテッドへの意識や実践力については、差がないことも示された。「チャレンジ！ユニ★スポ」は、多くの小学校では総合的な学習の時間の福祉単元として実施されていることから、単発的な扱いにならざるを得ない。アダプテッドの意識が定着するためには年間計画に組み込まれていくことが必要であり、障害者スポーツ指導員による「出前授業・出前講座」から各校の教員による「自前授業・自前体験会」が展開できるよう、教員対象の研修も同時に進めていくことが求められる。

昨年度の調査で用具不足や予算の問題が継続に対する阻害要因として示されたことから、体験会後に当該校へ用具を提供し、その後の活用状況についても調査している。また、当財団が全国を対象に実施している「スポーツ教材の提供」で、ボッチャ用具を提供した複数の学校より興味深い実践報告が得られたので、活用事例として次項で報告する。



## 6. まとめ

本調査からは前年度と同様に、事前学習、体験、振り返りという一連の学習内容が児童の障害イメージをポジティブな方向に変容させることが示された。さらに、1年後の追跡調査からも児童の障害イメージやアダプテッドへの意識が定着することが示唆された。

「チャレンジ！ユニ★スポ」で実施しているボッチャを教材とした授業が、スポーツを通じた共生社会の実現という教育目標に合致し、児童生徒の意識変容を促進する可能性も示唆された。

本調査にご協力いただいた児童生徒の皆さん、事業の実施にご協力いただいた学校関係者ならびに、静岡県障害者スポーツ協会に御礼申し上げます。

(齊藤まゆみ)

## ■ボッチャの展開事例紹介

ヤマハ発動機スポーツ振興財団では、スポーツに親しむ機会を増やすことで、心身ともに健全な子どもたちを育成することを目的に、「子どもたちがスポーツを楽しみ、好きになるような取り組み」を計画している団体に対してスポーツ教材を毎年提供している。

2021年度は、応募のあった団体から抽選で120団体に対し、ボッチャボールセット(60団体:対象は中学生以下)あるいは、タグラグビーセット(60団体:対象は小学生以下)を提供した。そして、年度末に提供先団体より教材活用実績を報告いただいた。

本項では、ボッチャをユニバーサルなスポーツとして体験授業を実施された団体より、その展開方法(狙いや工夫、効果など)についてお話を聞かせていただいたのでご紹介させていただく。ボッチャを使った体験会等を計画されている皆様の参考としていただければ幸いである。

### 訪問校の概要

#### 1)山形県立山形養護学校

病弱虚弱の児童生徒が学ぶ特別支援学校。病弱だからできない、ではなく、病弱でもできたという満足感を一人でも多く味わってほしいと思いボッチャに取り組み、子どもたちの状況を考慮してプログラムを工夫。普段、気持ちを表にあまり出さない生徒もハイタッチをするなど気持ちを表したり、ボッチャに参加することを励みに登校する生徒も出てきた。

#### 2)埼玉県 久喜市立本町小学校

全校児童数 270 名程(特別支援学級含む)の小学校。生涯スポーツへの誘いという旗の下に児童も教員もそして地域コミュニティも巻き込み、ある資源をフル活用しながら学校教育を進めている。本町小学校地区コミュニティ協議会と実施した「ボッチャ交流会」では、個々の児童に応じた学びが得られたとのことで、今後も継続的取り組みを予定されている。

#### 3)高知県 中土佐町立上ノ加江小学校

高齢化地域に位置する生徒数30名弱の小学校。町内の社会福祉協議会や地域活動支援センターに集う障害者との協働でふれあい体験会の開催、障害理解と地域交流を促進。誰もが楽しめるスポーツであることを知ったことにより、雨の日の休み時間では、中学年を中心にボッチャで楽しむ姿が見られるようになっている。

「交流及び共同学習を楽しもう」～病弱の特別支援学校。ポッチャが登校する励みに！～

実地調査 山形県立山形養護学校 2022年11月4日(金)15:20～17:00

面接対応者 古原常能 教頭 門馬達也 教諭(小学部担当)

新関日春望 教諭(中学部担当) 大泉麻実 講師(高等部担当)

面接者 藤田紀昭(日本福祉大学 スポーツ科学部 教授)

大庭義隆(公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団)

今回の実地調査の目的はポッチャボールを贈呈した学校がどのようにボールを使い、どのような効果があったのか、どのような工夫をしていたのかを知ることである。

贈呈した各学校に対する事前のアンケート調査から、小学部、中学部、高等部それぞれの活動でポッチャを取り入れるなど学校全体で取り組んでいること、また、その結果「ポッチャの学習に参加することを励みに登校する生徒がいた」「教師と一緒に取り組むことでルールを正確に理解し、自信をもって審判ができるようになった」「普段、気持ちを表にあまり出さない生徒もハイタッチをするなど気持ちを表していた」などの多様な効果がみられていたことが書かれていたことから、実際の取り組みを知るために実地調査をさせていただくことにした。

### 【学校の特徴】

山形養護学校は病弱教育の特別支援学校であり、隣接する山形病院と連携して教育を進めている。現在、山形病院に入院して教育を受けている児童生徒はいない。小学部 13 名、中学部 9 名、高等部 16 名計 38 人が在籍している。学級は計 16 学級あり、教育課程は単一障がい学級、重複障がい学級、訪問教育の 3 種類である。てんかんや筋ジストロフィーなど、慢性疾患に対応した学校であるが、20 年ほど前からは精神疾患のある子どもや重度・重複障がいのある児童生徒の割合が高くなってきている。部活動は実施していない。

### 【ポッチャボールを使っただけの活動】(古原教頭のお話)

県から障害者スポーツ関連の用具が配布されるが、ポッチャの道具はなかった。そのためヤマハ発動機スポーツ振興財団のポッチャ用具頒布事業に応募した。ポッチャボールが届く以前から当校では教員手作りのボールを使ってポッチャを体験する授業を実施していた。

ポッチャには単一障がい学級、および重複障がい学級の子どもたちが主に参加していた。小学部では「あそび」の位置づけで実施、中学部では保健体育、および、総合的な学習の時

間に実施し、高等部では体育や自立活動の時間で実施した。いずれも授業の中での実施であった。

当初は近隣の小中学校とボッチャを通しての交流なども構想していたが、コロナ感染拡大の影響により実施できず、校内での交流にとどまっている。

「ボッチャはルールがシンプルでありながら戦術面では奥深い。実施する子どもの実態に応じてルールを変えて楽しめるところがよいと考えている。例えば知的障害のある子どもであればジャックボールに近づけられれば楽しいし、知的障害のない子どもであれば、作戦、戦術を考える楽しさがある。重い肢体不自由の子どもであってもランプなどを使って参加することができる。(自分で投げられない子どもが使うランプは教員が段ボールなどで製作した。)このように、どのような子どもであっても参加できる点がボッチャの利点である。

活動の中では子どもたちの良かったところを教員が評価し、褒める。そうすると子どもたちもうれしくなり、ボッチャをまたやりたくなるという好循環がみられた。欠席しがちな子ども、体を動かすのが好きではない子どもも、ボッチャの時には登校し、楽しんでいった。昨年度はパラリンピックもあり、日本チームの成績もメダルを取るなど活躍したことからその分、子どもたちの関心は強くなったと思われる。また誰もこれまで経験したことがないスポーツでみんな同じスタートラインに立てたことも良かった。

【各学部での取り組み・子どもたちの変化】(門馬先生、新関先生、大泉先生のお話)

#### 小学部

単一障がい学級と重複学級の児童 4 人が参加した。初めにボッチャやパラリンピックに関する情報などを子どもたちに伝え、ボッチャに対する関心を高めた。その後、実際にボッチャを体験した。全員でボッチャを楽しむことができるようルールを単純化させるなど工夫して実施した。具体的には的あてゲーム的な内容で手作りの的(写真参照)を使ってみんな楽しんでんだ。

集団の中での活動が苦手な児童もいたが参加できた。そのことがみんなのできるきっかけになった。後半では「ナイス！」や「ドンマイ！」といった声掛けもできるようになった。

得点(数字)の数え方など、算数の内容を盛り込んで実施することができた。二人一組で実施したため、勝っても負けても個々人のプレーの結果とならなかったことも良かった。

一昨年までは、教員が手作りしたボールでボッチャを体験していた。本物のボッチャボールで活動できるようになり本当に良かった。

## 中学部

男子2名(単一障がい学級)で実施した。総合的な学習の時間にボッチャのことを動画で勉強すると関心が高まった。動画で見た技を自分たちもやってみたいと思うようになり、モチベーションが上がった。教師と生徒が二人で1チームとなりペア戦でゲームを実施した。生徒と教師で話し合い、作戦を考えながらゲームを進めた。コートの中に入って作戦会議ができるのも良かった。授業が進むにつれ、だんだんと生徒が主体的に作戦を考えるようになってきた。最初のころは、勝った負けただけに関心が集まっていたが、後半はお互いの作戦を評価できるようになってきた。さらに、審判もできるようになった。

今年は運動会でもボッチャを実施した。その際、保護者が、様々な方法で参加できることを知り、ボッチャに興味を持つようになった。

## 高等部

単一障がい学級の生徒も重複障がいの生徒も、体育と自立活動でボッチャを実施した。まず、動画でボッチャを学んだ。パラリンピックのテレビ放送なども視聴して興味を高め、その後ボールを使って実際の活動に入った。

発達障害のある生徒は勝ち負けに左右され、こだわりやすいこともあるが、生徒同士で作戦を考える時間を設定することで、徐々にコミュニケーションが取れるようになり、負けても笑顔で終われるようになった。いつもは活動に参加しない生徒も、ボッチャのボールを投げることは好きな様子で参加してくれた。ボッチャはジャックボールに近づけるというルールのわかりやすさが魅力であり、どの生徒も参加しやすいのではないかと感じた。

### 【ボッチャのいいところ】

ボッチャはやりやすい。競技を始めるのに特別な技術を身につける必要がなく、簡単にみんながスタートラインにつくことができ、だれでも参加できる。点数を数えるところは算数の内容につながり、コミュニケーションを取りやすい点も良いところだと思う。(門馬先生)

去年よりも作戦面で進歩が見られた。みんな取り組みやすい。他の球技と違って、体力がない生徒でも立ってじっくり考えることができるのでボールに触れている時間が長く、生徒にとって参加している実感があるのではないかと感じる。ルールも簡単で取り組みやすい。(新関先生)

ボッチャはプレーするのに特別な技術が必要なわけではなく、だれでも投げられること、チ

ム戦ではあるが、それぞれの生徒が投げる時間が確保され焦らず投げられること、あの人はできるが自分はできないというような気持ちにならずにすむことなどから、発達障害のある生徒にも取り組みやすいのではないだろうか。今年は自立活動で実施している。新しいことに取り組むのが難しい生徒も安心して取り組める。(大泉先生)

#### 【今後の取り組みについて】

様々な実態の子ども同士が、一緒に参加できるような工夫ができるといいと思う。(門馬先生)

重複障がい学級で障害の重い生徒が、もっと活動する方法を考えてみたい。(新関先生)

継続してパラスポーツに取り組んでいきたい。継続することで、生徒同士で学び合いができるようになると思う。(大泉先生)

#### 【学校を訪問しての感想】

教頭先生、ボッチャを担当した門馬先生、新関先生、大泉先生それぞれ非常に熱心な取り組みをされていることが言葉の節々から伝わってきた。また、子どもたちが少しでも成長するように、様々な工夫をされていることがわかった。教材としてのボッチャの特徴、利点をよく考えておられ、教材研究の深さに感心すると同時にそんな先生に指導してもらっている児童生徒さんたちは幸せだなと思った。

新関先生は特にボッチャに詳しく、お伺いしたところ、大学時代は日本ボッチャ協会、元日本代表監督の村上さんのゼミにいらしたということだった。

なかなか公費で買うことができない高額なボッチャボールがもらえることに感謝してくださっていると同時に、4人の先生ともボールを大切に使うことがわかり、とてもうれしく感じた。

先生方のお話を聞く中で筆者自身これまで気が付かなかったボッチャの特性や良いところがわかりとても勉強になった。これからも様々な工夫をして、子どもたちに楽しい経験と成長のきっかけをたくさん届けてほしいと思った。

お忙しい中、長い時間お話を聞かせていただき、ありがとうございました。

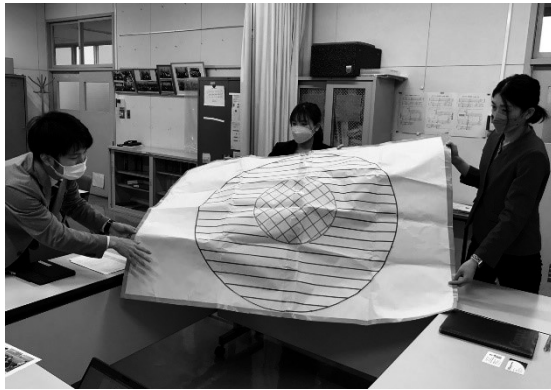
(藤田紀昭)



山形県立山形養護学校の皆様(左より古原教頭、門馬先生、新関先生、大泉先生)



ポッチャのゲームの様子を写真や動画に撮影し校内で紹介。児童生徒や先生だけでなく、学校祭週間で来校する保護者も視聴できるコーナーを設置。



小学部では、知的障害のある子どもを考慮してルールを単純化。的あてゲーム的な内容とした手作り目的を作成、あわせて得点(数字)の数え方の学習を実施。



中等部:最初は勝った、負けただけに関心が集まっていたが、後半は作戦を評価できるようになり、審判もできるようになった



高等部:ポッチャの学習に参加することを励みに登校する生徒も。

「ボッチャ」を軸とした授業と地域交流で、児童へスポーツの意欲や関心を高める

実地調査 久喜市立本町小学校 2022年11月7日(月)13:30~14:45

面接対応者 大森正樹 校長 栗城 遥 教務主任

面接者 齊藤まゆみ(筑波大学体育系 教授)

大庭義隆(公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団)

今回の実地調査の目的はボッチャボールを贈呈した学校が、どのようにボールを使い、どのような効果があったのか、どのような工夫をしていたのかを知ることである。

贈呈した各学校に対する事前のアンケート調査から、①4年生の福祉の学習では、「体験を通して、ボッチャが障害の有無や性別、年齢を超えて幅広く親しめるスポーツであることに気づくことができた。加えて、体が不自由な人でも、驚くような素晴らしいプレーができるなど、体の不自由な人への見方が変わった。」また、②地域との交流行事では、「ボッチャを介することでよりスムーズにコミュニケーションを取ることができ、絆が深まった。」さらに、③特別支援学級においては、「ルールを理解が深まると共に投球の技能が高まり、スポーツへの関心意欲が高まった。」などの多様な効果がみられていたことが書かれていたことから、実際の取り組みを知るために実地調査をさせていただくことにした。

#### 【学校の特色】

久喜市立本町小学校は、全校児童 274 名、1学年が 1~2 学級と特別支援学級(知的、自閉・情緒)が 2 学級である。校内テーマとして「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成するための小学校体育」を掲げており、児童に「多様なスポーツへの関わりや親しみ」を培うことに創意工夫を凝らしている。また、地域コミュニティとの連携が特徴であり、特に本町小学校地区コミュニティ協議会とは「子ども祭り」「昔遊びのお手伝い」「防災訓練」「除草・樹木の剪定作業」など多様な関わりを持っている。

#### 【4年生の総合的な学習の時間(福祉領域)】

4年生の総合的な学習の時間(福祉領域)でボッチャを活用できるのではないかと、また「生涯スポーツ」の切り口としてボッチャが活用できると思ったことから、ヤマハ発動機スポーツ振興財団のボッチャ用具頒布事業に応募した。ボッチャボールが届く以前は、校内にはボッチャはなく、また予算化という面で購入には難しさがあった。



東京オリンピック・パラリンピックの時期でもあり、ボッチャの認知度も高まってきた。授業を担当した栗城先生も本企画以前はボッチャの経験がなく、夏休みに職員レクリエーションでボッチャを体験、児童がただ楽しむだけでなく、どの程度までルールを噛み砕きながらやれば良いかなども考えながら実施した。福祉の単元としてボッチャを用いることから、競技のルールをそのまま使用するのではなく、児童の実態に合わせてルール等を変更していくことにした。

総合的な学習の時間(福祉領域)におけるねらいは、ボッチャを軸とし、卓球やシットینگバレーなどのパラスポーツを体験することによって、「できる」というポジティブイメージを引き出すこととした。その理由として、白杖の体験や体の不自由さの体験を軸とした「体の不自由な人を知ろう」という展開では「大変」「かわいそう」という一面的な捉え方になりがちだったことがある。そのため、まず児童がボッチャを行い、スポーツとしての面白さ、何ができるか、技術的な特徴などを体験的に学習した。次に振り返りとして、東京パラリンピック金メダリストの杉村選手の映像を見ることで、杉村選手の握力(5kg)や動きの特性(脳性まひ)とボッチャのパフォーマンスを自身のボッチャ経験に重ね合わせることで、児童の身体障害がある人への見方や捉え方が変わった。一連の授業を経た児童からは、「自分でやると難しい」「体が不自由だとスポーツはできないと思っていた」から「やり方次第で、ルールの工夫次第でこんなスポーツができる」「スポーツを通して楽しんだり、人生の中で楽しいことを見つけることができる」という捉え方の広がりを感じられる反応があった。

ボッチャ体験2時間の授業内変化は、児童のプレースタイルが時間経過とともに変わっていったことである。負けそうな時にジャックアウトを狙う、投球後にチームの児童らが自然とボールの近くに寄って作戦会議をするなどの様子が見られた。また、普段は運動が得意でない児童も、スーパープレーを連発してみんなから拍手をもらったり、その児童がガッツポーズをするなど、自信にもつながる成功体験を感じられる機会になった。

通常の学級においてボッチャを教材とした授業をするには1セットでは足りず、児童の待機時間が増えることから、活動を保障するためにも複数セットあるとありがたい。特別支援学級では、最大で8名なので1セットでも対応できる。コートは、ラインテープを貼るのではなく、コーンやマーカーを置くことで簡易化した形で実施した。

#### 【地域との交流行事】

本町小学校には、本町小地区コミュニティ協議会(通称:コミュ協)という地域組織があり、小学校と有機的な連携のもとに様々な交流をしている。特に「本町小まつり」は本町小地区コ

コミュニティ協議会主催の小学校体育館を会場とした行事で、毎年9月の第2日曜日に開催してきた。射的やビンゴ、ストラックアウトなどのコーナーで遊び、景品も準備されるなど300人程度が集まる盛大なお祭りであった。しかしコロナ禍で祭の開催が制限され、コミュニティ活動として何かできるものはないかと探っていた。人数を制限する中でもできるものとして、大森校長がボッチャを提案したところ採用となった。

コロナ対策として参加者を事前登録50名程度とし、児童も含めた多様な年代でチームを作る形での「ボッチャ交流会」とした。準備の過程で、コミュニティ協議会が久喜市ボッチャ協会の存在を知り、用具の貸し出しと審判の派遣を受けることができた。交流会では、高齢者から児童まで幅広い年代で構成されるチーム特性、さらには連発するスーパープレーなどでの盛り上がりもあり、交流会後にボッチャの可能性を強く感じたコミュニティ協議会がボッチャセットを2セット購入した。また、参加者の実態に合わせたルールの設定などにも対応できるよう、今年度のボッチャ交流会では自前で審判もやることを計画している。また、近隣のコミュニティからボッチャセットの貸し出し依頼も来ているとのことである。

#### 【特別支援学級】

特別支援学級では、9名の児童が自立活動の中でボッチャを行った。ボッチャは一定の期間継続して行い、教室内にコートテープを貼ったままにした。特別支援学級では、ボッチャを用いることを通して、「ルールを覚える」「仲間と楽しむ体験をする」「点数を数える」「ボッチャを通して自分の得意なこと、他児の得意なことに気づく」という観点から個別の課題を支援することにつながる取り組みになった。結果として、個々の児童に応じた学びが得られた。

#### 【学校を訪問しての感想】

本町小学校は、生涯スポーツへの誘いという旗の下に児童も教員もそして地域コミュニティも巻き込み、ある資源をフル活用しながら学校教育を進めているという印象を強く受けた。大森校長の発言からは、「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成するための小学校体育」での活動が、本来想定していた内容から大きく制限されたままになっていることへのもどかしさも伝わってきた。また、栗城教務主任の「コロナ禍なので、体育館を自由に開放したり、用具を自由に使って良いという形にはできていない。」という説明からも、コロナの影響はどの学校も抱える課題であることを再認識した。その中でも、「することを前提にどうしたらできるか」という発想からボッチャを地域交流に活用する提案、それを形にした地域コミュニティとの有機的な連携、結果としてボッチャセットの追加

購入につながったことなど、新たな地域間連携の広がりにつながりを感じさせるものでもあった。そして、エピソードとしてお聞きした「ボッチャを体験したことで、クリスマスプレゼントに『ボッチャセット』を頼むと話していた児童が複数いた」ということから、ボッチャを軸とした総合的な学習の時間は、児童にとって楽しい活動であったことがうかがわれる。

特別支援学級の児童も積極的にボッチャに向き合ったようである。また、通常学級とのボッチャ交流は実施していないとのことなので、今後は交流学級などでもボッチャを軸とした教育活動が展開されることを期待している。

お忙しい中、長い時間お話を聞かせていただき、ありがとうございました。（齊藤まゆみ）



お話を伺った本町小学校の大森校長先生(左)、栗城教務主任(右)



パラスポーツ体験は、「できる」というポジティブイメージを引き出すことにつながる。運動が苦手な児童にも、自信につながる成功体験を感じられる機会になる。



本町小地区コミュニティ協議会、久喜市ボッチャ協会との連携で開催した交流会。高齢者から児童までごちゃまぜチームで大いに盛り上がり、次年度も計画。

「高齢化地域の小規模校。障害者の協力で障害理解と地域交流を促進」

実地調査 高知県中土佐町立上ノ加江小学校 2022年11月14日(月)10:15~12:00

面接対応者 角雅子 校長 堅田和正 教頭

面接者 藤田紀昭(日本福祉大学 スポーツ科学部 教授)

大庭義隆(公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団)

今回の実地調査の目的はボッチャボールを贈呈し学校が、どのようにボールを使い、どのような効果があったのか、どのような工夫をしていたのかを知ることである。



贈呈した各学校に対する事前のアンケート調査から、高齢化の進む中

土佐町(人口約 6,164 人、65 歳以上 3,032 人)において、町の社会福祉協議会と連携し、地域活動支援センター「つどい処」(※)に集う障害者からボッチャを教えてもらいながら、障害について学ぶと同時に、地域交流の手段としようとした点が特徴的なことから、実地調査を行った。

※地域活動支援センター「つどい処」

障害がある人を対象として、創作活動、生産活動、地域との交流促進などの機会を提供する支援機関。今回のボッチャ体験にあたっては、この「つどい処」を利用する方で、『ワンチーム(障害理解の啓発を目的に活動をするグループ)』のメンバーが指導された。

#### 【学校の特徴】

生徒数 23名(1 年:5人、2 年:3人、3 年:3人、4 年:2人、5 年:5人、6 年:5人)の極小規模校である。体を動かすことが好きな児童は多いが、運動場は狭く(運動場の斜めを使って何とか 50mの直線路ができる程度)思い切りボールを蹴ったり投げたりすることができない環境である(学校が高台のため、ボールがフェンスを越してしまうと下の方まで落ちる)。1・2 年生が一つのクラス、3・4 年生が一つのクラス、5・6 年生が一つのクラスとなった完全複式学級である。

ほとんどの授業は 2 学年が一緒に実施している。体育では陸上や体操などの個人競技の

運動は苦勞なく実施できるが、サッカーなどのチームスポーツのゲーム形式での活動は難しく、ソフトバレー、バスケットボールなどを教員も参加する形で実施している。

近年、上ノ加江中学校は閉校となったため、小学校卒業したのち、中学校は隣の地区の久礼中学校にスクールバスで通うことになる。

#### 【ボッチャボールを使っての活動】

中土佐町社会福祉協議会(以下、社協)、地域活動支援センターの方々と連携、協力して、本校の中学年(昨年度の3・4年生の7名)が、ボッチャの行い方を教えていただき、ともに楽しみながら障害者理解を深めることを目的として、総合的な学習の一環として実施した。

社協は中土佐町の小中学校の福祉教育の年間計画の中に、当該小学校と福祉関係組織との交流を位置づけ、計画的に障害者施設や高齢者施設との交流を行っている。

ボッチャは障害の有無に関係なく誰でもできるスポーツで、地域活動支援センターでもすでに取り組んでいる競技でもあった。そこで、福祉教育の一環として小学生と障害者施設、障害のある人との交流の手段としてボッチャが取り上げられ、交流が計画された。

また、ボッチャの指導は、社協の中にある障害者支援事業所である中土佐町地域活動支援センター「つどい処」の『ワンチーム』メンバーのボッチャ経験者の方が行った。障害のある人を含むメンバー(当日参加10名程)からルールを説明してもらい、一緒にゲームを体験し、その後質問タイムによる交流も行った。子どもたちに教えるということで『ワンチーム』メンバーにとっても特技を生かせる活躍の場にもなっている。

小学校ではこの他、高齢者施設訪問や独居老人訪問、高齢者とのふれあい活動などによる交流も実施している(ここではボッチャはしていない)。

このプログラムは、小学校、特に担任の教諭、社会福祉協議会、地域コーディネーター、障害者施設関係者の連携により、実現したと言える。

ボッチャボールを使った交流プログラムは、小学校の体育館で実施した。

小学校としては3・4年生の総合的な学習の中で、「地域の人を知ろう、触れ合おう」というテーマのもと学習をしたこと、国語の時間に3年生がパラリンピックのことについて学習したことも動機づけとなった。

現在は児童が日常的にボッチャをできる状態にはなっていない。今年度は体験活動以降も休み時間や全校レクリエーション等で活用できる環境を整えたい。

今後の予定としては、ストックヤード(就労施設)の見学を11月の終わりに実施する。その中の交流等でボッチャをやる予定。

**【効果や子どもたちの変化】**

ボッチャは、誰もが楽しめるスポーツであることを知ったことにより、雨の日の休み時間では、中学年(3・4年生)を中心にボッチャで楽しむ姿が時々見られるようになった。

ボッチャを使つての交流までは「障害のある人は大変」というイメージが強かったが、交流を通して、障害のある人の得意な事や、障害のある人の実際のくらしの様子、障害にもいろんな現れ方があること等を知り、障害者のことに関して広がりを持って理解することができた。その結果もっと勉強したいと考えるようになった子どももいた。

ボッチャが、みんなが楽しめるスポーツであることを知ると同時に、いろんな人が一緒にスポーツができるということを知った。

**【ボッチャのいいところ】**

年齢や障害の有無に関係なく、誰もが楽しめるスポーツであることがわかった。

障害のある方が、自分の身体や体調に合わせてながらスポーツを楽しんでいる様子を知ることができた。

児童が障害について、かわいそう、大変そう、というマイナスのイメージだけでなく、面白い、投げるのが上手、教えてもらえる、といったプラスのイメージを持つことができた。

目で見える障害だけでなく、様々な障害について教えてもらうことができ、障害についてさらに学びたいという思いを持つことができた。

ボッチャ体験での出会いが、以降の学習(障害者就労施設見学、国語科の学習、総合的な時間の学習等)につながった。

地域の交流の手段となり、教員の学びの助けにもなった。

**【今後の取り組みにつて】**

社協と連携した地域交流の中でボッチャを今年もやる予定。

ボッチャを習った上級学年が下学年に教えるような場面が設定できるかもしれない。

その後、ボッチャボールをもう1セット買った。これを使えるような条件を設定したい。

月に1~2回実施している全校レクリエーションの時間でもボッチャを使えるかもしれないと考えている。

**【学校を訪問しての感想】**

海に近い高台に学校があり、なんとも心洗われる気持ちになった。



小規模校ということで、先生と子どもの関係が近く親しく、とても親密でよい関係が作られているように感じた。

先生方も子ども一人一人にしっかりと向き合っていることが実感できた。

町ぐるみで子どもの教育、高齢者のこと、障害のある人のことを連携して進めている印象を持った。小さい町だからこそできるメリットだと感じた。

お忙しい中、長い時間お話を聞かせていただき、ありがとうございました。（藤田紀昭）



お話を伺った上ノ加江小学校の角校長先生(左)、堅田教頭先生(右)



3・4年生の皆さん。パラリンピックについて調べた発表資料を見せてくれました。



わかりやすくボッチャルールの説明をしていただきました。「ルールは簡単だね」



ボッチャ交流で、児童にとっては障害に対するイメージが変化。教える側も楽しい活躍の場に。



一緒にゲームを体験したあとは、質問タイムによる交流を行いました。

## 附録 1

# パラリンピアンに対する社会的認知度調査 調査票



Q1.あなたは、以下に示す  
人物について知っていますか。

	1 知 っ て い る	2 聞 い た こ と が あ る	3 知 ら な い
1. 青木 大和(あおき やまと)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
2. 阿部 友里香(あべ ゆりか)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
3. 有安 諒平(ありやす りょうへい)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
4. 市川 貴仁(いちかわ たかひと)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
5. 岩本 啓吾(いわもと けいご)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
6. 岩本 美歌(いわもと みか)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
7. 大岩根 正隆(おおいわね まさたか)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
8. 岡本 圭司(おかもと けいじ)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
9. 小栗 大地(おぐり だいち)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
10. 狩野 亮(かのう あきら)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
11. 神山 則子(かみやま のりこ)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
12. 川除 大輝(かわよけ たいき)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
13. 小池 岳太(こいけ がつた)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
14. 小須田 潤太(こすだ じゅんた)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
15. 佐藤 圭一(さとう けいいち)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
16. 鈴木 猛史(すずき たけし)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
17. 高橋 幸平(たかはし こうへい)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
18. 田中 佳子(たなか よしこ)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
19. 田淵 伸司(たぶち しんじ)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
20. 出来島 桃子(できじま ももこ)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
21. 東海 将彦(とうかい まさひこ)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
22. 新田 佳浩(にった よしひろ)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
23. 原田 紀香(はらだ のりか)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
24. 藤原 哲(ふじわら てつ)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
25. 本堂 杏実(ほんどう あんみ)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
26. 三澤 拓(みさわ ひらく)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
27. 村岡 桃佳(むらおか ももか)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
28. 森 宏明(もり ひろあき)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
29. 森井 大輝(もりい たいき)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

Q2.Q1 であげた人は、北京・パラリンピックに出場した選手です。「知っている」「聞いたことがある」と回答された選手の実施競技についてお答えください。

	1 ス ノ ー ボ ー ド	2 ア ル ペ ン ス キ ー	3 ク ロ ス カ ン ト リ ー	4 バ イ ア ス ロ ン	5 ア イ ス ホ ッ ケ ー	6 車 い す カ ー リ ン グ	7 わ か ら な い
1. 青木 大和(あおき やまと)	○	○	○	○	○	○	○
2. 阿部 友里香(あべ ゆりか)	○	○	○	○	○	○	○
3. 有安 諒平(ありやす りょうへい)	○	○	○	○	○	○	○
4. 市川 貴仁(いちかわ たかひと)	○	○	○	○	○	○	○
5. 岩本 啓吾(いわもと けいご)	○	○	○	○	○	○	○
6. 岩本 美歌(いわもと みか)	○	○	○	○	○	○	○
7. 大岩根 正隆(おおいわね まさたか)	○	○	○	○	○	○	○
8. 岡本 圭司(おかもと けいじ)	○	○	○	○	○	○	○
9. 小栗 大地(おぐり だいち)	○	○	○	○	○	○	○
10. 狩野 亮(かのう あきら)	○	○	○	○	○	○	○
11. 神山 則子(かみやま のりこ)	○	○	○	○	○	○	○
12. 川除 大輝(かわよけ たいき)	○	○	○	○	○	○	○
13. 小池 岳太(こいけ がつた)	○	○	○	○	○	○	○
14. 小須田 潤太(こすだ じゅんた)	○	○	○	○	○	○	○
15. 佐藤 圭一(さとう けいいち)	○	○	○	○	○	○	○
16. 鈴木 猛史(すずき たけし)	○	○	○	○	○	○	○
17. 高橋 幸平(たかはし こうへい)	○	○	○	○	○	○	○
18. 田中 佳子(たなか よしこ)	○	○	○	○	○	○	○
19. 田淵 伸司(たぶち しんじ)	○	○	○	○	○	○	○
20. 出来島 桃子(できしま ももこ)	○	○	○	○	○	○	○
21. 東海 将彦(とうかい まさひこ)	○	○	○	○	○	○	○
22. 新田 佳浩(にった よしひろ)	○	○	○	○	○	○	○
23. 原田 紀香(はらだ のりか)	○	○	○	○	○	○	○
24. 藤原 哲(ふじわら てつ)	○	○	○	○	○	○	○
25. 本堂 杏実(ほんどう あんみ)	○	○	○	○	○	○	○
26. 三澤 拓(みさわ ひらく)	○	○	○	○	○	○	○
27. 村岡 桃佳(むらおか ももか)	○	○	○	○	○	○	○
28. 森 宏明(もりひろあき)	○	○	○	○	○	○	○
29. 森井 大輝(もりい たいき)	○	○	○	○	○	○	○

Q3. あなたは、北京・パラリンピック(2022年)をテレビやインターネット動画で観戦しましたか？(いくつでも)

- 1. テレビで中継番組を観た
- 2. テレビのニュース番組で観た
- 3. テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た
- 4. インターネット動画で中継を観た
- 5. インターネット動画でニュース番組を観た
- 6. インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た
- 7. (テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した
- 8. テレビやインターネットで観戦しなかった

Q4.あなたが、テレビやインターネット動画で観戦した北京・パラリンピック(2022年)競技は何ですか。(いくつでも)

- 1. スノーボード
- 2. アルペンスキー
- 3. クロスカントリー
- 4. バイアスロン
- 5. アイスホッケー
- 6. 車いすカーリング
- 7. 開会式
- 8. 閉会式
- 9. わからない

※「観戦した」番組には、中継番組、ニュース番組、特集番組を含みます。

Q5. 北京・パラリンピック(2022年)をテレビやインターネットで観戦して、どう思いましたか。

	1	2	3	4
	よく当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
1. 障害者スポーツをテレビやインターネットで観戦したい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
2. 障害者スポーツを直接観戦したい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
3. 2026年 ミラノ・コルティナダンペッツォ・パラリンピックを直接観戦したい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
4. 障害者スポーツを体験したい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
5. 障害者スポーツのボランティアをしたい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
6. 2026年 ミラノ・コルティナダンペッツォ・パラリンピックにボランティアとしてかわりたい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
7. アスリートとして非常に優れていると感じた	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
8. 障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
9. 障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
10. 障害者と話がしたい、もっと知りたいと思った	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

Q6. あなたは日常生活の中で、障害のある人がスポーツを行う光景を見ることがありますか。

- 1. ある
- 2. ない

Q7.あなたが日常生活の中で見る、障害のある人が行っているスポーツの種目をお答えください。複数ある場合は、主なものを最大3つまでお書きください。

- 1. バスケットボール
- 2. テニス
- 3. ジョギング・ランニング
- 4. サッカー
- 5. 陸上競技
- 6. 水泳
- 7. ウォーキング
- 8. サイクリング
- 9. ゲートボール
- 10. 卓球
- 11. 野球
- 12. バレーボール
- 13. ボッチャ
- 14. 筋カトレーニング
- 15. ヨガ・ピラティス
- 16. その他【            】

Q8.あなたの身近に障害のある人がいますか。(いくつでも)

- 1. 自分自身が障害者である
- 2. 親族に障害のある人がいる
- 3. 職場に障害のある人がいる
- 4. 友人・知人に障害のある人がいる
- 5. 身近に障害のある人はいない

## 附録2

# パラリンピアンに対する社会的認知度調査 集計表

Q 1	あなたは、以下に示す人物について知っていますか。 単一回答	全体 (n)	1	2	3
			知っている	聞いたこと がある	知らない
1	青木 大和 (あおき やまと)	2,201	1.2	1.8	97.0
2	阿部 友里香 (あべ ゆりか)	2,201	1.2	2.4	96.4
3	有安 諒平 (ありやす りょうへい)	2,201	0.9	2.5	96.6
4	市川 貴仁 (いちかわ たかひと)	2,201	0.7	1.9	97.4
5	岩本 啓吾 (いわもと けいご)	2,201	0.9	2.5	96.6
6	岩本 美歌 (いわもと みか)	2,201	0.8	2.3	97.0
7	大岩根 正隆 (おおいわね まさたか)	2,201	0.8	1.6	97.6
8	岡本 圭司 (おかもと けいじ)	2,201	1.3	4.3	94.4
9	小栗 大地 (おぐり だいち)	2,201	1.0	3.5	95.5
10	狩野 亮 (かのう あきら)	2,201	0.9	2.6	96.5
11	神山 則子 (かみやま のりこ)	2,201	0.8	2.3	96.9
12	川除 大輝 (かわよけ たいき)	2,201	1.4	2.8	95.8
13	小池 岳太 (こいけ がつた)	2,201	0.7	2.6	96.7
14	小須田 潤太 (こすだ じゅんた)	2,201	0.8	2.0	97.2
15	佐藤 圭一 (さとう けいいち)	2,201	1.1	2.6	96.3
16	鈴木 猛史 (すずき たけし)	2,201	0.8	2.3	96.9
17	高橋 幸平 (たかはし こうへい)	2,201	1.0	3.1	95.9
18	田中 佳子 (たなか よしこ)	2,201	1.0	2.6	96.3
19	田淵 伸司 (たぶち しんじ)	2,201	1.1	2.2	96.7
20	出来島 桃子 (できじま ももこ)	2,201	0.8	2.4	96.8
21	東海 将彦 (とうかい まさひこ)	2,201	1.0	1.6	97.4
22	新田 佳浩 (にった よしひろ)	2,201	1.3	2.8	95.9
23	原田 紀香 (はらだ のりか)	2,201	1.3	2.1	96.5
24	藤原 哲 (ふじわら てつ)	2,201	0.9	3.0	96.1
25	本堂 杏実 (ほんどう あんみ)	2,201	0.8	2.1	97.1
26	三澤 拓 (みさわ ひらく)	2,201	1.0	2.3	96.8
27	村岡 桃佳 (むらおか ももか)	2,201	4.5	7.1	88.4
28	森 宏明 (もり ひろあき)	2,201	1.1	2.8	96.1
29	森井 大輝 (もりい たいき)	2,201	1.4	2.5	96.1

Q2	Q1であげた人は、北京・パラリンピック（2022年）に出場した選手です。「知っている」「聞いたことがある」と回答された選手の実施競技についてお答えください。 単一回答		全体 (n)	正答率 (%)
1	青木 大和（あおき やまと）	アルペンスキー	65	10.8
2	阿部 友里香（あべ ゆりか）	クロスカントリー・バイアスロン	79	20.3
3	有安 諒平（ありやす りょうへい）	クロスカントリー	74	12.2
4	市川 貴仁（いちかわ たかひと）	スノーボード	57	14.0
5	岩本 啓吾（いわもと けいご）	クロスカントリー	75	4.0
6	岩本 美歌（いわもと みか）	クロスカントリー	67	16.4
7	大岩根 正隆（おおいわね まさたか）	スノーボード	52	15.4
8	岡本 圭司（おかもと けいじ）	スノーボード	123	21.1
9	小栗 大地（おぐり だいち）	スノーボード	100	11.0
10	狩野 亮（かのう あきら）	アルペンスキー	77	15.6
11	神山 則子（かみやま のりこ）	アルペンスキー	69	11.6
12	川除 大輝（かわよけ たいき）	クロスカントリー	92	27.2
13	小池 岳太（こいけ がつた）	アルペンスキー	72	11.1
14	小須田 潤太（こすだ じゅんた）	スノーボード	62	12.9
15	佐藤 圭一（さとう けいいち）	クロスカントリー・バイアスロン	82	17.1
16	鈴木 猛史（すずき たけし）	アルペンスキー	68	14.7
17	高橋 幸平（たかはし こうへい）	アルペンスキー	91	9.9
18	田中 佳子（たなか よしこ）	アルペンスキー	81	17.3
19	田淵 伸司（たぶち しんじ）	スノーボード	73	9.6
20	出来島 桃子（できじま ももこ）	クロスカントリー・バイアスロン	70	24.3
21	東海 将彦（とうかい まさひこ）	アルペンスキー	58	15.5
22	新田 佳浩（にった よしひろ）	クロスカントリー	90	24.4
23	原田 紀香（はらだ のりか）	アルペンスキー	76	11.8
24	藤原 哲（ふじわら てつ）	アルペンスキー	85	9.4
25	本堂 杏実（ほんどう あんみ）	アルペンスキー	64	17.2
26	三澤 拓（みさわ ひらく）	アルペンスキー	71	16.9
27	村岡 桃佳（むらおか ももか）	アルペンスキー	256	46.9
28	森 宏明（もり ひろあき）	クロスカントリー	86	12.8
29	森井 大輝（もりい たいき）	アルペンスキー	86	22.1

※複数競技に出場した選手の正答率は、それぞれの競技のの合計値



Q3	あなたは、北京・パラリンピック（2022年）をテレビやインターネット動画で観戦しましたか？（いくつでも） 複数回答	%
1	テレビで中継番組を観た	31.3
2	テレビのニュース番組で観た	42.9
3	テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た	7.7
4	インターネット動画で中継を観た	3.0
5	インターネット動画でニュース番組を観た	3.4
6	インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た	1.5
7	（テレビやインターネットの）その他の方法で観戦した	0.8
8	テレビやインターネットで観戦しなかった	43.1
	全体（n）	2,201

Q4	あなたが、テレビやインターネット動画で観戦した北京・パラリンピック（2022年）競技は何ですか。（いくつでも） ※「観戦した」番組には、中継番組、ニュース番組、特集番組を含みます。 複数回答	%
1	スノーボード	28.7
2	アルペンスキー	29.4
3	クロスカントリー	14.2
4	バイアスロン	5.5
5	アイスホッケー	10.9
6	車いすカーリング	5.9
7	開会式	39.3
8	閉会式	22.9
9	わからない	21.8
	全体（n）	2,201

Q5	北京・パラリンピック（2022年）をテレビやインターネットで観戦して、どう思いましたか。 単一回答	全体 (n)	1	2	3	4
			よく当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
1	障害者スポーツをテレビやインターネットで観戦したい	1,253	6.4	33.5	40.5	19.6
2	障害者スポーツを直接観戦したい	1,253	3.6	20.0	48.1	28.3
3	2026年 ミラノ・コルティナダンベッツォ・パラリンピックを直接観戦したい	1,253	3.3	12.5	45.2	39.1
4	障害者スポーツを体験したい	1,253	3.1	16.0	46.4	34.5
5	障害者スポーツのボランティアをしたい	1,253	2.6	18.9	46.2	32.3
6	2026年 ミラノ・コルティナダンベッツォ・パラリンピックにボランティアとしてかかわりたい	1,253	2.3	10.4	41.2	46.1
7	アスリートとして非常に優れていると感じた	1,253	25.7	35.4	22.4	16.4
8	障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた	1,253	16.0	39.7	28.0	16.4
9	障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた	1,253	13.4	41.8	29.1	15.7
10	障害者と話がしたい、もっと知りたいと思った	1,253	6.9	31.6	42.1	19.4

Q6	あなたは日常生活の中で、障害のある人がスポーツを行う光景を見ることがありますか。 単一回答	%
1	ある	7.9
2	ない	92.1
全体 (n)		2,201

Q7	あなたが日常生活の中で見る、障害のある人が行っているスポーツの種目をお書きください。複数ある場合は、主なものを最大3つまでお答えください。	%
1	バスケットボール	29.9
2	テニス	17.2
3	ジョギング・ランニング	19.0
4	サッカー	10.9
5	陸上競技	16.1
6	水泳	20.7
7	ウォーキング	14.9
8	サイクリング	2.9
9	ゲートボール	1.7
10	卓球	4.6
11	野球	5.7
12	バレーボール	1.7
13	ボッチャ	12.1
14	筋力トレーニング	5.7
15	ヨガ・ピラティス	3.4
16	その他	6.9
	全体 (n)	174

Q7	あなたの身近に障害のある人がいますか。(いくつでも)複数回答	%
1	自分自身が障害者である	4.0
2	親族に障害のある人がいる	10.9
3	職場に障害のある人がいる	6.1
4	友人・知人に障害のある人がいる	7.0
5	身近に障害のある人はいない	75.2
	全体 (n)	2,201

## 附録 3

### ユニ★スポ調査票

『チャレンジ！ ユニ★スポ』<sup>かいめ</sup>1回目アンケート』<sup>じぜんがくしゅうまえ</sup>(事前学習前)

Q1. あなたの性別は？(どれかに○) <sup>おとこ</sup>男 <sup>おんな</sup>女 <sup>こたえたくない</sup>こたえたくない

Q2. 学校名と学年は？ <sup>しょう</sup>小・<sup>ちゅうがっこう</sup>中学校 <sup>ねんせい</sup>年生

Q3. 次の文を読んで、あなたの気持ちに近いものに○をつけてください。(どれかに○)

- 1) 障害のある人と仲良くできる？  
はい ・ いいえ ・ わからない
- 2) 障害のある人と一緒にスポーツできる？  
はい ・ いいえ ・ わからない
- 3) 一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう？  
はい ・ いいえ ・ わからない

Q4. 東京2020 オリンピック・パラリンピックに興味ありますか？(どれかに○)

- ( ) どちらも興味ある ( ) オリンピックだけ興味ある  
( ) パラリンピックだけ興味ある ( ) どちらも興味なし

Q5. 知っている障がい者スポーツがあれば種目名を書いてください。(知っている人だけ)

Q6. 「障害」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- ( ) 困っている ( ) 個性的 ( ) 手伝いが必要  
( ) 不便なことがある ( ) その人らしさ ( ) リハビリ  
( ) 自由に動けない ( ) できることがある ( ) 単いす

Q7. 「障害者スポーツ」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。

- ( ) 楽しそう ( ) 大変そう ( ) チャレンジしてみたい  
( ) 不便 ( ) 激しい ( ) 障害者のためのもの

<sup>しつもん</sup>※質問は裏にもあります。<sup>うら</sup>裏に進んでください。<sup>うら</sup> <sup>すす</sup>

**Q8. 障害のある友達とスポーツする為に必要なものを以下から必ず3つ選んでください。**

- ( ) 障害者スポーツに詳しい先生やコーチ ( ) スポーツのルールを変えること  
 ( ) 障害者スポーツの本や資料 ( ) 障害のある友達と相談すること  
 ( ) 障害者スポーツ専用の道具や場所 ( ) サポートすること

**Q9. 体育の授業でバスケットボールの試合をすることになりました。自分のチームメイトに居る「車いすに乗っている、手足をうまく動かせない友だち」と一緒にバスケットを楽しむために必要だと思うことを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)**

- ( ) 友だちがうまくなるように、練習をがんばってもらう  
 ( ) 友だちも楽しめるように、ルールを変える  
 ( ) あまりボールを渡さないようにしてあげる  
 ( ) みんなが車いすにのって、車いすバスケットをする  
 ( ) 無理をさせず、得点係や応援で頑張ってもらう  
 ( ) ボールを使いやすいものに変える

**※ここからはあなたのコードづくりです。書きたくなければ書かなくても構いません。**

<書き方は以下を参考にしてください>

- あなたの苗字の最初の文字 : 苗字 山田 (やまだ) → **や**
- あなたの名前の最初の文字 : 名前 花子 (はなこ) → **は**
- 誕生日 : 8月 → **8**
- 誕生日の最初の数字 : 25日 → **2**
- 出席番号の下2桁 : 350番 → **50**

あなたの苗字の最初の文字(平かな)	あなたの名前の最初の文字(平かな)	誕生日	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁
<b>や</b>	<b>は</b>	<b>8</b>	<b>2</b>	<b>50</b>

上の説明を読んで、以下の欄に記入してください。

あなたの苗字の最初の文字(平かな)	あなたの名前の最初の文字(平かな)	誕生日	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁

『チャレンジ！ ユニ★スポ』 2回目アンケート (体験会直後)

Q1. あなたの性別は？ (どれかに○) 男 女 こたえたくない

Q2. 学校名と学年は？ \_\_\_\_\_ 小・中学校 年生

Q3. 次の文を読んで、あなたの気持ちに近いものに○をつけてください。(どれかに○)

- 1) 障害のある人と仲良くできる？  
はい ・ いいえ ・ わからない
- 2) 障害のある人と一緒にスポーツできる？  
はい ・ いいえ ・ わからない
- 3) 一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう？  
はい ・ いいえ ・ わからない

Q4. ボッチャの感想であなたの気持ちに近いものに○をつけてください。(いくつでも)

- ( ) 思っていたより面白かった ( ) 思っていたとおりがった
- ( ) 思っていたほど面白くなかった ( ) 面白くなかった
- ( ) 友達とボッチャをやってみたい ( ) ボッチャ以外の障害者スポーツをやってみたい

Q5. 「障害」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- ( ) 困っている ( ) 個性的 ( ) 手伝いが必要
- ( ) 不便なことがある ( ) その人らしさ ( ) リハビリ
- ( ) 自由に動けない ( ) できることがある ( ) 重いです

Q6. 「障害者スポーツ」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。

- ( ) 楽しそう ( ) 大変そう ( ) チャレンジしてみたい
- ( ) 不便 ( ) 激しい ( ) 障害者のためのもの

※質問は裏にもあります。裏に進んでください。

Q7. 障害のある友達とスポーツする為に必要なものを以下から必ず3つ選んでください。

- ( ) 障害者スポーツに詳しい先生やコーチ ( ) スポーツのルールを変えること  
 ( ) 障害者スポーツの本や資料 ( ) 障害のある友達と相談すること  
 ( ) 障害者スポーツ専用の道具や場所 ( ) サポートすること

Q8. 体育の授業でバスケットボールの試合をすることになりました。自分のチームメイトに居る「車いすに乗っている、手足をうまく動かせない友だち」と一緒にバスケットを楽しむために必要だと思うことを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- ( ) 友だちがうまくなるように、練習をがんばってもらう  
 ( ) 友だちも楽しめるように、ルールを変える  
 ( ) あまりボールを渡さないようにしてあげる  
 ( ) みんなが車いすにのって、車いすバスケットをする  
 ( ) 無理をさせず、得点係や応援で頑張ってもらう  
 ( ) ボールを使いやすいものに変える

※ここからはあなたのコードづくりです。書きたくなければ書かなくても構いません。

<書き方は以下を参考にしてください>

- あなたの苗字の最初の文字 : 苗字 山田 (やまだ) → や
- あなたの名前の最初の文字 : 名前 花子 (はなこ) → は
- 誕生月 : 8月 → 8
- 誕生日の最初の数字 : 25日 → 2
- 出席番号の下2桁 : 350番 → 50

あなたの苗字の最初の文字(平かな)	あなたの名前の最初の文字(平かな)	誕生月	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁
や	は	8	2	50

上の説明を読んで、以下の欄に記入してください。

あなたの苗字の最初の文字(平かな)	あなたの名前の最初の文字(平かな)	誕生月	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁



『チャレンジ！ ユニ★スポ』3回目アンケート (体験会から数ヵ月後)

Q1. あなたの性別は？ (どれかに○) 男 女 こたえたくない

Q2. 学校名と学年は？ 小・中学校 年生

Q3. 次の文を読んで、あなたの気持ちに近いものに○をつけてください。(どれかに○)

- 1) 障害のある人と仲良くできる？  
はい ・ いいえ ・ わからない
- 2) 障害のある人と一緒にスポーツできる？  
はい ・ いいえ ・ わからない
- 3) 一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう？  
はい ・ いいえ ・ わからない

Q4. 「障害」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- ( ) 困っている ( ) 個性的 ( ) 手伝いが必要  
( ) 不便なことがある ( ) その人らしさ ( ) リハビリ  
( ) 自由に動けない ( ) できることがある ( ) 重い

Q5. 「障害者スポーツ」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。

- ( ) 楽しそう ( ) 大変そう ( ) チャレンジしてみたい  
( ) 不便 ( ) 激しい ( ) 障害者のためのもの

Q6. 障害のある友達とスポーツする為に必要なものを以下から必ず3つ選んでください。

- ( ) 障害者スポーツに詳しい先生やコーチ ( ) スポーツのルールを変えること  
( ) 障害者スポーツの本や資料 ( ) 障害のある友達と相談すること  
( ) 障害者スポーツ専用の道具や場所 ( ) サポートすること

※質問は裏にもあります。裏に進んでください。

Q9. 体育の授業でバスケットボールの試合をすることになりました。自分のチームメイトに居る「重いすに乗っている、手足をうまく動かせない友だち」と一緒にバスケットを楽しむために必要だと思うことを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- ( ) 友だちがうまくなるように、練習をがんばってもらう
- ( ) 友だちも楽しめるように、ルールを変える
- ( ) あまりボールを渡さないようにしてあげる
- ( ) みんなが重いすにのって、重いすバスケットをする
- ( ) 無理をさせず、得点係や応援で頑張ってもらおう
- ( ) ボールを使いやすいものに変える

※ここからはあなたのコードづくりです。書きたくなければ書かなくても構いません。

<書き方は以下を参考にしてください>

- あなたの苗字の最初の文字 : 苗字 山田 (やまだ) → や
- あなたの名前の最初の文字 : 名前 花子 (はなこ) → は
- 誕生月 : 8月 → 8
- 誕生日の最初の数字 : 25日 → 2
- 出席番号の下2桁 : 350番 → 50

あなたの苗字の最初の文字(平かな)	あなたの名前の最初の文字(平かな)	誕生月	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁
や	は	8	2	50

上の説明を読んで、以下の欄に記入してください。

あなたの苗字の最初の文字(平かな)	あなたの名前の最初の文字(平かな)	誕生月	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁

『チャレンジ！ユニ★スポ』アンケート (体験会から約1年経過後)

Q1. あなたの性別は？ (どれかに○) 男 女 こたえたくない

Q2. 学校名と学年は？ \_\_\_\_\_ 小・中学校 卒業

Q3. ボッチャ体験会のあと、ボッチャをやる機会がありましたか。(どれかに○)

1) やる機会があった。 ・ なかった ・ 覚えていない。

↓

2) やる機会があった人は、何回ぐらいやりましたか？

1～3回ぐらい ・ 4～6回ぐらい ・ 7回以上

Q4. 次の文を読んで、あなたの気持ちに近いものに○をつけてください。(どれかに○)

1) 障害のある人と仲良くできる？

はい ・ いいえ ・ わからない

2) 障害のある人と一緒にスポーツできる？

はい ・ いいえ ・ わからない

3) 一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう？

はい ・ いいえ ・ わからない

Q5. 「障害」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

( ) 困っている ( ) 個性的 ( ) 手伝いが必要

( ) 不便なことがある ( ) その人らしさ ( ) リハビリ

( ) 自由に動けない ( ) できることがある ( ) 重い

Q6. 「障害者スポーツ」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。

( ) 楽しそう ( ) 大変そう ( ) チャレンジしてみたい

( ) 不便 ( ) 激しい ( ) 障害者のためのもの

※質問は裏にもあります。裏に進んでください。

Q7. 障害のある友達とスポーツする為に必要なものを以下から必ず3つ選んでください。

- ( ) 障害者スポーツに詳しい先生やコーチ ( ) スポーツのルールを変えること  
 ( ) 障害者スポーツの本や資料 ( ) 障害のある友達と相談すること  
 ( ) 障害者スポーツ専用の道具や場所 ( ) サポートすること

Q8. 体育の授業でバスケットボールの試合をすることになりました。自分のチームメイトに居る「車いすに乗っている、手足をうまく動かせない友だち」と一緒にバスケットを楽しむために必要だと思うことを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- ( ) 友だちがうまくなるように、練習をがんばってもらう  
 ( ) 友だちも楽しめるように、ルールを変える  
 ( ) あまりボールを渡さないようにしてあげる  
 ( ) みんなが車いすにのって、車いすバスケットをする  
 ( ) 無理をさせず、得点係や応援で頑張ってもらう  
 ( ) ボールを使いやすいものに変える

※ここからはあなたのコードづくりです。書きたくなければ書かなくても構いません。

<書き方は以下を参考にしてください>

- あなたの苗字の最初の文字 : 苗字 山田 (やまだ) → や
- あなたの名前の最初の文字 : 名前 花子 (はなこ) → は
- 誕生月 : 8月 → 8
- 誕生日の最初の数字 : 25日 → 2
- 出席番号の下2桁 : 350番 → 50

あなたの苗字の最初の文字(平がな)	あなたの名前の最初の文字(平がな)	誕生月	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁
や	は	8	2	50

上の説明を読んで、以下の欄に記入してください。

あなたの苗字の最初の文字(平がな)	あなたの名前の最初の文字(平がな)	誕生月	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁



## 調査報告書の各種データについて

本報告書の各種データは当財団ホームページにて公開しています。

報告書のPDF データの他に、調査票データ等も公開予定です。

🔍 検索

公益財団法人  
ヤマハ発動機スポーツ振興財団  
Yamaha Motor Foundation for Sports

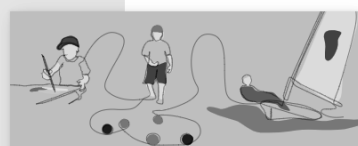
[当財団について](#) [スポーツ体験促進事業](#) [チャレンジ支援事業](#) [調査研究活動](#) 🔍

# 未来を、拓こう。

スポーツのちからで。  
挑戦するところで。

スポーツ体験促進

チャレンジ支援



### スポーツ体験促進事業

体験を通じてスポーツの素晴らしさを伝える事業領域

[詳しく見る](#) →



### チャレンジ支援事業

スポーツを通じて未来人材の成長を支援する事業領域

[詳しく見る](#) →



2022(令和4)年度

障害者スポーツを取巻く社会的環境に関する調査研究

- 選手のキャリア、TV放送、選手認知度、テレビCF放送、ユニ★スポ体験の効果に着目して -

2023年3月 発行

発行者 公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団

Yamaha Motor Foundation for Sports (YMFS)

〒438-8501 静岡県磐田市新貝 2500

TEL 0538-32-9827 FAX 0538-32-1112

ISBN 978-4-9910824-4-3

© ヤマハ発動機スポーツ振興財団

本報告書の内容を引用された場合、その掲載部分の写しをYMFSにご送付ください。







公益財団法人  
**ヤマハ発動機スポーツ振興財団**  
Yamaha Motor Foundation for Sports

ISBN 978-4-9910824-4-3

2022(令和4)年度

**障害者スポーツを取巻く社会的環境に関する調査研究**

— 選手のキャリア、TV放送、選手認知度、テレビCF放送、ユニ★スポ体験の効果に着目して —